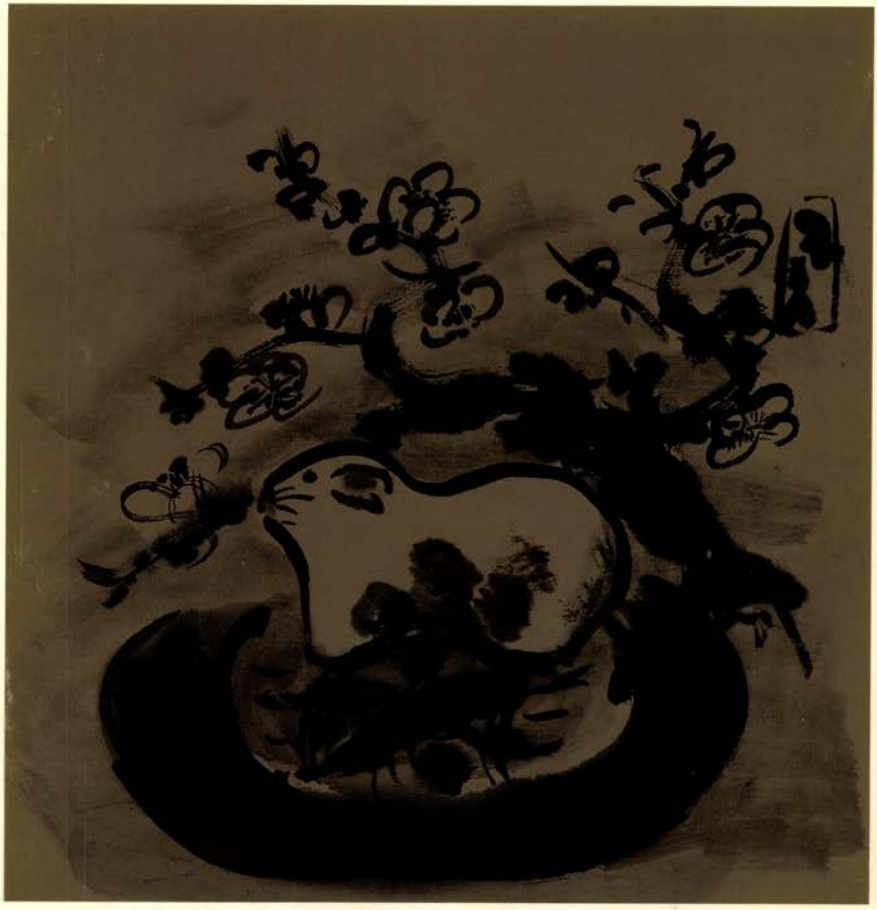
# 川柳塔

創刊大正十三年　通巻八二四号



日川協加盟

同人特集・私の一句

No. 824

一月号

頒価三千円
（送料三百十円）

## 序　視野無限　この言葉に尽く

麻生路郎

恋人の膝は檸檬のまるさかな
労働歌蟻が歌えば凄かろう
睡蓮は万丈光の源よ
亡母の闇この世は雨が降っています
走馬灯花も犬ほど走るなり
老いてしずけし淫の字も姦の字も
蹈鞴踏む阿形吽形人間座
富士山の藍に一礼してしまう

発行所　沖積舎
101東京都千代田区神田神保町一－五二
電話　〇三・三二九一・五八九一番
振替　東京　三－一七七六三二番
（川柳塔社でも取次ぎます）

---

**第2回　鳥取県民文化祭参加**

# 第19回　鳥取県川柳大会

**とき**　3月31日（日）午前9時開場
**ところ**　鳥取県東伯郡東郷町　国民宿舎「水明荘」
（☎〇八五八－三二－〇四二一　山陰本線松崎駅から徒歩5分）

**兼題と選者**
「　鳥　」　河内月子選
「湧　く」　原　宣子選
「　弓　」　灰原泰子選
「やっぱり」　奥田勝子選
「　芸　」　土橋　螢選
「気ままま」　金山夕子選
「流　行」　上田宣子選
「普　通」　米田幸子選

**出句締切**　午前11時半（各題2句・席題なし）
**会　費**　出席者　2000円（作品集・昼食呈）
欠席投句者　1000円（作品集呈）
**投句締切**　3月20日必着
**投句先**　〒689-23　鳥取県東伯郡東伯町徳万597
新家完司方　第19回鳥取県川柳大会実行委員会宛
**おねがい**　前泊希望者および夕食会出席希望者は、3月10日までに実行委員会へお知らせください。
1泊2食　13000円　夕食会のみ　5000円
主　催　鳥取県川柳作家協会・鳥取県
鳥取県民文化祭実行委員会

# 新年新生

橘高　薫風

新年明けましておめでとうございます。

今年は西尾栞先生の

元旦や我れ泰山の如く座す

の色紙を床に掛け、しずかに新年を迎えました。句のような心境にはついにも成れぬことと思いながら、先生の境地に近づけるよう精進したいと思います。

「川柳は人間陶冶の詩」という路郎語録とともに私の大きな指針と受け取れる一句となりました。

旧臘、きゃらぼく忘年句会の後、先生ご推奨の海潮温泉へ足を伸ばし、海潮荘の岩風呂に浸りひとりごちながら、そして翌朝には、夜中降り積った庭の雪を見ながら、囲炉裏を囲んで頂いた朝粥の味に、先生との四十年のご厚誼に心からのお礼を申して参りました。

また古稀に際して『古稀薫風』なる第五句集を、予定より大幅に遅れながらも上梓することが出来ました。おかしなことに、川柳塔社主幹となりました今、句集を手にしてとても恥ずかしいことに思えるのです。路郎・栞両先生のご生前には何らの抵抗もなしに句集を出し、奔放に振舞ってきたことなのに、これでよいのか、という思いが強く致します。

第四句集『愛染』以来十年、月々五冊ほどずつ寄贈を受けた句集や自分史が六百人を越えるリストとなり、その方々に謹呈する分はよしとするも、買って頂くことに何故か当然とは思えぬ思いが兆してくるのです。この思いは各地で催される川柳大会の選者に招待されることにも感じはじめています。句集を出すこと、大会の選を担当することも、慣れてしまうと当然のような顔で済ます思い上りに恥ずかしさがじんじん押し寄せて来ます。

主幹としての厳しさと責任を感じる器量の人になれと、両先生からの声なき声のせいかも知れません。

それ故、私は新年に際して再出発、一から出直すつもりで書棚に句集『旅人』と『水鶏笛』だけを残し、すべて納戸に蔵うことにしました。私は句集『旅人』に接し、これが川柳か、このような文芸なら挑戦してみたいと志を立てて路郎先生に師事したので、先生の句が目標でしたし、四十年、右顧左眄せずに来たので今更句風の変ることはないでしょうが、もう一度将来の川柳を考えながら進みたく思います。

所詮、それぞれの作者が「自分自身の句を創る」こと以外に道はないのですから、そしてその集大成が川柳塔なのですから、たのしく厳しく、皆さんとともども進みたく思います。

座右の句
人の世や嗚呼にはじまる広辞苑　（薫風）
私の句
味方だけの暗号ぼくは聞いてない　指宿　千枝子

# 川柳塔　一月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青


■巻頭言　新年新生……橘高薫風……(1)
子年の春……東野大八……(2)
川柳塔（同人吟）……橘高薫風選……(4)
自選集……(42)
川柳の群像　西尾　栞……東野大八……(46)
古川柳　柳籠裏二篇研究（二十八丁）……(48)
私の一句〈同人特集〉……(50)
大空のこころ(60)……橘高薫風……(63)
水煙抄……西田柳宏子選……(66)
秀句鑑賞
同人吟……新家完司……(64)
水煙抄……亀岡哲子……(89)


## 子年の春

東野大八

ねずみにみつめられて
女が悲鳴をあげるのは
〈今日〉で化粧した肌が
裏返しに凌辱されたり
〈現在〉ばかり詰っている内臓が
ひっかきまわされるからにちがいない
平光善久

ことしは子（鼠）の年だそうだ。

ねずみが、蛇とともに十二支のチャンピオンになっていることはどうも解せない。

百余年も経った古屋敷に入っていたころ、「喜悦」というか、「悲鳴」というか、やけに甲高い音波で枕許近くで騒がれた私は、シン底からアタマへきて、好きでもないネコまで飼ったが、衆をたのむ文字通りのこの鼠輩の傍若無人さは〈窮鼠かえって〉の諺通りだ。

ネズミの両親が正月に十二匹生んだとすると、次の二月にその子供がまた十二匹の子を作る—このようにして一年経ったらどういう推算になるか。なんとその総数は二百七十六億八千二百五十七万四千四百二匹という途方

渺湖抄……小出智子選……(90)
茴香の花……八木千代選……(94)
「夢」……平田実男選……(96)
一路集「日記」……桑原道夫選……(96)
「迎える」……安藤寿美子選……(97)
初歩教室「愛」……吉岡美房……(98)
きゃらぼく忘年句会に参加して……山本希久子……(93)
各地柳壇（佳句地十選／土橋はるお）……(100)
十二月本社句会……(113)
■各地句会だより　川柳塔おっぱこ吟社……木村あきら……(117)
柳界展望……(118)
一月各地句会案内……(145)
■編集後記……(146)

座右の句

父親の懐ふかき凧の糸　（薫風）

私の句

父母逝ってからの此の世は白く見え　小倉　藍

もない数になるそうな（参考・電波新聞）。

中国では、昔は星が散じて鼠になったといわれているから、右のネズミ算だけにおいそれと勘定できなかったことに由来するようだ。

焚書抗儒の秦の悪宰相李斯は、小役人のころ、不潔なものをビクビクして食べているトイレの鼠にくらべて、官の穀倉に巣食う鼠はタラフク官米を食い、マルマル肥え太り、犬族や人間どもは近寄れぬその天地で悠々自適しているのをみて、「人の賢不肖は、たとえれば鼠の如し。自ら拠る所に在るのみ」とサトリを開き、ついに大臣にまでなり、存分にワイロと権勢をほしいままにしたそうな。

いま、世界の随処で、大統領クラスが不正な蓄財で騒がれているのをみると、官米で自適どころか、自らその拠る所を誤った、という次第で、川柳三昧に通じそうな話だ。

また、中国の話になるが、苛斂誅求、民の膏血をしぼりとる悪い高官のことを「碩鼠」という。詩経の中のこの碩鼠には「頭の黒い大きな鼠、看取せよ人間五枝の窮するを」という、怨嗟呪詛に満ちた章句がある。日本の江戸期には、これが「白鼠」と扱われ、なんとなく可愛い。こうなると、ある学者の家に盗みに入り、天井裏に潜むのを知った主人が、上を見上げて「梁上の君子」の一語で開悟せしめた話と合わせ、子年も満更でもなさそうだ。

# 橘高薫風選

堺市　桑原道夫

姦淫する勿れとポスト立っている
鴉あるくつよき色垂れ流しつつ
わが耳朶の薄くて牡蠣鍋旨し旨し
男一人何をこっそり掃いている
永劫につづく卵を割る仕事
鷹に飼われつつ男恍惚たり

富士宮市　渥美弧秀

どよめきが万歳となる日の出富士
〝愛の讃歌〟弾けば厨で妻の歌
妻の振るタクトに乗ってアンダンテ
障害を越えて妻との五十年
神の富士オウムの暗い雲かかり
夕映えの富士眼のあたり妻と酌む

鳥取県　新家完司

ご先祖も弱かったのか軽い槍
犬までは騙し切れずに吠えられる
少年よどんどん靴を履き潰せ
腹が減ったと叫んでみても妻は留守
英会話習った妻がハウアーユー
伴奏もなく消えるのは寂しいね

竹原市　小島蘭幸

旅はよし家族で一つ部屋に寝る
一年に一度は会っている握手
入院をして美しくなっている
30年満期いのちが輝いた
塾から塾へ明るい顔をしているか
手の届くとこになんでもある書斎

弘前市　高瀬霜石

土砂降りに遇ってちょっぴり若返る
第一にまず人間としてどうだ
発言の前に眼鏡を拭いてみる
わかってはいるがつい鳴る喉仏
悪人の見事に無駄のない動き
にんげんによく似てカラス嫌われる

米子市　林瑞枝

産声の響いて虹は弓なりに
乙女座におんなの思慕が溜めてある
朝の陽にかざす生みたての卵
少しロマンチックに推敲する昨日
恋をした案山子が弓を引いている
芝居はじまる雪おこしの雷

鳥取県　上田俊路

物分かりよすぎて痛みわからない
政治家に基地持つ痛み分かるまい
紅葉映えモデルがかすむカメラアイ
言い訳の空欄一つあけておく
倒産に失業知らぬ記者が来る
張り込みの記者サティアンのかぜをひく

五所川原市　斉藤劦

真ん丸い石　真ん丸い苔をつけ
赤蜻蛉の空よりりんご頂けり
本人はいじめていると思わない
十一月三日勲章の葬列に
一冊を購おう木枯らし染みるから
教え子が自慢のりんご持って来る

羽曳野市　榎本吐来

得意満面　妻の無言にしてやられ
夢賭ける二階は漫画本の山
粗大ゴミじゃないぞよ今日は年金日
ワンマンが妻の横顔盗み見る
ごますりを肴にしてるボーナス日
亡父亡母が夢路に庭の柿熟れる

岸和田市　高須賀金太

用便に立って瀕死の虫を聞き
大根の白さに嘘はありません
立冬やエアコン暖に切り替える
午後六時タヌキぞろぞろ居酒屋に
不純物ぜんぶ除くと味がない
病んだのか直線がゆがんで見える

大阪市　川端一歩

花嫁の父をやるよと友の文
旭屋さん足がとどかぬ高いビル
広辞苑　広辞林も来て句を判じ

学生の会話も馳走　京の旅
名作が均一本となる文化
勲章を辞すひとことも名女優

西宮市　西口いわゑ

彼岸花　苦楽を越えた顔に見え
満月へかすかによぎる罪ひとつ
心の奥の鏡をそっと出してみる
寄り添うた姉妹のような串だんご
美しい山が突然人さらう
ころころとりんご転んで絵の中へ

和歌山市　堀畑靖子

わけもなくつんつんつんと更年期
がぎぐげご濁る都会の水空気
次の世は何に宿そうこの命
たましいを沈める秋の酒甘露
父も子も欲なし円を描くとんび
秋風は何度も吹いたけど夫婦

富田林市　池森子

わたしの中の私を見よと秋の青
善人の仮面を修理して使う
ゆっくりと手を握り合う枯葉たち
出口まだ見えずに歩く冬通り
たった一度の縁日だった火祭よ
その奥へ敵意をかくすひと呼吸

黒石市　千葉風樹

胎児への吊り橋揺れてばかりいる
年輪の中心にある原爆忌
蟬ひと声鳴いて命をたしかめる
癌のままでも生きてていいのよねえあなた
ねぎ刻む音が瓦礫を粉にする

弘前市　浅田隆樹

二歳児の握力　母にしがみつく
妻の愚痴聞いて疲れのとれる夜
憤ることあり星の美しい
コスモスが咲いていたんだ秋の風
墓参りたしかに父がそこにいる

弘前市　肥後和香子

ゆったりの曲線静か寒立馬
哀しみが太りだす故ダイエット
泣かすこと言う息子と飲む秋の水
れんこんを切るよにゆかぬ男達
愛冬眠させて男は立ち上がる

十和田市　阿部進

我が家には優しく怖い妻が居る
出番ないこと祈ります非常食
いいことが続き光陰矢の如し
乳ばなれできぬ子指をしゃぶり出し
昇る陽と沈む夕陽が何故でかい

青森県　田中　叶

トイレットペーパーの芯その一つ
また次の雨の日来ます古本屋
信号の向う側でも欠伸して
目の前の好青年にあるホクロ
あとかたもなし矢印がまだ残り

青森県　佐治　千加子

何ごとも無くて本日いのちあり
初雪に沈黙深き菊の花
瞑想の男イルカになった海
こだわりをそのままにして　海　落日
寒冷前線　只今通過中の薔薇

大阪市　西出　楓楽

かもめーるの当り見ぬ間に年賀状
自信喪失　床の間に花ない日なり
秋なすびとかく女は御し難し
歩かんか仏が肩をたたくまで
小春日へぶらり来そうな山頭火

大阪市　稲本　凡子

娘の家へ行くにも三猿忘れない
本積んで待ってた秋が通り過ぎ
金かけぬおしゃれに凝っているわたし
よう飲まぬ酒を遠慮と思われる
手拍子が弾んで幹事いそがしい

大阪市　阪東　倫子

先妻も後妻も生まれはねずみ年
小春日和チンチン電車の客となる
置炬燵で五目並べの老姉妹
友逝った朝に木枯し第一号
ほおづえの思案よしなしごとばかり

堺市　藤井　一二三

舞姿ひとさし秋の風に消ゆ（藤本澄子さんを悼む）
まだ炎ゆるものあり古希を寄せつけず
また村のすがたを消してカーポート
愛想づかしの口調も五七五になり
タテマエとホンネの違うだけ歪む

豊中市　安藤　寿美子

にらみ鯛　嫁と姑　年女
又同じ昔話をしてしまう
人生観変るその日の体調で
風邪ひいているシャンソンを聞いている
梅干しや風邪ぶり返しぶり返し

豊中市　田中　正坊

昨日　今日　明日の中にいる私
十年日記どっこいしょと六年目
ときどきは愛を研いている夫婦
大ぜいの死者に守られ生きている
孫たちに会う約束のお正月

吹田市　山本　希久子

防災鞄一年無事に過ぎました
逃げるときは風　追うとき火となりぬ
風除けの男の背なも寒そうだ
いつもの角でさよならをしてひとりぼち
無視された椅子で居眠りする父よ

寝屋川市　江口　度

己れの足を食べてる蛸という余生
タイムカード置きましょうかと言う喫茶
俺にだってワッと泣きたい時もある
わるさもするさ　からすに帰る森がない
賞めてから叱るとちゃんと聞いてくれ

寝屋川市　柴田　英壬子

欲しいもの押さえ要るもの買う師走
濃い茶のむ濃ゆい想いを生むために
何と気高い何て可愛い新生児
赤ちゃんは裸が怖い背を丸め
恬淡とすごす正月三カ日

寝屋川市　岸野　あやめ

昨年のビデオに亡夫のお元日
あなたごめんね　わたし元気になりました
何となく思いちがいをしそうな日
おとぼけのすべも知らずに老いゆくか
娘とわたし空気の壁を超えがたく

藤井寺市　吉岡　美房

朝はもうどっちでもよい目が覚める
木枯しが母へ手紙を書けという
ホームレス無事に渡れた御堂筋
来年に備えて鬼を宥めてる
飾っても無駄だと妻に言えますか

羽曳野市　吉川　寿美

新年の帳が音もなく上がる
百の指切りいくつ裏切る風車
去年の今日が瓦礫の下にうずくまる
余命いくばく病妹に何もしてやれぬ
生と死の狭間で雨の音をきく

八尾市　宮西　弥生

土いじりくらしの彩にそえて秋
前向きもよいが昔もふりかえる
席ゆずる気持はあるが眠りたし
肩書を脱げば男もよく笑う
両親を看ながら白衣の職にある

富田林市　松本　今日子

波風は立てたくないの卵焼
しわくちゃの手に花束が渡される
父と母出会った場所に立っている
ピアノ弾く子どもが住んでいた空地
正面に満月見える私の部屋

尼崎市　田中　薫

トラックの豚と眼の合う秋日和
廊下いくたびおみなおのことすれ違う
季節はずれのぼくの貧乏伝説
わびしくて酒の苦きを人には告げず
山の塔　時雨のあとを華やぎぬ

尼崎市　春城武庫坊

雲の行方を風に聞いてる鯖街道
秋を秋をと妻と並んで風の中
牧神の楽に二人の歩が揃う
地図にない山の紅葉が殊の外
風船を次々飲んで空は青

尼崎市　春城年代

血圧の安定　秋の空の青
人様にどう写ろうと老いふたり
立ち話　絶えて久しい石蕗の花
凱旋という遊びあり陽は落ちて
いつか私の姿と思い道譲る

西宮市　林はつ絵

来年の絵の具まだまだ残っている
道草の幾つ光って悔いはなし
わけのある指輪で実の娘へ譲る
警報に祖母を見に来るさりげなく
人生のマラソン予想などつくか

宝塚市　丸山よし津

ソフトクリームなめる楽しみ旅なれば
すぐ怒りすぐに謝る老いの夫
歳月が作った顔を持ち歩く
亡き人も亡びたものも懐かしい
わたくしの好みで残る日を送る

奈良県　田中紀美代

炬燵から這い出し大事な電話する
七人の敵に美人が混じってる
天井のねずみは仲がいいらしい
ストレスを打ちあけたのでサヨウナラ
ぼろぼろになって噂が舞い戻り

和歌山市　堀端三男

素顔見せた油断をうまくつけ込まれ
バスツアー酔わないように酔えと酌ぐ
鐘三つ鳴らし生き方狂い出す
割箸が真直ぐ割れる嬉しい日
芸をする象のまなざし哀れとも

和歌山市　牛尾緑良

雪になる雲が故郷から届く
刻はとまって老父がいる老母がいる
哀しみも笑いも溜める母の皺
凍てついていても輝く冬銀河
傷口が深くて生きようと思う

和歌山市　山田高夫

ぐうたらに生きてもめしは日に三度
酔っているときがほんとの俺である
愚問には愚答で足りる凡夫婦
黒字国　懐肥やすのは誰だ
葬式に間に合わせてる叙勲沙汰

和歌山市　福本英子

春風に乗って噂もよく弾む
歩かねば恩師との距離遠くなる
赦すこと覚えて楷書から行書
使途不明　億と家計簿つけてみる
正論を今か今かと隅の席

和歌山市　木本朱夏

倶会一処ひらりと秋の蝶きたる
ペパーミントで口を漱いで忘れよう
石鹸が同じ匂の共犯者
わたくしを跨いで猫が出ていった
ざわざわと追いつめてくる羅漢の眼

海南市　三宅保州

余命表相手にとって不足なし
まなじりを決するほどのことですか
縄張りの中ではとても強い犬
他の席に移りたくなる指定席
ごきぶりは恥ずかしがり屋だと思う

倉敷市　小野克枝

白い歯が笑って新春が歩き出す
投げてまた拾う一冊の聖書
忘れたい耳にかすかな子守唄
哀楽の皺をきざんできた道だ
悔いのない歩み月光あたたかし

岡山県　小林妻子

風呂の湯が溢れてるのはあたりまえ
独楽鼠みたい動いて来た過去だ
口裏を合わせて仲間入りをする
よう焼けた夫婦茶碗も割れずいる
百薬の酒が呑めない意気地なし

鳥取市　美田旋風

順風に乗ると経歴洗われる
末席で雑魚の外交して帰る
アイデアをいじめと思うから困る
ほめられるたびに重荷が増してくる
二次会の本音が命取りになる

鳥取市　小谷美ッ千

弓月や一途な愛を食べ尽くす
闇を見すえて男とは女とは
少年の眉の匂の野火その他
いつも空腹　熱のあるもの抱きしめる
その場所はいつも私を困らせる

倉吉市　野中御前

杖ついて杖につまずく未だ初老
泥んこの仲間同士で仲がよい
あの人は筋金入りの酒の虫
とても好きカサブランカとバンクーバー
あちこちの花へ手をだす蝶の真似

米子市　林荒介

剝落の土塀に描く土佐日記
昨日をたたんで小さく小さくする
モノクロのネガが貼り付く父の壁
渦潮も潮の満ち干のままにある
刻まれて磨崖仏になったのも岩

米子市　青戸田鶴

融通無碍心に残る旅にしよ
金婚の祝いに夫婦椀届く
何か一つ欠けているのが幸せか
晶子の歌をかいて最後の書にしよう
今も亡母と語らいもってから休む

米子市　金山夕子

この街が好きで自転車漕いでいる
必要とあらば私も数の内
席順がいつも通りに決めてある
斧を持つ男の背なに従いぬ
陽の射し込むところへ猫と寄ってゆく

米子市　澤田千春

極楽へ跳べる気もする高原だ
黒髪を洗い芝居の幕あける
一人旅　時には石に化けながら
納得のいくまで卵割って朝
わたしの鼓動壁はしっかり聞いていた

米子市　田中亜弥

今を繕い少し安堵の彩をます
日本海が唸って冬がやってくる
人間を化かそうと今特訓中
笑いころげて昨日も今日も旅の中
淋しがりやの魚が網にひっかかる

鳥取県　江原とみお

文学の小径つまずき易きかな（尾道）
浮世橋みんな荷物を負っていた
海へ出た木枯ししどろもどろです
蕎麦殻の余燼へ水をかけている
転生のいのち確かめようもなし

鳥取県　鈴木公弘

生煮えの案が奥歯にひっかかる
旗をたたむのに丁度よい潮時だ
老いてますます美しくなる昨日
それからの弓は本能寺に向かう
いい夢を布団に丸めこんで寝る

産卵を忘れ鶏カラオケに
いいですかその約束は昨日まで
お互いに化け損なっている夫婦
肩書をたたんで余生仏様
庭番はＣＩＡの一員だ

鳥取県　谷口次男

ボタンを押すと天井が鏡になる
世界一おいしい米を食べている
暮れ六つにホテルのロビーにて会うか
叫春の力を惜しんではならぬ
壽（いのちなが）と筆太く書き始め

鳥取県　土橋螢

湯どうふも政治も冷めて雪模様
尻に敷く母の背を見て娘が育ち
さよならが出来て一気に冬木立
金婚の勲章　妻の腰あたり
五十年も夫婦している墨絵かな

松江市　舟木与根一

秋の天バックにブルーインパルス
やっと出た愛語を風がもてあそび
ライバルがいるから今日もはね起きる
らんまんと女　平均台上に咲く
ともかくも海へ海へと急ぐ水

島根県　小砂白汀

挫けてはならぬぞ冬の入口だ
雪はこぶ風に首から縮こまり
立冬の寒さよ酒もことさらに
戦盲の頼みの耳も歳かいな
空想を伸ばして八十路楽しまん

島根県　堀江正朗

食べるほどあれば事足る歳の暮れ
ほどのいい燗に正月くる話
魔が差したように夜更けを書き続け
老いしかな昨日のような春を待つ
勝ち負けはない詩のみち心澄む

島根県　堀江芳子

必死に生きてこんな姿になりました
明るい人の暗い部分を知っている
淋しい人へ一番先に陽が昇る
父の忌やもうお祭りになっている
寿に似合う笑顔になってくる

島根県　松本文子

干し草は父の匂がしてならぬ
宿題をわんさとのこし娘が嫁ぐ
逢うたびに冬の匂がする地蔵
落ちそうなボタン奥さんいないのね
満ち引きはしない自分の海がある

今治市　野村京子

唐津市　田口虹汀

コスモスの中で死ぬかと戯れる
コスモスは招く桜は人を呼ぶ
冬茶碗　唐津と萩の長と短
菊活けて障子張り替え待つ供日
迎春はピエロも羽織袴なり

唐津市　久保正剣

秋灯下昔マルクス今柳誌
王様の夢は一人でショッピング
狼の図鑑に似たり紳士録
またたかぬ依怙地な星がポアに遭う
ふるさとはサリンと言えば解る村

唐津市　仁部四郎

無残やな団地の中に田が二枚
へそくりを隠した本が動いてる
御存知の看板がある知らぬ街
旅ゆけば私もテスト受けてる身
猿ならば黙っていたかもしれぬこと

唐津市　浜本ちよ

一周忌済まし夫は遠い人
おふくろの土鍋芯から温まり
老いぬれば甘い言葉にすぐにのり
故郷はあるが両親もう居ない
三日月に祈り修行を積んだ武士

香川県　木村あきら

お正月五十円ほどのお付き合い
寡婦の意地までも包んだ熨斗袋
麦一本一本にも初日影
綿帽子着て仲よしの六地蔵
お笑いのテレビで過ごす松の内

香川県　工藤吟笑

温い手に嫁して悔いなく五十年
弥陀の手に縋って今日も生きてゆく
ひと月は長く一年すぐに来る
充電の最中皆様ご免です
ふる里の地をメチャクチャにした文化

香川県　山地マツヱ

新しい恋にカーテン派手にする
別れると決めた男のシャツ洗う
一の矢がはずれて敵にねらわれる
愛だ死だ別れとポスト忙しい
亡父と会う地酒と塩辛手土産に

今治市　越智一水

老妻よ灯火へ君は何を読む
流されておったら先が見え過ぎる
冬の陽が好きだ障子があるからよ
倒れてるコスモス頭を上げて咲き
十和田湖へ路郎を思い酒思い（東北の旅）

今治市　矢野佳雲

地図の折り目にうっすら過疎の里がある
てれ笑いするモナリザの独り言
誰にも遇わぬ道なら鬼に遇えるかも
塩鮭を吊る由一の絵のように
五百羅漢　不倶戴天の顔がある

鳥取市　武田帆雀

肩を抱いてる指が写っている写真
短足で功名立てに出て行った
旅の恥長生きの恥よろしおま
菊花展　出陣前の水いっぱい
自他共に一目置かす菊の出来

鳥取市　岩原喬水

俺茶漬　隣の犬は肉を食う
懐が寒いと度胸定まらぬ
夢一つ叶い男の顔になる
ライバルに塩を送って美人取る
ご無沙汰が蟹の催促だけはする

鳥取市　春木圭一郎

年休も与えぬ妻がよく動く
午前二時　阿修羅のように妻が待つ
ある時は保護者のような妻である
真珠婚過ぎても名前呼んでいる
初恋のひとと今でも住んでいる

倉吉市　野口節子

天気晴朗　笑い袋が飛び出した
難問の壁をばりばり食べている
決断がつかず日かげに咲いている
制服の白さに恋をしてしまう
秋の空　流れてみたい雲と会う

倉吉市　松本よしえ

翌桧がどんぐり山を出て行った
化け終るまでは内緒の水鏡
地球の命いっぱい食べて生きている
青虫を潰そうとするわたしの手
漕ぎ出した子の舟はすぐ遠くなる

倉吉市　淡路ゆり子

泣くも笑うも一年たたむ除夜の鐘
庭石のひとつが亡父に似て怖い
いわし雲　命のリレー献体す
中傷のひっかき傷がまだ残る
陽気な妻で案外嘘に気づかない

米子市　光井玲子

楕円形の時もあったな五十年
心にも塩を効かして旅あらた
ネズミにも歯だけは負けぬ喜寿の父
雑兵同士群れて友情温め合う
木守柿の孤高光らす冬の天

米子市　野坂なみ

惚けてなお親しい声を聞きわける
立志伝　小学校も出ていない
向う岸まで学歴が従いてくる
残り旅どうぞよろしく雪月花
高原の褥で花は眠りたい

米子市　寺沢みど里

ありがたく生きて重ねるねずみ年
十指みな揃い王者の蟹でいる
神棚の新酒へ老父もおちつかぬ
約束の数をゆずらぬ万歩計
順番を待つ間に霧が晴れてきた

米子市　川上より子

神も悪魔も手を伸ばす籃胎の卵
白寿に登る父と初日を待っている
五感みな優れる山の案内人
工芸展の文箱に日本の黄金比
父母　祖父母　見守る中で卵立つ

島根県　石飛水煙

語り継ぐものなき苔むす女人塚
子にだけは子にだけは時代変ろうと
美しい言葉が坩堝の中でする
風雲児夢破れたり屋台酒
一石を投じた波紋に燃えつきる

鳥取県　松下たつみ

答弁の声がだんだん小さくなり
レジャーにもスタミナのある赤いシャツ
頬かぶり一番似合う儂の顔
花のない花瓶文化の日が淋し
我慢した涙が落ちる音をきく

鳥取県　田村きみ子

昨日より楽しい事を書く日記
嫁と言う味方があって笑い合う
引き潮がさらって行った夏帽子
浅そうな海だ死ねないかも知れぬ
お隣は大声うちは笑い声

鳥取県　林露杖

趣味増えて年賀ハガキを買い添える
文化祭　孫の佳作の書も貼られ
風邪癒えに蒔いた大根よく太り
起き抜けの男の兆し失せにけり
会わざるも逢うも運命や孤児かなし

鳥取県　乾喜与志

ホームから北国の春うたい合う
米寿から俺の青春始まりぬ
ちびりちびり喉うるおしてから吟ず
元気そうに見せてる膝の呻きごえ
胃カメラを呑むベテランの喜劇かな

鳥取県　乾　隆風

一升瓶へ馬の合うのが寄って来る
いい案がふうっと天井に浮かぶ
喉ぼとけが昨日の愚痴をとおせんぼ
卵を抱いてお色直しをしています
てのひらの中に命が彫ってある

鳥取県　さえき　やえ

耕運機　一喝入れて走らせる
精神統一させてくれます畑の草
寒菊がストレスみんなすうてくれ
禁煙バス喫うているのは運転手
カニが手をつなぐ平和をにがすまい（世界カニフェスティバル鳥取）

鳥取県　岩崎　みさ江

ムルロアの海から逃げた深海魚
泣きに来た水平線が円かった
弓折れし人に故郷あたたかし
遺伝子もびっくり孫が左利き
物干竿で陽を吸うオムツ見当らず

出雲市　竹治　ちかし

親不孝のままで長生きして居ます
パン一つ分け合い夫婦の旅続く
親の背を見ずにテレビを見て育ち
隣より先には死ねぬほど不仲
山積みの机で僕の呼吸する

出雲市　吉岡　きみえ

団交の壁の厚さに雪が降る
こだわって昨日の風が逆もどり
トイレでは倒れないよう気をつける
溜息が出そうな夕陽立ちつくす
ハイハイと心変りか企みか

出雲市　園山　多賀子

雨の日の夫婦の話底をつく
踵から冷え匍い上る自己顕示
輪の中の居心地大事に温める
夫婦して無題の旅を考える
弥次郎兵衛　妥協をすれば興醒める

岡山市　時末　一灯

今日もまた新語を嘆き死語悼む
拳銃は増えても死刑廃止論
笑顔にも虚と実からむビルの街
うっちゃりが効かぬ私の土俵際
平成の裁き越前とはいかず

岡山市　花田　たけ志

改装の厨で食費に皺が寄り
歌い方教え唄えぬ齢になり
新入りの敬老席で面映い
集まった個性が造る酒の味
束縛が解けた暮らしで艶が出る

笠岡市　松本忠三

天秤に掛けるどっちもどっちです
じいちゃんの民謡田舎くさいです
じいちゃんに留守番をさせ旅に出る
普段着のままです多少着こなして
ご近所の噂満点祖父祖母も

岡山県　山本玉恵

不器用を武器に少うし貯めている
一心にペンを運んでゆく女
嘘一つざぶざぶ洗う古里で
手囲いのあかりに女悲をかくす
愛一途　終点のない女舞い

岡山県　矢内寿恵子

やがて来るラストダンスのリハーサル
生かされて生きたと思う半世紀
過去形にすれば未練が消えました
アングルを変える見えないものを見るために
結跏趺坐　何を祈るか殺人鬼

岡山県　二宗吟平

海抜六〇〇なれど険峻古城山
アンテナを背に古城趾の由来聞く
自転車で転び天から叱られる
縄張りを越えてどよめく山車喧嘩
女山車みな化物の顔になり

広島市　森田文

台風の目に似て静か平和論
オウム　オウム　季節の変りさえ忘れ
窓越しの老母の指図で木の手入れ
うめもどき小梅の顔で掌に遊ぶ
ゆっくりと考えようよ　こまねずみ

廿日市市　林野甦光

行先は言わずに出ても妻の勘
大太鼓の音とこの世の陽が登り
瓢箪の畠ぶらぶら秋祭り
訓練とは知らない犬に噛みつかれ
辻褄の合わぬ銀行屋の帳簿

竹原市　森井菁居

結納へくるくる回る走馬灯
挙式待つばかり二人へ秋深む
仲人は急ごしらえの恋で良し
ポップコーン　ヤングの夢を知っている
かかる時　責任の無い孫を抱く

竹原市　古谷節夫

嬉しい日熱めの燗がほろり来る
ライバルの一人にネジを巻いて置く
三途の川　宇宙船なら乗って見る
薄味で夫婦の絆深くする
夫婦別姓あんた誰の子メダカの子

柳井市　弘津柳慶

あいまいな返事も出来ず揺れている
焦り過ぎ一人相撲で終らされ
ゴール真近　恋人にあっさりフラレたり
よくもまあこう度々の御訪問
人柄を認めて娘をくれてやり

宇部市　平田実男

今回も妻が主役のフルムーン
鷹を鳶にすることもある親のエゴ
言いたいが横で袖引く妻がいる
バイパスがあるらし妻と娘の電話
あちこちにリトルオウムが多過ぎる

美祢市　安平次弘道

神様が留守で電話が掛からない
地下街を歩ききれいな夢を見る
マンガ読むように神話が読めますか
竹光でばったばったとなぎ倒し
コスモスが好き天も地もコスモスだ

下関市　石川侃流洞

幸せは傘寿へ孫が提げてくる
傘寿まだ母が元気で酌いでくれ
歓天喜地へ母がやんわり釘をさす
盆栽を並べわたし独りの紅葉狩
波乱万丈したたか生きた束ね髪

奈良市　天正千梢

石庭は幾人の心をしずめしや
平和と言うシャワー頭からあびている
夕せまり老いは甘さに飢えている
笠ヶ丘　母としたいて登りつめ
ちはやぶる夜神楽に酔い旅終る

奈良市　宮口笛生

自分史の句集着々進む新春
まっさらの畳に替えた新春の朝
正月の幸しみじみとしみる酒
正月がこんなにうれし孫二人
暖房が程良く効いた新春の部屋

奈良市　米田恭昌

飛火野の小春日和に観た御物
世が世なら雑賀具足と平社員
ガン告知　窓を覗いていたカラス
ランチタイムなら僕だって北新地
猪飼野を歩けば虹のチマチョゴリ

大和郡山市　坊農柳弘

晦日そば嫁が自慢のチャンポンめん
雑煮餅老いには毒にも薬にも
干し柿の気高さ鏡餅の上
そしてまた一月十七日が来る
最果ての墓標よ島よ国後よ

奈良県　上田翠光

元旦だ吾八十歳の背を伸ばす（八十歳の新春に思う）
心して酌まん八十路の祝い酒
背伸びして生きたか胸の勲五等
ハンドルを持てば八十には見えず
寝つかれぬ夜のまぶたには走馬灯

和歌山市　垂井千寿子

出口まで転がる速さ見つめつつ
箸筒が家族の絆強くする
戦後久し洗うてもまだ消えぬ傷
生活の疲れが回る洗濯機
素人でも玄人でも良い栗御飯

和歌山市　北山好笑

生き方のいろはに揺れている小舟
道づれがとてもほしいと思う秋
未来より今ふくらんでいたい毬
人間の器量へ神の片手落ち
グルメ志向　肥満ときどき忘れます

和歌山市　池永正雄

爺ちゃんの天下一品竹とんぼ
七輪で焼くから出来るさんまの詩
煙突の無い被災地へサンタの眼
熱かんとおでんがあれば寒さなど
地下街の方が明るい大都会

和歌山市　田中輝子

後戻りできない眉を強く描く
泣くことは最後の武器だ裸木よ
ライバルを気遣う冬の入口で
百面相の残りの面と冬に入る
問い続けるものあり遙か沖の灯よ

和歌山市　宮口克子

三姉妹だんだん亡父に似て長女
野心家に一番弱い母がいる
金次郎は知らぬ劇画育ちの子
花愛でる心に華を抱いてから
くれぐれも遊び心を大切に

和歌山市　青枝鉄治

還暦のねずみは今日も紅を引き
八起き目の父を支える家族の和
友のミス庇う我が児へ小言のむ
恥を知る男のいない政治劇
断絶は知らぬ我が家の鍋料理

和歌山市　福井桂香

瑞々しい私に還る初鏡
黒織部にこころの襞をくすぐられ
黄金糖ひと粒あなたの愛奪う
ひと言があればあればと蟠り
ゼムピンを繋ぐ友愛つなぐよう

和歌山市　山口三千子

何気ないことが導火線となり
きな臭い話　水面下で進み
賽は投げられた結果をまだ知らず
根回しが出来ているのか急きもせず
黄昏れて無情の風にさらされる

和歌山市　岩本美智子

友情をいっぱい貰う薔薇の束
思いやり病の友に教えられ
不治の友　温かい手へ祈るのみ
他のために祈るわたしを問うている
冬の夜を温めあったわんこそば

和歌山市　細川稚代

膝掛へ淡いピンクの夢を編む
あなたまだ早すぎますよ自叙伝が
まだ少しぬくもりくれる言葉尻
来る人がきてコーヒーのまろやかさ
追伸を消すとすっきりした手紙

和歌山市　榎原公子

四歳の蕾ほのかな彩をさす
よろこびの欠片どんなに小さくても
風止んではたと構える秋桜
喪の家がいとこはとこで華やいで
故郷がコップに浮いている屋台

和歌山市　玉置当代

天高く芝生の上でにぎりめし
吉宗の声聞こえそう紅葉渓
菊作り惜しまぬ愛を花は知る
何もかも捨てれば勇気湧いてくる
本心を言えば不倫になる恐れ

西宮市　門谷たず子

新築が並んで街は面変り
こころの奥にまだ置いてある亡母の椅子
頼りたよられやさしさごっこ鬼ごっこ
ある日ふと眉間の皺に気付いたり
吾亦紅　老いてもおんな紅をさす

西宮市　秋元てる

お前にも仮設の疲れ影法師
蓮の座へ行きつく日まで万歩計
あらぬ方へ転がる嘘に虚をつかれ
老母の返事「まだ大丈夫」「有難う」
復興の街を包んだ陽の光

西宮市　池田善守

人生の第四コーナー曲りきる
今年こそ今年こそはと初日の出
満願成就　人はそれでもまだ願う
すらすらと言い訳出来ぬ今日の酒
残念も十人十色また楽し

芦屋市　黒田能子

初日浴び我が身一つの輝きよ
ヴィヴァルディの四季　初春から明けていく
エスカレーター他人ちらりとすれ違う
平穏な日々にストンと落し穴
秋の旅　指の先までとぎ澄ます

伊丹市　山崎君子

匂袋　藤色ばかり買うおんな
歩け歩け老いてはならぬ寒の菊
影法師　亡夫が傍に居るように
老母の部屋　柿の絵があり柿をむく
塀越しのお年賀ながい老いふたり

加古川市　吐田公一

人生の秋それぞれに花と実と
従いていてやらねば頼りない夫
一葉ずつ落し老樹の冬仕度
何事も阿吽で過ごす三ヶ日
早仕舞いケーキ抱えてイブの夜

京都市　松川芳子

ショッピング手持ち無沙汰に妻を待ち
うらはらに体重計の軽さかな
待ち佗びた孫から届くエアメール
靴変えて弾んでみたい空の青
永生きも苦労健気に生きる母

京都市　都倉求芽

十人十色されどなるべく暖色で
秋風に楽しげに浮く雲ひとつ
学のないおかげで怖いもの知らず
泥の舟いまだに売り切れでないらしい
面を打つ義兄は病を越えている

京都市　山海友熙

過ぎし日と思えどつきぬ一月十七日が
もうだめと言える弱音は一度にす
好きな人　好きな場所選る好きな服
聞き慣れた上にも優し言葉選る
浮き見つめ釣果なくても安息日

京都府　稲葉冬葉

ことなかれ主義とはさびし年の暮れ
松活けて言うてはならぬこと多し
ごむたいなことは承知の絵馬を吊る
孫の絵が美術の隅にありうれし
銀行はこわい　旅行をたのしもう

大阪市　上田柳影

時雨するここぞ大原三千院
ふる里の山の空気に甦る
聞きもらす事多くして老い進む
金山寺みそに含んだ母の味
錆多き人生なりし秋落葉

大阪市　神夏磯　典子

したいこと沢山持って年明ける
若い日にえがいた顔になってきた
子や孫の腰かけやすい石になる
おかしみをこらえる涙や有難や
欲多し一本の的　定まらぬ

大阪市　本間　満津子

病む友を思う夜長の風の音
聞える音　耳傾けて考える
欲張りの財布の底がぬけている
飾るもの除けてすっきり広い胸
時雨寒かろ　いいえ山茶花ほほ笑みぬ

大阪市　津守　柳伸

森羅万象なにはともあれ初日の出
雪山に誘う友ありまだ六十路
荒海を漂う苦節五十年
鴨ぼたん騒いだわりに減らぬ肉
何ごとかあれば即座に畳替え

大阪市　大塚　節子

失った自分を筐に閉じこめる
昇進に本当の仲間誰と誰
熱燗にわさびが効いたかぶらむし
火消し壺　心の炎も共に入れ
鼻声の電話受けてる方も風邪

大阪市　桝本　蕗児

いい写真だな時間が止まったまま息吹く
うれしいね木村伊兵衛が撮った顔
石橋をたたいて悪を重ねてる
嘘ついた蜥蜴の尻尾まだ生えぬ
さわがしいだから大阪好きなんだ

大阪市　松尾　柳右子

雪道はあなたのポッケに手を入れて
鼻唄にいつも躱されごまかされ
山海の揃う湯宿に初日の出
無定年嬉し辛しの手職なり
子を思うどうにも出来ぬまた思う

大阪市　玉置　英子

欅通り一本一本に声かけて
さあ繭を出よう立派に羽もある
妻との和　金環蝕の光りほど
風邪引きはすいてる方の医者へ行き
留守の家　急いでかえることもない

大阪市　清水　利武

初日の出　今年は地震来ぬように
タコ焼を食べて名士も笑ってる
平和ボケしたか銀行倒産す
ばあさんが甘やかしてる孫娘
震災一年　神戸の町にやっと春

大阪市　大河未佐子

北国の百花は雪に耐えた色
幕間にちらほら同じ手弁当
一人旅さほど淋しいものでなし
半返し縫いでここまで来た夫婦
誕生日どころではない大晦日

堺市　黒田真砂

ゆっくりとせっかちが添い平和です
不満などないが空しい仏間の灯
秋深くなっても我が家ビール党
余生もう不平不満は胸の中
むつかしい舅に仕え日々介護

堺市　中野欅子

衛星に観られ守られ雲の旅
若き日と受皿違って古寺巡る
老いを押しやるあの手この手と忙しい
何かしら落着き欲しく墨をする
喜怒哀楽すべてに融ける菊の花

堺市　山本半銭

おたやんの頬に紅さす初鏡
染み入って墨絵の点と成りとおす
仕舞湯のちぶさ浮いてる持ち時間
無理をした分サロンパス貼って寝る
コスモスを跨いでゆらりケーブルカー

高石市　浅野房子

ゆれている私の中の蜃気楼
人は死すやがて私もなる化石
この年で逃げるつもりのリュック買う
うさ晴らし句会の帰り温泉へ
ゆれつづく日本列島病んでいる

豊中市　三宅つえ子

実をつけぬ花を愛しむ老いふたり
美しく果てなんなどと贅沢な
冗談があふれて軽い嘘をつく
忘れえぬ人の訣れに秋深し
聞き流すことも覚えた車椅子

豊中市　吉田あずき

年明けた空に発光体探す
空港橋スピード出せば空へ飛ぶ
海光るわが逃げ道を見つけたり
ススキさえ裏切る気配秋の果て
猪の子餅　母の豊かな刻憶う

豊中市　湯浅馬洗

同文の国でも読めぬ簡体字（中国東北三省の旅）
広告の文字に見落す沈陽站
土地土地の地名ビールは値も違う
長春站おどろおどろに見上げさせ（十階建駅舎）
食材の香りと味に皿の数

豊中市　滝北博史

サファイア婚ああ久しぶり膝枕
ジーンズの膝の穴には若い夢
新しいメガネをかけて天下り
孫の目にたぶん私は原始人
古希ながら耳欹てる猫の恋

箕面市　坪田紅葉

生きている生かされている秋日和
むなしくて電話をしたがどこも留守
割り切ってしまえば孫も好意的
一人住む好きな事して夜もふける
友の訃を諸手で受けてただ涙

箕面市　岩津ようじ

佗助も聞いてる読経七回忌
もの欲しげに賞める隣の柿の色
とくと聞く来世で役に立つ話
時いたる陣笠殺気立つ起立
再生紙　前世は札かポルノ誌か

吹田市　瀬戸まさよ

私のロマン　マジソン郡の橋
大往生求め買います大往生
国文出とは思えない日本語
歯痒いが独裁よりもまあいいか
被害者の友より友情腹を立て

茨木市　堀良江

人の渦こんなところで会うなんて
白髪もしわもきれいに老い給う
質素険約ケチでなかったおかあさん
結局は大掃除したお留守番
あてにした色よい話にはならず

茨木市　島元ふみ

無理しても起きなきゃ今日が始まらぬ
入院の夫と日ごとランデブー
老妻はちと遠慮するナースの手
クリスチャンの外科医　十字を切ってメス
子ばなれの指にマニキュア甦る

高槻市　川島諷云児

出る杭は打たれ上手になっている
子離れができてるはずの虚脱感
夢霧散　捨てたふる里なつかしい
そのうちという約束が風化する
子に削る命すこしも惜しくない

高槻市　井上照子

雲見れば過去と現在からみ合う
臍まがりさすがひとりは張りがない
労りの言葉待ってる落葉樹
裏切りのボトルと知らず飲むＨ２Ｏ
笑顔して抱擁力と金という

寝屋川市　堀江光子

その日から少女は犬の母きどり
河向う眺め暮してまだ行かず
人や犬向う岸にもある暮し
夫妻同伴　靴入念に磨かれる
これも又勝者の側の回顧録

枚方市　海老池洋

頭の黒いネズミに地球かじられる
ファミコンも行くと言いだす初詣
隅が好き家でも社でも飲み屋でも
夫婦仲ときどき起こる渇水期
無理もない無理もないとて丸められ

東大阪市　森下愛論

過去の絵を捨てて八十路の船に乗る
ランタンが灯る茶店で無に耽ける
善と悪　胃ですれ違う苦い酒
美しい罠にはまろうロックにワイン
金箔酒更紗模様で酔いつぶれ

東大阪市　指宿千枝子

焼岳の白き煙の御挨拶
初孫の爪切る眼鏡かけなおす
お嬢さんそんなに爪をのばしては
リモコンの首輪で猫の自動ドア
地球より抜け出すように搭乗機

藤井寺市　田中透太

冬の絵を上手に描けた寂しがり
行先に何があろうと歩くだけ
どの眼鏡で見ても素顔のままがよい
懐がぬくくて鬼が出たがらぬ
他人だから笑って見てる謀

八尾市　宮崎シマ子

父の手でかかげるお正月の国旗
初春の号令　孫がかけに来る
孫はもう別の家族と初詣
お節料理はいつもの通り低金利
お掃除も暮れに済まして老い二人

八尾市　山下美津留

新世紀めざして老母はまだ達者
ジョギングの人押並べて美女に見え
切り返す一言伏せて微笑する
鳳凰が招く茶の里ひとりゆく
食文化　厠が歴史物語る

岸和田市　岩佐ダン吉

ただ一人異議あり僕がよぶ波紋
木枯しに出直す腹を決めている
いい返事きそうこんなに高い空
すっきりとしました妻の一喝で
ほがらかに昨日は忘れたと言おう

岸和田市　芳地狸村

身なりからすれば粗末なショッピング
円高に弾みをつけるパスポート
ぴかいちの馬が外れてすかんぴん
ねぎらいの言葉に泣いた母の文
さりげなく駄目を押してるお母さん

岸和田市　古野ひで

生きているその他大勢それでよし
彩褪せぬ思い出がありひたる夜
天高し奉仕の汗が心地よし
もう背伸び出来ない腰が曲り出し
夢のまた夢かも知れぬ世界の和

岸和田市　寺田甚一

威勢よい孫の狙いはお年玉
病院を出ると元気な顔になる
一本道歩いて他のこと知らず
豊作でも瑞穂の国は米を買う
多数決　僕の意見はいつも没

岸和田市　田中文時

不景気と見えぬ雑踏他人さん
アメリカにゃ優しい政治やってます
悔いあれど待ったはなしの大晦日
若しも下戸だったら疾うにうつ病に
抜擢もされず窓際にも行かず

和泉市　西岡洛酔

色即是空　玉造の湯や有難し
おいお茶で日向ぼこする老いふたり
七人の敵に歯向かう酒の弁
嫌な冬　老いの骨身をいとおしむ
善ひとつ拾い散歩の道帰る

和泉市　岡井やすお

老い二人笑顔交わして屠蘇を酌む
ら抜き言葉認知されずも生きてゆく
いつの世も天下万民だしにされ
米軍基地あっち凹めばこち膨れ
ＷＴＣへ行こうよ夕日見に

大阪府　籾山隆

昆布巻きをしっかりむすぶ絆かな
余震まだ静まりません一周忌
生命の海を私物化してる核
にぎり飯焼いて残り香かみしめる
マムシにんにく薬と言われてもちょっと

大阪府　八十田洞庵

日本の地肌腫瘍で荒れている
一太刀は斬らせてもよい勇気持つ
一線を引けば吹く風凪いでくる
長生きをせねばバイブル読み終えぬ
マルクスをかじってからの長い道

富山市　酒井　輝

背を向けて聞き直してるいい電話
よく喋る仲だが言えぬ事もある
ストレートカフェに本心溶けぬまま
かあちゃんを天に戻したお坊さん
旬の味さがす急がぬ旅の昼

富山市　島　ひかる

善悪の狭間で聞いた母の声
サーカスのようにスプーンで老母は食べ
病む母と訣れる刻を告げられる
愛一途　風には風の向きがある
人間の脆さ生き甲斐見失う

静岡県　薗田　獏沓

大鷹の舞う秋晴れと登山帽
六根清浄　富士の帰りとわかる杖
豆球にしてから涙どっと湧く
上げ底の無い父の愛母の愛
秋来てもしみじみ耽る暇がない

町田市　竹内　紫錆

胸患でストレスを抜き喜寿の道
喜寿祝　五年は粘る顔で受け
お祝いの陶器をかかえ喜寿の足
右脳の冴え口八丁手八丁
強豪になるほど触れる樹脂の駒

横浜市　菱田　満秋

病人の耳に烏が啼きすぎる
空気まで美味い気がする日本晴
ワンパック独り住いに無理強いる
人間の名で賽銭が預けられ
悔っていた無党派の数に負け

仙台市　川村　映輝

病身を大事に育て九十二
消費税老若貧富みな同じ
何国も政治家の汚職花ざかり
気の強い娘ですと気強い母が言う
草笛を耳を塞いで聞いている

弘前市　岡本　花匠

津軽っ子さすがと思う姫路城
うず潮に錯覚過ぎる修羅の海
我が刺のいくつ抜けたか除夜の鐘
南無三宝とり残されて柿ひとつ
噛みしめるいのち寿ぐけさの春

弘前市　小寺　花峯

つぶやきを酒に溶かした蟹の泡
立ち並ぶ銚子に不満詰め替える
競い合う議論に石を積み上げる
人間になる鍵ひとつ持ち歩く
外は雪　千枚漬が丸くなる

弘前市　相馬銀波

米つぶがキラリ今年の汗乾く
減反の鎖が太い新食法
自分史の汗はゴシックだけで組む
正論に耳の痛さを確かめる
還暦の屠蘇なみなみと注ぎなおす

弘前市　一戸ツネ

建前で生きる女が疲れてる
万華鏡　老いのわたしに花の束
だらしなく生きてる老いのひとり酒
夜の経読めば仏が会いにくる
無口な老いと猫は仲よし日向ぼこ

黒石市　相馬一花

盛り上がる前にお酒が底をつく
女房に叱られながら食う野菜
大金を積んで戒名買わされる
外股に泣き出しそうな訪問着
ぶたれても弁解などはせぬ木魚

砂川市　大橋政良

雑踏に玉虫色の足もある
自惚れているとおいてきぼりをくう
うなずいているのは私だけでした
充電の海へ大きな呼吸する
妻連れてハワイの砂を踏んでくる

弘前市　中山雅城

地球には核より怖い人がいる
猪の大穴埋めるねずみ年
残月がけろりとしてる今朝の空
真相が五十年後に持ち上がる

弘前市　蒔苗果林

今朝もまた無垢な赤子として目覚め
僕の庭に毎朝丸い種を播く
古希過ぎて大根の尾も首も好き
収穫期　重たい友の追悼号

十和田市　小笠原敏人

移転する墓にも序列ある世間
傾いて墓の石さえままならず
悲しいが石無き墓に函を置く
亡母の故郷　仏間に胡坐酒を飲む

八戸市　島田昭治

孫馬鹿のどこにあるよな爺と婆
被災地に善意の花が清く咲き
悟ったと言わぬが頓死も悔いはなし
ときたまに海見て心広げてる

青森県　諏訪柳々

秋深し亡父が手塩のリンゴ捥ぐ
酒とろり今夜の君におぼれそう
秋深し湯豆腐一丁酒二合
真水汲むふるさとの山未だ青し

東京都　山口新子

白水仙群咲く野辺をふるさとに
風邪の頬　胸の谷間で発熱す
確実に愛されている水面下
再会の胸白色の水溜まり

静岡市　安本晃授

浅はかな文化に狂う夜叉の面
昭和史の顚末語る兵の父
告白を聞いて茶柱浮き沈み
十指みな指紋浮きでる八十路春

富山市　舟渡杏花

まだ尽し足りぬと　するめ裂きながら
こんなはずでなかった指輪だけ残り
落とし穴の上で踊ってみせている
人工波のうねり溺れたふりをする

羽咋市　三宅ろ亭

鉄　泥舟　二幅並べて春迎う
北極探検　和泉雅子の秘話厳し
勇み足ばかりで力士を笑われぬ
鏡見ていざ出陣と気概だけ

大阪市　藤田頂留子

懐かぬが飼って見たいな青い鳥
期待させといて無理かも知れへんな
夢未来むすぶ女の昼夜帯
ふるまって居ても心はあとずさり

大阪市　河井庸佑

出るべきか控えるべきか流れ読む
抜け道を通ったばかり行詰る
山頂へ人それぞれの道登る
忠告を無視して墓穴掘った悔い

大阪市　町田達子

落ち葉はらはら耳を澄ませばメロディーが
深みゆく秋へアヒルも芸術家
カラフルな花が明るい墓地にする
さわやかな笑顔スピーチとちった娘

大阪市　北勝美

節くれの指で摑んだ老いの幸
摑み処一つにあった運不運
雲摑む話で人にうとまれる
摑んだら顔にも出さず七並べ

大阪市　井上白峰

緯と経で十七文字の綾を織る
年代の距離を縮めるカナ辞典
言い訳が過ぎて誤解を招いてる
世は巡る喜怒哀楽の雪月花

大阪市　寺井東雲

戦争の話をすれば皆逃げる
遅かったひずみ直らぬ我が娘
下積みの長い出世で基礎ができ
横幕は選手励ます大だいこ

舞うからは問答無用胡蝶蘭
いるか舞う嬉しさ一杯表わして
雑草は小さな喜び知っている
手に握る石の一つが怪我の元

大阪市　小糸昭子

献立の文字美しく味もさえ
小半日　京都であそぶ年のくれ
秋の雨　友と別れたばかりの夜
単身の赴任でのびた別れ話

大阪市　奥田良子

花束が続き花びんに無理を言う
菊の香の競うて造花彩もなし
誰ももいでくれぬ熟柿が又ぽとり
いい人生と思おうまたも霊柩車

大阪市　渡部さと美

長所短所だんだん霞んできた夫婦
核持たぬ平和な弱い国に住み
後ろ指など恐れない年となり
席蹴った遠い日の勇気今どこへ

堺市　柿花紀美女

一言で答えになった顔の色
素手で来た嫁御に家風のっとられ
エプロンの白さに今日は迷わない
腰すえてやれもノルマのないあせり

堺市　一瀬福一

太りたいね傍で痩せたい言うてるが
自分史を貰って空し我が思い
エリートの猪突猛進とばっちり
敷石の中で生き生きすみれ咲く

豊中市　稲葉眞郎

児の寝息たしかめてみるハンモック
夜の森お菓子の家の灯がもれる
「府民の森」まだ新しい樹の名札
夜の森どこかで魔女が泣いてます

堺市　近藤豊子

遠くから見守られてた亡父の愛
三ッ指をついてお悔み紅い爪
ゼロ歳児じじにも負けぬ預金帳
出来不出来靴音で知る母の勘

豊中市　井上直次

愛犬が僕より先に老いてゆく
恋人のニックネームを絵馬に書く
外債を買うて気になる円相場
失敬な僕のジンクス笑いよる

豊中市　月原方郎

正月が人より先に来る舞妓
果物は村から町へのメッセージ
善ばかり配ると悪が目を覚まし
本の虫　今日は漫画を読んでいる

豊中市　江口明光

豊中市　辻川慶子

立ち読みに軽いページの本を選る
川岸の向うも長くなる電話
気が付けば背中くの字になっている
満ち足りて十人十色の顔がない

箕面市　椎江清芳

職人の指は生きてる勘どころ
借りに来た様子貸さない腹で会い
親の目に映る倅はまだ青い
まだ燃える火種を飾るイヤリング

池田市　岡本吉太郎

杖ついて杖にあたった石眺め
うちの夫　明るいだけがとりえです
米国の核の傘から逃げもせず
お人好し情けにおぼれノイローゼ

吹田市　茂見よ志子

那智の滝　五十年振り仰ぐ幸
細い紐たぐれば縁よみがえり
懲りたはず株価にゆれる秋の候
決断の鈍い男の輪を抜ける

吹田市　栗谷春子

たたみ拭く紫苑の長いながい影
満月がうろこの雲を泳ぐ宵
しばらくは露子をしのぶ旅となる（石の上露子の生家）
山ひとつわけてこちらは暮れなずむ

吹田市　古川喜美子

白菜を抱けば児を抱く想いする
爪切っている間も時は過去となる
仏さま暫く隅に居て下さい
みの虫が宙に貌出す震災地

茨木市　井上森生

木と石が力を込めて城となる
千代かけてチャペルに誓う菊日和（Sちゃん結婚）
秋の気も団地の窓の吊し柿
今日もまたチャンスをくれる陽が昇る

茨木市　藤井正雄

初電話去年嫁いだ娘から来る
ふぐ提灯女が誘う寄席帰り
読書三昧ラーメンすする妻の留守
ゲートボール今日は休みか霜柱

守口市　森川まさお

時の流れとまった寺内町歩く（富田林寺内町杉山邸見学）
格子の間　外行く人が影を曳く
忍び返し二階に露子の歌の軸
視点変えて細い道から細い道

守口市　結城君子

寺内町の白壁秋を照り返す（富田林にて）
上を向いて歩こう　厨子煙出し虫籠窓
寺内町に「堺筋」あり立ちどまる
「あてまげ」の路で迎えの車待つ

東大阪市　安永暁子

なにごともなく連れ添う人も白い杖
ストレスに勝てる笑いを買い出しに
秋の味痩せようなんて思わない
脈みゃくと志士の支える路郎の忌

寝屋川市　平松かすみ

七五三　上目づかいに畏まり
娘のものを一式借りてお仲人
姿見の真っ正面がいやになり
ええちょっとスペインですとハネムーン

寝屋川市　冨山ルイ子

黄落に残りの生命だぶらせる
思いまだかなわぬままの流れ星
黄落をかぶってぬくい木の根っこ
倶会一処　句座の賑わい聞こえそう

枚方市　前たもつ

大臣の椅子のあたりが震源地
畑の隅で葱は青さを絶やさない
母ちゃんが買えばぴったりボクの靴
木枯しに土葬の亡父の声がする

交野市　福崎しげお

聞き役に回れば心安らかに
回り道していたような半世紀
出来不出来言うまい孫は俺に似る
四十年添うても性格一致せず

松原市　小池しげお

夕刊の大きな字には驚かず
利食いしたループタイには隙がなし
合いの手は妻だけになる俺の唄
倖せのふとん二階に乾してある

松原市　玉置重人

買い替えた机に気力新たなり
夢で見る市電はいつもよく走り
柊が伸びて鬼門も恙なし
絶不調　鯛もハマチもサビ抜きで

藤井寺市　中島志洋

松の内　暗い話はお断わり
三世代笑顔で囲む初春の膳
甘党と知らず張り込む特級酒
福耳が決め手になって結ばれる

藤井寺市　福元みのる

今更に五十肩とはちとおかし
老犬よお前も吠える気はないか
本なしで歌えるものは軍歌だけ
足の裏見事栄養足りている

羽曳野市　酒井一壺

迷い猫居ついてからは寝てばかり
お説教ますます迷い深くなり
鞄持ち形見にカバンだけもらい
無意識の中で鞄は持っていた

八尾市　高橋夕花

秋たけて柿もみかんも大盛りだ
いわし雲　胸にひろがる悔いばかり
手のひらの金平糖は夢の数
新しいページにえがく福寿草

八尾市　吉村一風

花びんの水みなかえて出る菊日和
新調のスーツを誰も見てくれぬ
母留守の夕餉はみんな黙り込み
明日を語る知らぬ明日に夢がある

八尾市　高杉千歩

初日記　食べて遊んだ字が跳ねる
平成八年　亡母の時計と年重ね
たこやきの列で振り袖やかましい
津軽林檎　一個を残す老いの朝

岸和田市　原さよ子

気味悪いほどぴったりと今日の勘
いい返事それだけで母満たされる
内弁慶血筋ですよと祖母笑う
お喋りの女こぼしていく波紋

岸和田市　島崎冨志子

行間の広い日記を買いました
振り向いて過去暖めて老いゆくか
ひややかにオウム裁判見ています
善人も悪人もいて座が燃える

岸和田市　三輪通彦

不況風右肩下がりまだ続く
過ぎ去ればみんな許せることばかり
母親の温みへ戻るブーメラン
どの店も手ぐすね引いて待つ師走

岸和田市　井齋一齋

売りつくし疲れをいやす寝正月
添え書の友の賀状に励まされ
初春の筒先競う出初め式
初夢のもしやもしやの宝くじ

富田林市　片岡智恵子

平成史七年にして荒れ狂い
仕合わせを分け合うようにケーキ切る
そんな時　果報寝て待つ知恵もなし
本心は伏せたおとなの処世術

河内長野市　井上喜酔

晩秋の名残りを惜しむ空っ風
一生の恋まで譲るお人好し
もう一つ咲かそうだけが花の夢
見て食べて老いの贅沢色気抜き

河内長野市　植村喜代

どの種も受ける土には敵わない
狂ったら人も呑みます波頭
小さい頃どこへ行っても帰りたがり
今年こそ好きに生きたいなと思う

地の底で汚染怒っているマグマ　神戸市　山口美穂

容赦なく木枯し丸い背を押す
木枯しを待ってた土鍋の出番です
頭の体操いつしかパズルも趣味となり　西宮市　奥田みつ子

懸命にいびつな壺を抱いている
落ちてから猿は初めて木を見つめ
何となく苦手相手もそうらしい
水の命いただく水を汚しつつ　西宮市　亀岡哲子

中之島コンテの素描秋深し
松茸が気の毒になる下戸揃い
窓に窓映って赤い灯がともる
み仏を忘れて酔うて古都紅葉　西宮市　菊池トミエ

被災地の実りの秋はまだ遠い
万歩計　今日の健康見張番
天高く度忘れ多い事ばかり
風雪に耐えて真っ赤な実を結ぶ　西宮市　牧渕富喜子

冬に入るまえの夕映え独りきり
言い返す何と貧しい言葉だろう
ちっぽけな呟きだろう蜆汁
やがて来るものに向かって槌の音

寄りそうて生きております雪月花
かたつむり家ごと深い冬になる
いい意味で昨日の敵は今日も敵
反核年たくさん鶴を折りました　西宮市　山本義子

積木つむように更地に家を建て
木犀の花散り終えて地を染める
散り終えた枯葉更地へ吹きだまり
地震から狂ったままの置き時計　宝塚市　吉田笑女

菊日和　話の尽きぬ老夫婦
髭づらの孫はだんだん遠くなり
おかっぱも隅に置けないおませぶり
パスポート五冊も無事故ありがたし　宝塚市　中田純次

迷路には熟れた木の実がありました
階段をはさんで姑と嫁の城
真贋はどうあれ宝ひとつ持ち
嘆願をしたが養子に行くと言う　宝塚市　嵯峨根保子

はったい粉まだ在ったのか峠茶屋
オルゴール時計のんびり午後三時
コーヒーが三字か四字かもめる句座
青竹の節目にも似た人生譜　川西市　松本ただし

人生の秋しっかりと読書する　川西市　氏林洋敏

震災の悲しいまでに広い空
不払いの電波で朝のドラマ見る
仕合せと一人暮らしに言い聞かせ　生駒市　北山悟郎

不器用が不器用に生き血が滲む
山門で俗人心洗われる
肩書がピストルの的狙われる
少し間が抜けたところが親しまれ　大和高田市　岸本豊平次

ビジネスのホテル足音だけで更け
霊柩車送れば路傍の人となり
歓声と溜息　逆転ホームラン
賞味期間過ぎたまんまで冷蔵庫　奈良県　長谷川春蘭

派手好きは老いのきざしか秋の冷え
露ほどの身すぎ世すぎを思いしに
手の甲のしわをいとしむ初冬来る
母が居るこその実家で子のゆきき　和歌山市　玉井豊太

元旦やこころに円い玉を抱く
威勢よく先をあらそう男の詩
素人が落ちない棚にくろうする
古いものが当り障りのない答　和歌山市　田中みね

外見だけで軽い女と決めないで
続ける事の大事を知った晴れの席
亡き父に見て欲しかった晴れの席
遠いなどと言っておれない遺産分け　和歌山県　西口忠雄

均等法できても女は女です
うさ晴らしジャンジャン横丁の酒の怪我
近寄ると誰でもかまわん自動ドア
乗ろうかなやめとこうかな体重計　和歌山県　小倉アサ

崖っ渕　父子の対話盛ってある
焦点を絞ると波が高くなる
いつとてもジョーク通じぬ木守り柿
定年へ電卓押しているばかり　岡山市　井上柳五郎

アンチ巨人おいしい酒がことし飲め
まだ生きるつなぐ低利へする貯金
叙勲にも本人知らぬ死後に受け
大日本の頃だった地図捨てられず　岡山市　川端柳子

親友のピンチだ逆立ちでもしよう
仲よしになったのは何時笑い合い
愛ちゃんではじまるたよりもう来ない
年明けてねずみが運ぶ福袋

倉敷市　田辺炎六

信用は宝　笑顔の積み重ね
へそくりの金庫誰にも教えない
性格の相違　三下り半の檄
読み書きが出来て算盤下手な妻

岡山県　荻野鮫虎狼

体調は如何と散髪屋が尋ね
秋遍路　暫し見とれる人と逢い
老眼鏡　世相の深さ読み直し
ねずみ年　鼠撃退法とは哀れ

岡山県　池田半仙

秋呼んだ赤いトンボも見なくなり
遠慮の過ぎる失礼だってある
つけ足しのような小さな茶碗むし
水明の河原美し草紅葉

岡山県　岩道博友

木枯しの道標に立ち意志曲げず
屋台店　言葉の尻をよくつかみ
無発言　昨日と同じ白紙持つ
効きそうなチラシの説明すぐ言わず

竹原市　時広一路

いいことになりそう水平線白む
雲一つ私のものにしたい空
欲しかった白い時間を持て余す
万歩計　足の短さなど言わぬ

竹原市　岩本笑子

優しさを振り撒き車椅子の旅
追伸の追伸　女哀しい夢を見る
歩き続ける貴方と歩き続けよう
手招きへ私だろか彼だろか

竹原市　石原淑子

冗談に本音がポロリ　ヤジロベエ
赤トンボ飛び去ってから布団干す
今年こそ完投誓う初日の出
あるがままがんばらなくていいのです

広島県　藤解静風

ヒロシマの五倍傷んだムルロアよ
忘れられぬようにときどき咳払い
この齢へ自立をせよと言うのなり
似顔絵の髪がうすいと思わぬか

広島県　田村新造

無蓋貨車　北斗仰いでする南下（興安嶺逃亡記）
南満へ落ちて北斗が高くなり
国共停戦その間に渡る松花江
ハルビンの街角で知る水餃子

鳥取市　前田一枝

信じてた人も持ってた落し穴
渋い柿一皮むいて甘くする
うそつきに似合わぬ白い歯をしてる
立替えた金覚えてる千鳥足

鳥取市　西村黙光

買う時より捨てるに古希の武者ぶるい
傷が癒え俄然張り切る万歩計
妻よりは稚孫が煙い酒たばこ
晩酌の肴を釣って親友を呼ぶ

倉吉市　米田幸子

終の日まで元気に跳んだおばあさん
突然と言うが予告はあったはず
それぞれに見合う器で風も凪ぐ
俎の鯉を脳死と軽く言い

倉吉市　最上和枝

たんぽぽの綿毛希望の旅に出る
隅っこで四捨がかすかな煙あげる
団体のペースを乱す蟻もある
若者よ戦争の恐さ知ってるか

米子市　石垣花子

知恵袋ふくらみはじめた三歳児
ローヒール歩幅合せてくれる孫
万札に素知らぬ顔が出来る人
雑魚達も思い思いの自己主張

米子市　政岡日枝子

塩とした約束だから破れない
かたくなに塩は孤高を守りぬく
悪人のように塩はつまれる
塩も毒も私の席を追いたてる

米子市　木村富美子

信号機の真っ赤を今日も信じよう
明日のため君のほころび縫っている
育つ子ら見とどけたくて生きている
思い出の一つを消して年がゆく

米子市　菅井とも子

割り切れぬ想いを墓に投げかける
版画見に亡父の面影追うように
子に送る蟹を右手で計っている
顔色をたしかめたくて灯を寄せる

米子市　茂理高代

この波に流されぬよう弓を引く
溢れ出る涙を捨てる壺を買う
茜雲　心の染みを消してくれ
少しずつ神にお返しする命

米子市　中井ゆき

にせ玉子だかされている鳥の目よ
チョコ二杯　自白剤よりよく効いた
今ちょっとなぎだ灯台ひる寝中
星空にお化けなんぞは住んでない

米子市　白根ふみ

紅葉のまっただ中で深呼吸
海遊魚　知らない海がありますか
じんべい鮫は子供の眼ばかりみる
法螺貝が唸り山の気が動く

米子市　新　正子

娘たち呼んで女の思案する
友を妬くそんな小物じゃありません
足かせも手かせも不燃物に出す
河になろうと毎日水を飲んでいる

鳥取県　土橋　はるお

牛を保護したと駐在から電話
孫誕生ガキ大将を期待する
庭石が上手に庇い合っている
嫁さんの寝言を聞いたことがない

鳥取県　土橋　睦子

隣から蟹の匂がやってくる
豊作に案山子の弓も下を向く
烏骨鶏の卵をそっと呑んでいた
夫病んで漬物石も重くなる

鳥取県　太田　幸枝

化け方が下手で尻尾を踏まれてた
半壊の壁がけなげに立っている
弓引いた息子に最期看取られる
内払いしてから後の一思案

鳥取県　石谷　美恵子

父と兄　晩酌だけへ意見合い
寡婦というひびきへ化粧地味になり
蟹の朱がお膳へ映える祝い酒
名水を飲みたいときに飲める幸

鳥取県　幸家　単車

痛む胃に酒を呑ませて麻痺させる
座禅組み仏と語る日が続く
ご破算にするには惜しい良い出合い
最低のランク一生汗を拭く

鳥取県　黒田　くに子

母の手をやがて出てゆく若ごまよ
てれくさいなんていえない紙おむつ
ほとけとの絆をつむぐ曼珠沙華
木枯しがきっと呼んでる雪女

鳥取県　西原　艶子

お祝いの記念に仔犬もろてくる
塩壺の方へは犬も寄りつかぬ
しあわせになろうよ犬と握手する
美味いもの並ぶとあせる癖が出る

鳥取県　羽津川　公乃

新しい暦　抱負も人並みに
たわいない句だがわたしを燃えさせる
あれ以来　非常袋は福袋
くるくると子年の母の一代記

鳥取県　石尾　かつ乃

秋風の序曲が好きな萩すすき
腹を割って話すと和む縄のれん
孫に手を引かれる歳かすべり台
ひき出しの万年筆が飢えている

鳥取県　津村八重子

回り道して幸せの玉つかむ
字引きより正しい老いの知恵をほめ
墨くろぐろと賀状上手に書いた夢
晴着の娘かこみ明るい新春となり

鳥取県　西川和子

うつの日の紅は濃いめの方がよい
六十の弱音を子等に諭される
気負ってもやっぱりカニの横歩き
寝言までオーイオーイと呼んでいる

松江市　柳楽鶴丸

不器用でイエス　ノーしか言えません
頑固者カブトガニという仇名
人生にスイッチバックもありました
第二の青春もう一度アイラブユー

出雲市　尼　れいじ

NOと言う返事がFAXで届く
いらいらをつのらせガタゴト禁煙車
新春の誓い去年と以下同文
山一つ消えた　小学校が生れた

出雲市　石倉芙佐子

鼠算ほどにはゆかぬ春財布
雪しんしん降る夜は鼠おとなしい
初春に手持ち無沙汰の赤い毬
老松のたわごと一つ聞き漏らす

出雲市　小玉満江

以下同文こんな私に感謝状
待つ人はいないでしょうと誘われる
「麦畑」一緒に唄うおない歳
老いて尚おしゃれ忘れぬ曼珠沙華

出雲市　岸　桂子

ストレスのはけ口探す途中下車
不器用に生きております昼の月
虹の立つ下に童話の森がある
ネクタイの結び目だけが瞳に残る

出雲市　板垣夢酔

名誉には銭が泣きたいほどに惚れ
泥舟に来てから逃げるのは男
裕福に見えてもしゃっくり金詰り
羊かんを切った厚みにある好意

出雲市　久谷まこと

帆を上げて順風を待つもどかしさ
足踏みし歩調そろえる夫婦坂
悩み事母の口ぐせ明日は晴れ
おもいきり伸ばした腰のサロンパス

出雲市　富田蘭水

ダイエットこの頃夫の目がやさし
足早に厚い雲とぶ冬支度
こんなにも弱い男かうれし泣き
色づいたみかんの夢は何だろう

土に生き土の匂を抱いて寝る
夏帽子　老母の疲れが掛けてある
初霜へ子牛も丸く山おりる
紅葉へ五百羅漢の慈悲仰ぐ

出雲市　小白金　房子

黄昏れて夫婦が同じ彩になる
柿二つ買う老妻の誕生日
冬紅葉オーヘンリーを読む窓辺
眼鏡かけた神様だったと七五三

出雲市　伊藤　寿美

長々とひとり芝居はまだ続く
一生を支えられたも愛ゆえか
黄金の夢見て渡った人生譜
捨てきれぬ欲にからまれ今日も暮れ

島根県　藤原　鈴江

遅すぎた出遇いと思う落ち葉道
梵鐘の余韻へ今日の鍬洗う
人工の滝ほとばしるものがない
豪快に息子と交わす祭り酒

島根県　佐々木　鳳笙

本当の顔が裏から笑ってる
雪だより聞けども子等の便りなく
コシヒカリ　ポチも今日から新米だ
習うより先に忘れる六十路坂

香川県　成重　放任

主義主張あるからカニも横にはう
気をもんだ割にすんなり出た答
笑いじわだけは誰にも負けません
過去形になった話につく尾ひれ

香川県　川崎　ひかり

感情をおさえてそっと輪を抜ける
病んでみて親子の絆強くなる
鈍行で遠い旅路をゆく二人
農に生き手が物語る五十年

香川県　新川　マサヱ

雉子を撃つ音で目覚めた雪の里
南国のニュース二センチほどの雪
トランプの輪に父もいる三が日
ささやかな募金で晴れる風の街

松山市　白石　春嶺

不条理は我慢した子が放っとかれ
立志伝はてなはてながそこかしこ
二人三脚　紐をほどいた下り坂
いい星の生れほんわか生きている

松山市　宮尾　みのり

目の手術　時機を逸するものばかり
辷らない履物談義釣り仲間
有り余る世の行く末に世を思う
アルちゅうの父の背に見た親心

高知市　北川　竹萌

気がつけば杖一本で立っている　高知県　小澤幸泉

休職の日数かぞえて重い部屋
今更に思うことなし秋暮れる
あと五年　息子に渡すパスポート　高知県　赤川菊野

友情に国境はない手の温み
赤い陽に心の渇きいやされて
言い足りぬ別れをのぞく赤い陽よ
焼肉をひとりで食べて淋しいな　北九州市　梅田宣司

ダイヤルを回しておいて気が変わり
酒じゃないその一言に酔わされる
怪物をその気にさせる風が吹く
敵もさるものウーロン茶で酔っている　唐津市　山口高明

包丁を使わぬ街の新所帯
戒名に最後の見栄をつけて逝き
紫煙吐くおんなの足は組んである
英霊が眠れぬ年の夜が明ける　熊本市　永田俊子

お人よし胸衿聞いてだまされる
景気よくお金を生むのは向う岸
年下の男がいいとノラが言う
泣くことも幸せ生きている証拠

**前月分**

錦秋の武蔵野稲穂風匂う
花粉症爺さん嚏に孫魂消
想い遣りながら労る老い二人　北本市　筒井朴竜

## 川上三太郎句碑建立基金

**金　額**　個人3000円・団体10000円
**送金方法**　郵便振替口座02350－6－38870へ
**募金締切**　**1月31日**（川上三太郎碑建立の会）
**建立場所**　青森県蟹田町観瀾山公園内

## 第16回
## ときせん賞作品募集

**雑詠2句**（未発表句）
**選　者**　大野風柳　橘高薫風　寺尾俊平
去来川巨城　小松原爽介
**締　切**　**1月末日**
**発　表**　『時の川柳』4月号誌上
**賞**　ときせん賞1名
準ときせん賞2名・佳作7名
**投句料**　誌友 500円（定額小為替）
誌友外 1000円（発表誌呈）
**投句先**　〒658 神戸市東灘区渦森台2－10－206　河島いち子宛
**選句方法**　無記名清記の上、選句。1句ごとに合計点で順位を決め、上位10句を入賞とする。

時の川柳社

# 自選集

## 野村太茂津

初日の出　峠八十越えて来し
偓促自適　二十日鼠に教えられ
呆けるから悠々自適止めにする
風の名にすれば私は旋風
命拾うて今年も休む暇がない

## 工藤甲吉

一徹で通した過去を悔いていず
墓を建て替える機会に亡妻と逢う
西暦を平成にするややこしさ
北ばかり指して磁石は飽きている
正は邪を許さず時代劇終わる

## 金井文秋

常緑樹にも若き葉と老いし葉と
ソフトにと女性相談員も置く
私も入れて日本の高齢化
のど飴をあれこれ替えて見たものの
紙と鉛筆　頭は無論要りますよ

## 藤井明朗

合併四十年　近代化に過疎つづく（木次町合併四十周年）
紅葉が窓に舞い込む冬の音
ふたり酒ムードを惜しむ夢が醒め
猪年も無難に感謝あるのみ晦日そば
新年の幸　句友の米寿祝から始動

## 児島与呂志

人並みに素知らぬ顔で素通りし
道一つへだてた隣の旅みやげ
人の事気にせず寝付きの好い男
早起きの靴が大地に逆らわず
小心の男　胃カメラ受け付けず

## 波多野五楽庵

浪漫派　蔦の赤さにうるませる
ピアノ弾く指におぼれているのです
日溜りにちちの似顔を一つ置く
偽証罪　男は寒い夢を見る
幼なじみの窶れた理由聞きそびれ

だまってる自分がだんだん見えてきた
手持無沙汰はお互いと思うとく
大切にされているのは傍目にもわかる
洗い髪きれいな人に見えてくる
冬の海　砂ふむ音から冬がくる

正本水客

ひもじさが遠のき人情薄くなる
銀行のロビーで裸の雑誌見る
弥次馬になると両手で背なを押す
秋だから紅許される曼珠沙華
どんな面つけても肩の線が墜ち

月原宵明

わからないままカタカナのいいリズム
家計簿に従い値札見てまわる
平等やそうな自分で茶を入れる
ご破算の瓦礫の中の夫婦箸
夫婦やと言うのに委任状が要る

遠山可住

あなたのは親切でなくお節介
無茶をする父をなだめる母がいる
あこがれた満洲役人捕虜でパア
決断の早い男でそんばかり
あまりにも良心的で案じられ

奥谷弘朗

忘年会のチラシ不景気風に舞う
銘水も汲んで帰った紅葉狩り
離縁の荷　過去の疼きを喋りだす
転んでも念仏となえ灯は消さぬ
写経する穂先へ仏心わいてくる

小西雄々

拝観料上げてお寺も生き残る
かにツアー食べて送って手にも提げ
飲み代を削り反則金払う
さわやかな朝　真っ白い卵割る
二日酔いあくびばかりで昼になり

小林由多香

どちらかといえば履きよい古い靴
孫の留守孫の玩具をもてあそび
夢の中でできた句　目覚めと共に消え
日溜りを求めお守りの乳母車
妻の目に触れては困る句がうまれ

野田素身郎

さりながら言葉に傲りなかりしや
震度四　手抜き工事が試される
晩成にシルクロードの旅もよし
社交にも立場侵さぬ車間距離
野茂ほどの特使　日本に有りやなし

久家代仕男

倖せは今年もたんと賀状書く
午前二時決心促す鳩時計
取巻きが見当違いの力瘤
心字池　空の碧さも取入れる
社史編纂　神様になる創業者

西田柳宏子

魚屋でめでたいものを選っている
少子家庭に通用しないねずみ算
大人にはなれぬおとなの藁人形
小引出し父の命が生きている
意気投合して友情の深む箸

恒松叮紅

サービスのコーヒ券だけでは済まされず
ひとりぼちの私に秋空青すぎる
一人見るテレビ何とも呆気なし
拝む前一言仏と対話する
コーヒータイムもう第九をかけている

松川杜的

柳友を亡くし淋しい除夜の鐘
一病をいたわりながら年を越し
神鈴を孫にふらせる初詣
人生に少し疲れて老いの杖
雲の上　億という金よく動き

有働芳仙

猪食べた話しながら丹波路に
陶工の誇り七彩変わる茶器　（立杭焼の里）
でこぼこの茶碗を作る楽しさも（　〃　）
もう冬の話題に変えて立話
ＡＰＥＣ衛星都市の道も混む

黒川紫香

太郎つよし関所の渦を巻き返す
透明になって太郎を横抱きに
太郎いとしや百を数えて生きて欲し
起きれば太郎　眠れば太郎抱くばかり
太郎を産んだのは夢の中だったのか

八木千代

さわやかな目覚め新春の陽が昇る
未知数のドラマへ元旦の窓を開け
古い殻脱いで子等の風に乗る
孫の未来青い地球であって欲し
お茶とろり入れて豊かな朝にする

藤村〆女

正月は待つものでなくやって来る
どの面を見ても公的助成金
あの世からかかる電話に起こされる
男には行くとこがない東慶寺
コンピューター死ぬまで知らぬままでいい

高杉鬼遊

走りかたよりも大事な止まりかた
働いた分だけ遊ぶことにする
しっかりと母を受け継ぎ子に渡す
失言で閣僚辞任またかいな
遠景の松がどんどん枯れている

河内天笑

枕の下を夜行列車が通過する
秋の空にんげんなどに逢いたくない
子供の頃の話をすると老母が笑う
山家育ちかなしいときは山を見に
落ち込んだままでマラソンを見ている

小出智子

新年や年を取るほど白い雪
岩風呂の岩のうしろはあの世かも（海潮〈うしお〉荘）
牛尾の湯　弟子はいつまで経っても弟子
宿の庭の雪溶けかかる椀の粥
朝粥へ在りし日の師のおちょぼ口

橘高薫風

## 水煙抄（追加）

和歌山市　松本三九

舌たらずで恋うち明けている真昼
いつまでも愛されたくて布団干す

豊中市　上田圭津子

迷子犬　独りぼっちの遠い道
金米糖ちりばめたよう金木犀

東京都　清原悦子

門松が迎えてくれた里帰り
遠い耳隠して母は太い声

大阪府　原美恵子

孤独死の記事　他人事と思えない
ようやったなあと子育てふり返る


## 月刊『川柳大学』創刊記念句会

**とき**　**2月11日**（日）午前11時開場
**ところ**　楠公会館ホール（湊川神社内）
**題と選者**（各題2句）

「雪」　斎藤大雄選
「土」　大野風柳選
「文」　尾藤三柳選
「手」　礒野いさむ選
「紫」　橘高薫風選
「命」　藤本静港子選
「鐘」　小松原爽介選
「愛」　寺尾俊平選
雑詠　時実新子謝選

**会費**　2000円
◎零時半出句締切・投句拝辞

**主催**　川柳大学事務局

川柳太平記（212）

川柳の群像

# 西尾栞

東野大八

「僕の旧制中学四、五年頃は鈴木伝明、田中絹代のスポーツ映画全盛時代だった。僕の選手としての出場はフィールドではハイジャンプで記録は一米七〇だった。

トラックはローハードルで一一〇米で、たしか十五秒フラットだったと記憶する。当時は市岡の市立運動場へ、黒のランニングシャツの胸へ、白の花文字のTを大きくはって、黒の一線を入れた白いパンツをはいて、スパイクの音もさくさくとウォーミングアップをするエエかっこは、我ながらの良きこよなき青春であった。

いつも予選は軽くパスしたが、決勝のベストシックスは入ったり入らなんだりした。

ハイジャンプバーの上でねているよう　栞

因みに僕の跳び方はロールオーバーだったから右のような句になる」（『川柳雑誌』旧本）

「私の結婚は昭和十年一月二十二日です。この記念日をよく忘れて叱られたこと何回もあります。この頃やっとおぼえました。というのは動物飼育法にならってこの記念日にはお酒が沢山、沢山のめるし、食べ物もどっさり出るというのにつられたからであります。昭和九年に見合いして、翌年一月式を挙げる日まで一回のデートはおろか、手紙のやりとりもなかったので、式場へ入ってから、そうそうこの人が嫁ハンかいなと心細いまま高砂屋となったわけです。名を美与子という。

何しろ家内の方は九人兄妹、私の方は七人兄妹の、多産系と多産系がよったのですから毎年、毎年ふえる箸紙に、一時はどうなるかと思いました」（『川柳雑誌』旧本〝わが愛妻の記〟西尾栞要約）

「栞さんは、常に柔和で人づきあいもよくついぞ不機嫌な顔を見せたことのない人である。阪大の職を辞されて間もなく召集をうけ満州の野に三冬を越されて、運よく終戦を内地で迎えられ、昭和二十二年に八尾に製粉工場を創設して、三転遂にお菓子のメーカーとして大阪商人の腕を発揮されるようになったのも、この人の性格が自然に発揮された当然の成り行きであると思う。

ある日、路郎と私（葭乃）が、彼の家を訪ねる用事が出来た。初めて会う奥さんがまことに気のおけない、ニコやかな、肩の凝らない人であることがわかった。夫婦というものは、片方がお喋りだったり、片方が無口であるとかの例が多いが、お二人は似たもの夫婦とお見受けした。こうした融和の仲で育まれた栞さんの句に暗さがあろうはずがない。常に健康で明朗そのものである。

事業が軌道に乗るまでは、さぞかし幾多の苦労もあったろうが、栞さんの句にはそうした深刻な面が見られない。彼の目はいつも明るい日向に注がれていて、特に女性の心理をキャッチした句が多く、怒りも悲しみも彼には全く縁遠い感情であるかのようである」（西尾栞句集『水鶏笛』序文・麻生葭乃）

西尾栞、本名巌、明治42年3月6日生れ。川柳は、麻生路郎を講師とする阪大川柳講座が生れた昭和六年七月二十五日、天神祭の賑やかな晩からはじめたという。この講座は、当時の大阪帝国大学医学部の名誉教授故長崎仙太郎博士（柳号柳秀）の肝いりで誕生したもの。

何分、この講座の聴講生二十数人は、教授や助教授という刀圭界のお歴々ばかりで、高名な笠原路生、布施筑川、北川春巣という博士クラスも加わり、ご一同そろって路郎師門下生としてリラクセーションのひとときを楽しむという集まりだった。

師の路郎の葭乃夫人が「本名が巌というカタすぎるところから、まるで十七、八の娘さんが出てきそうな栞という可愛らしい柳号で堂々たる体軀と似ても似つかぬところが、やはり川柳人らしい」と書かれているが、その処女作は

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

という句で、いかにもユーモア溢れるその洒脱なお人柄の、いわば栞調の第一歩だろう。

川柳塔社発刊の柳誌の中に、番外特集のおめでたい赤い本が二冊ある。まず『西尾栞喜寿・金婚・句碑建立五周年　記念川柳大会総特集』（昭和60年12月1日発行）というので、大会出席者は四三七名。

この日のお礼の言葉―七十七のおじんと、七十三のおばんが、こんな高い所にあげて頂いて、ご挨拶できますことは無上の喜びであります。私は子供が好きで、それで沢山子供を産んでくれる嫁さんを思いました。おかげでナント六年間に四人という超スピード。召集で、その後の実績を上げざることは誠に残念至極でございました―というのがその要約。

川柳歴四十年目の豪華句集『水鶏笛』（昭和45年7月発刊）、その中の秀句―

一歩出ずれば我れ旅人となる心

の句碑を河内西国第一番の札所、大聖勝軍寺山門脇に建立された。その句碑建立五周年も、この祝典に加えられたのである。

次の赤い祝い本は『西尾栞叙勲記念川柳大会』特集号である。金色の菊の御紋章さん然たる木杯台付一式を中心に、四五四人の大祝典の中を山田良行日川協理事長がつぎのように祝辞を述べる。

「先生は昭和六年七月阪大川柳会入会以来今日まで五十八年間、柳界の第一線に活躍され現在は『川柳塔』主幹、理事長として日本を代表する柳人でいられる。また昭和五十二年五月以来、日本川柳協会常任理事として、その運営に多大の貢献をなさいました」時に平成元年七月九日で、川柳人による盛沢山のアトラクションはひきもきらなかった。

「二度も柳界挙げての、わたし如きものに盛大なこの祝典、ほんまにこの会の催されるたびにわたしの〝生きている葬式〟やと思い家内ともども涙が止まりませんでした」とは平成七年正月の新年おめでとう会での述懐。これが生前の正に最後の言葉となって、平成七年五月十五日、巨星栞大人は昇天した。享年八十七歳。法名水鶏院釈眞諦。

「私達川柳塔の仲間は、麻生路郎先生を厳しい父のように、栞先生を母のようにお慕いして川柳をたのしんで参りました。先生は常にいかに激動する時世でも変らぬものは天地万物の美しさであり、また人の世の情け、親子、兄弟、姉妹、恋人、夫婦、友情の美しさである。深い自然愛、人間愛こそ川柳の真随である、と教えて下さいました。

傘いらぬ旅へ卯の花くたしかな　薫風」

（橘高薫風主幹弔辞要約）

平成元年十一月高野山霊園に『川柳塔碑』を建て、碑の裏には「倶会一処」と記された西尾栞の魂は安らかにそこに還った。『水鶏庵こらむ散歩』（平成五年刊）が最後の著作となった。

▼次号は「**草刈蒼之助**」

# 柳籠裏三篇研究（二十八丁）

七久保博・岩田秀行・紀内恒久
西原　亮・瀬川良夫・青木迷朗
佐藤要人・八木敬一
鈴木倉之助　故岡田　甫

367　**弁慶はちからの強ひわけがあり**　千鶴

**岩田**＝「弁慶は大力量ノ人也」（松屋棟梁集）といわれるのにも理由がある。それは一生に一度しか女に交わらなかったので、精力が力の方へまわったのだというのである。

**紀内**＝賛。

じやによつて弁慶至極無病也　八七9

**西原**＝賛。不犯は力の根源説。これは腎虚の逆説であろう。

女に目のある男はむさしぼう　三二32

**佐藤**＝賛。「一生一交説」の俗説が何時頃からあったかはっきりしないが、あるいは大村沙華氏のいうように、元文二年初演の浄瑠璃「御所桜堀川夜討」が、この俗説の起源かも知れない。

**七久保**＝「一生一交説」の俗説は、「好色萬金丹」巻之三、第三置土産の項（元禄七年刊）に「武蔵坊弁慶は、一代に只一度女に逢ふたといふは大きな迂詐の皮、小野の小町は穴がなかったといふも偽り、云々」とありますが、起源説の上限は治定しがたい。

**岡田**＝弁慶の大力説は、三北寺の弁慶鐘の伝説、例の七つ道具の絵、そして衣川の立ち往生…等々から、その概念が植えつけられた。

368　**まな箸を女の遣ふにくらしさ**　石斧

**岩田**＝句意、不明瞭であるが、「まな箸」は料理人等の正式の料理法を知っているものが用いるものであるから、女が、「まな箸」を使って料理できるとは、ちょっとにくいことだというのであろうか。

**西原**＝真名、仮名の洒落で、女のくせにマナ（真名）使うのが、心にくいという意であろう。即ち箸の名にかけているに過ぎない。

**佐藤**＝難句。「まな箸」は「まな書」の誤刻ではないか、という気もするが、諸兄ならびに岡田・鈴木両先生の御意見を拝聴したい。

**鈴木**＝西原説に賛。ただ「真名・仮名の洒落」とまで解する要はない。「女のつかう」は「女のクセに」でぴったり。

**岡田**＝原本、調べました。ハッキリと「まな箸」です。真名・仮名は国学者はよく使っていますが、一般の江戸庶民は使用せず、したがって鈴木説に同。

369　**むぞうふさな物は質屋の土用干**　花口

**岩田**＝量が多いので一々ていねいにやってはいられない。虫がつかぬ程度に簡単にすますということであろうか。

見ぬ顔に惚る質やの土用干　拾二8

という句もある。

**西原**＝賛。だからこそ、次句もつくられる。

残暑迄陣をはってるい〻質屋　二九21

**瀬川**＝礎稿に賛。店先にでも、屋上でも、そ

こいらに適当に並べて干したのである。

安い質縄目のまゝで曝される　一二一乙39

安いのは田の字のまゝで質屋干し　八四6

**青木**＝賛。むぞうさな物は前説の如く安い質種で、戸外に畳紙に包まれた縄目のまま干されているので、人目に付きやすい。いい物は盗難を避けるため、奥に吊されるのであろう。

**鈴木**＝賛。

なわつきハ大地にさらす土用干　安七義4

ふのやきをむしろの上へ質屋干し　安七叶3

暑い事質屋野陣を張って居る　四六11

六月のしちや女にうらやまれ　天三信2

**岡田**＝賛。

370　**八月二日白たへの衣ほし**　山路

**岩田**＝八月一日は吉原の八朔、女郎の内証は火の車であるから、翌日はそれを早速入質という場である。一応、陽にあててから蔵へ入れるものであろう。

八月二日大雪としちやい、　二四31

八月の二日質屋へ雪がふり　拾七6

それを、百人一首、持統天皇、

春すぎて夏来にけらし白妙の

ころもほすてふあまのかぐ山

の文句を取ってしたてた句。

吉原ハ秋来にけらし白妙の　筥四5

**青木**＝賛。

二日には質屋の蔵へ積る雪　宝十二梅3

**岡田**＝別に干さないでも、百人一首の文句取りだけ。

371　**弐十軒五両がものを出して置キ**　中葉

**岩田**＝「二十軒」は、浅草寺境内の茶屋。「五両がもの」というのがよくわからぬが、ここには美女の看板娘をおいてあったので、「間男をしかねぬほどの器量のよい」という意味であろうか。

**西原**＝この五両は「堪忍五両」で、茶屋女の中には美人局をするような悪質なものがあったということであろう。即ち、そのような危ない女も出ているところが、二十軒茶屋だとの意。

**青木**＝西原氏「美人局」説賛。しかし「堪忍五両」は「腹の立つところをじっと我慢すれば、それが後におおきに大きな利益になってくる」という意で、美人局の弁済料の意ではなかろう。

**佐藤**＝礎稿賛。間男代の五両で、美人局の諷意と思う。触れなば落ちなん風情の水茶屋の女だが、亭主持ちとあっては、うっかり手も出せない。

**鈴木**＝五両は確かに間男代であるが、金と次第によっては体を売るという看板娘をいったもの。

二十軒うしろの方へつれて行キ　天二仁3

**岡田**＝二十軒茶屋、即売女説はここでは不要。亭主持ちがほとんどの意。

372　**田楽で飲ンでる所コへ新田寄せ**　洗路

**岩田**＝北条高時。田楽法師の舞を肴に一献かたむけているところを新田義貞にほろぼされたというのである。これが「田楽豆腐を肴に飲む」という意にかかっているところが面白味であろう。

てせんがくハむかしハ目て見今ハ喰ひ　拾四11

**紀内**＝賛。舞の田楽と豆腐の田楽。

**西原**＝賛。田と田のごろあわせも含む。

九代目ハ田楽好キで味噌をつけ　三六23

**青木**＝諸説賛。

田楽が過ぎて入道味噌をつけ　六四11

田楽で飲んでるとこへ鍋の蓋　九一17

―鍋の蓋は新田の紋。

**鈴木・岡田**＝賛。

## 同人特集

# 私の一句

富士山の藍に一礼してしまう　豊中市　橘　高　薫　風

記念碑が朝日を浴びている多喜二　岸和田市　岩　佐　ダン吉

冬帽子帰ってこなくなる散歩　豊中市　三　宅　つえ子

策一つ秘めて追い風待っている　大阪市　井　上　白　峰

夢を追い夢に追われている余生　高槻市　川　島　諷云児

来た道に残して置こう花の種　出雲市　園　山　多賀子

触ったらあかんその花刺がある　香川県　木　村　あきら

いい嫁がきて家中が光りだす　香川県　工　藤　吟　笑

旅はよし行く先々にある匂　大阪市　桝　本　蕗　児

気がつけば家で寝ているブーメラン　弘前市　高　瀬　霜　石

津軽孤独　雪に恨みはないけれど　弘前市　波多野　五楽庵

誘われる酒に二の舞してならぬ　鳥取市　武　田　帆　雀

ふたり暮し隣の芝生はもう見ない　京都市　都　倉　求　芽

子を生まぬ女が増えて行く怖さ　美祢市　安平次　弘　道

居酒屋へつかれた影がのびてゆく　鳥取県　黒　田　くに子

蟬しぐれ手品のように消えた朝

草書体のたりと女艶めいて

ロボットが働く辛いことばかり

割れもののよう百歳に手を添える

五階良し今日も足腰鍛えられ

妻にだけ聞かせる童話出来上がり

宴会の音頭詩吟の声でとり

これからはバックミラーを曇らせぬ

パン跳ねてコーヒー入れて今日動く

焦る気は無いのに針目揃わない

一番のもてなし皆のいい笑顔

肩組んだときはおんなじ歌が出る

残念は何で負けたか知っている

ある時の仕種父に似る母に似る

荒波に揉まれて強くなる絆

ジャンケンが弱くていつも縁の下

土産話ここのところは伏せておく

なみだ壺抱いてくれます地蔵さま

三こと目にやっと聞えた答あり

伊丹市　山崎君子

大阪市　小糸昭子

河内長野市　植村喜代

米子市　小西雄々

和泉市　岡井やすお

岡山県　荻野鮫虎狼

岡山県　二宗吟平

鳥取市　春木圭一郎

堺市　柿花紀美女

吹田市　茂見よ志子

枚方市　海老池洋

今治市　越智一水

松原市　小池しげお

出雲市　岸桂子

大阪市　津守柳伸

大阪市　松尾柳右子

倉敷市　野田素身郎

弘前市　一戸ツネ

和歌山県　児島与呂志

すらすらと言えた嘘ならしれている　豊中市　井上直次

ゆっくりと生きたい愛に囲まれて　松原市　北野久子

裏話聞けばやっぱり苦労人　大阪市　鈴木節子

子の家も二泊三日が丁度いい　大阪市　小出智子

おがむ顔も木食仏も深い皺　豊中市　滝北博史

花の香を胸いっぱいに途中下車　松原市　玉置重人

遊ばぬと雇用保険におこられる　岡山市　井上柳五郎

ぜんまいも電池も要らぬ生命かな　呉市　槇田英詩

善ひとつ重ねて生きる凡夫です　和泉市　西岡洛酔

病む戦友を置いて夕陽の丘を発つ　広島県　田村新造

二十一世紀の棚にも源氏物語　米子市　野坂なみ

だれ一人帰らぬけれど種をまく　米子市　石垣花子

忙中閑ありみんな忘れて寝ています　大阪市　大塚節子

オカリナの音色のように過ごせたら　大阪市　町田達子

終章はすべて本音で書き綴る　和歌山市　青枝鉄治

冬眠から覚めたら先ずは恋をしよう　兵庫県　遠山可住

資格とりすぎ鎧が重すぎる　奈良市　天正千梢

朧月　紫式部の噂など　出雲市　小玉満江

冬の月ぐちをこぼすに冷たすぎ　鳥取県　松下たつみ

生きているうちは人間無になれず
愛しくて両手で揉んだきみの頬
森羅万象芽吹いて生へ願いもつ
教室が祭りの顔になっている
被災地の亀裂に神が眠ってる
のど飴で老いの渇きを和らげる
引き金を引いた痛みは治らない
未来へと繋がるにぎり飯の塩
笛太鼓森に残った敗戦記
新しいドラマに出合うパスポート
一日がジョークで終ることもある
さばさばと貸した時からひとのもの
めでたくも八十年のプランクトン
地酒飲む沢庵だけで良い孤独
十四番目の旗日に決まった海の月
三界に露の命の置き所
十年日記いくたり人と別れしか
今年から孫にも盃のまわる初春
どの辺りからあの世だろうか空深し


青森市 工藤甲吉
和歌山市 宮口克子
高槻市 井上照子
岸和田市 芳地狸村
尼崎市 春城武庫坊
尼崎市 春城年代
海南市 三宅保州
米子市 政岡日枝子
大阪市 北勝美
高知県 赤川菊野
米子市 金山夕子
大阪市 玉置英子
吹田市 栗谷春子
茨木市 藤井正雄
仙台市 川村映輝
出雲市 石倉芙佐子
豊中市 田中正坊
茨木市 堀良江
広島県 藤解静風

秋の絵に淡い約束一つ足す　富山市　舟渡杏花

人の道光なくしてから分かり　島根県　堀江正朗

心読むようにまたたく星といて　島根県　堀江芳子

世話好きの雑事に長けて無位無冠　倉敷市　田辺炙六

どの首も疲れて折れる終電車　松山市　白石春嶺

雨降れば有難く晴れの日は嬉し　大阪市　本間満津子

汚れた川へ旅立っていく水すまし　寝屋川市　江口度

今のうち残しておこうありがとう　富田林市　松本今日子

微笑んでゆっくり横に振った顔　岡山市　時末一灯

お互いに支えあってる俺お前　奈良市　米田恭昌

なすことの無い一日よ川流る　竹原市　時広一路

ポチと言う僕が犬とは知らなんだ　豊中市　江口明光

又一つ年を重ねた鏡餅　堺市　黒田真砂

地獄絵のコーベ見下ろす風見鶏　大阪市　板東倫子

がっちりと女を摑むやせ薬　十和田市　阿部進

雪国は木の根っこから春になる　弘前市　中山雅城

ダルマ目を貰って身の程もう忘れ　下関市　石川侃流洞

いもづるを一皿として終戦日　唐津市　仁部四郎

仲直りかかとの低い靴にして　富田林市　片岡智恵子

無になろうなろう出番が近くなる
斗酒なお辞さずと舌がもつれ出す
もう好きと言わずに酒を止めと言う
叱られるうちが花かと冬の道
有頂天すっぱい味が分からない
合掌を蕾にそして花咲かそ
おしゃべりと無口どちらも可愛い孫
高原も実りの秋か牛孕む
止り木の陪審員は無責任
もう少し素直になれと足の裏
耳鳴りはX星のシグナルか
バーゲンで帽子を一個買っただけ
千客万来少し片付け下手な家
順風に心ゆるすな亡母の声
魚を捌いて海の深さへ遠くいる
飛び込んでいくのは母の胸ばかり
化け物が捕まりいよいよ霧ふかし
ストーブ列車でするめが匂うなり
子孫には侵略国では遺すまい

和歌山市 堀端三男
黒石市 相馬一花
出雲市 竹治ちかし
寝屋川市 堀江光子
大阪市 神夏磯典子
弘前市 蒔苗果林
柳井市 弘津柳慶
高石市 浅野房子
唐津市 久保正剣
島根県 石田清泉
島根県 小砂白汀
島根県 藤原鈴江
松山市 宮尾みのり
出雲市 富田蘭水
和歌山市 田中輝子
河内長野市 井上喜酔
大阪市 正本水客
五所川原市 斉藤劦
高田市 岸本豊平次

占いはどうあろうとも君が好き　豊中市　辻川慶子

宇宙人地球の核を笑うかも　竹原市　古谷節夫

他所の花眺める距離は開けておく　和歌山県　小倉アサ

日本語の乱れ外人指摘する　平田市　久家代仕男

のど仏につかえた夢が出てゆかぬ　米子市　田中亜弥

一粒の雨のはるかな旅立ちだ　米子市　中井ゆき

しばらくは泣かせておこう愛娘　京都府　稲葉冬葉

薬味となって古い女のままで生きる　米子市　光井玲子

会者定離　仏のみちはあかるくて　奈良市　宮口笛生

信号の色で占う風の街　和歌山市　細川稚代

頼るより頼られる身をよしとする　岸和田市　三輪通彦

定型は郵便だけが定規あて　豊中市　湯浅馬洗

久びさに逢うて優しい人やさし　大阪市　渡部さと美

一流の味を道具に教えられ　大阪市　清水利武

片方のモモが青くて和解せぬ　和歌山市　玉井豊太

主流から外れて笑い取り戻す　岸和田市　高須賀金太

余命とはこんなことかと寝ころんで　岸和田市　島崎冨志子

雨だれの今日の指揮者は誰だろう　寝屋川市　柴田英壬子

道聞くと杖が夕日を照り返す　廿日市市　林野甦光

目を入れてからの達磨はよく転ぶ　大阪市　稲本凡子

帰らねばならぬ家あり午前二時　鳥取県　新家完司

高野曼陀羅　星にだんだん近くなる　和歌山市　福本英子

漕ぎながら岸のようすを見ておこう　米子市　澤田千春

南向きの部屋がうれしい老夫婦　岸和田市　原さよ子

父の漕ぐ舟に安心しきっている　米子市　菅井とも子

直線が引けて自信が湧いてくる　松江市　恒松叮紅

優しさの限りを尽くす嘘である　鳥取市　小谷美ッ千

長寿国敬老会も若くなり　藤井寺市　笠原吸江

二次会へブレーキのない顔揃う　羽曳野市　榎本吐来

鈴つけてみてお互いを確かめる　芦屋市　黒田能子

朝焼けのイオンが燃える空の色　茨木市　井上森生

金のある強みと金のない強み　吹田市　山本希久子

バラが咲くと思う必ず薔薇は咲く　西宮市　奥田みつ子

大空の青に染まった汗となる　堺市　山本半銭

メンバーの一人一人は頼りない　鳥取市　小林由多香

風当りきつい人の世に夢一字　八尾市　宮西弥生

老いの身に何弾ません散歩道　奈良県　長谷川春蘭

春の夢わたしを若くしてくれる　大阪市　奥田良子

人肌にあわす玉露のひとしずく　鳥取県　土橋　螢

千年杉老母があやかれますように　香川県　川崎　ひかり

熱燗とオンザロックで馬が合い　八尾市　山下　美津留

子に遺す捨てられそうな物ばかり　横浜市　菱田　満秋

年新た富士はいよいよ孤高たり　富士宮市　渥美　弧秀

サティアンに一本もなし鯉のぼり　大阪府　籾山　隆

あいまいで世界の風に揺れる国　吹田市　瀬戸　まさよ

愛復活晴れ紫陽花の咲き残り　東京都　山口　新子

本番になると小さく見える的　宇部市　平田　実男

滔々の流れ刻々同じからず　鳥取県　林　露杖

遠耳のふたりになって珍プレー　出雲市　吉岡　きみえ

太い指見せて子に遺る物もなし　岡山県　小林　妻子

スプーン一杯ほどのショックは毎日だ　鳥取県　田村　きみ子

雲行きのわるい男のコップ酒　堺市　一瀬　福一

受けた恩返し男の顔になる　箕面市　椎江　清芳

石は永久　人を裏切ることはなし　京都市　山海　友熙

一握りほどなる老母の髪を梳く　八尾市　宮崎　シマ子

今のろし上げねば流れ変るまい　鳥取県　上田　俊路

空白のなんと饒舌なることよ　守口市　結城　君子

遺伝子の加工に神を越す虞れ
富山市　酒井　輝

デザートに別の胃袋あるらしい
岸和田市　長谷川　呂万

座り直して昨日をすこし清書する
米子市　八木　千代

てれくさい顔の羅漢も一人居る
京都市　松川　杜的

親切が少しうるさいドアチェーン
京都市　松川　芳子

あっち向いてほい僕の荷物が消えている
大阪市　西田　柳宏子

我が町に破綻銀行みぢかなり
岸和田市　藪野　けい子

温顔と言われ苦言をひっこめる
岸和田市　寺田　甚一

はずまない毬にきあいを入れている
米子市　青戸　田鶴

追憶の糸口見つけた冷し飴
川西市　松本　ただし

四分六をひっくり返す策がある
大阪市　河井　庸佑

トンネルを幾つか越えて来た余生
吹田市　藤村　〆女

月満ちて欠けて命の重さかな
羽曳野市　吉川　寿美

二つ目の谷を渡ってから迷う
尼崎市　黒川　紫香

少し無理しよう残りの日はわずか
茨木市　島元　ふみ

しあわせ彩で結納が来る秋が来る
竹原市　森井　菁居

いのちの果て思う牛乳噛みながら
大阪市　西出　楓楽

棒グラフ命縮めた高さかも
高知市　川竹　松風

石になってしまった私のこころ
島根県　松本　文子

祈りひたすら花沈黙の飛散かな　弘前市　佐治千加子

対立へドア蹴って出て深呼吸　羽曳野市　酒井一壺

人間は読書によって化かされる　倉吉市　渡辺独歩

生かされていますと書いた賀状来る　寝屋川市　岸野あやめ

体重計がフフンと笑うほど軽い　鳥取県　土橋はるお

若者の蔭に蔭にと咲く野菊　鳥取県　中原汲香

大あぐら小あぐら笑い合うことだ　鳥取県　中原諷人

あっけらかんと笑う魂いてくれる　鳥取県　中原みさ子

平凡な人が気高く見えてくる　鳥取県　西原艶子

母の眼に会うと本音がうろたえる　八尾市　吉村一風

幾星霜無傷のままの夫婦茶碗　倉吉市　淡路ゆり子

育児書をはみ出している元気な児　出雲市　久谷まこと

たちこめる孤独でことにのめりこむ　和歌山市　桜井千秀

姑さんが晴れやかになるちらし寿司　寝屋川市　平松かすみ

本屋に本溢れまだまだ死ねません　岡山市　川端柳子

偏差値の順に並んで咲く蕾　倉吉市　最上和枝

明るさが少し戻った神戸ッ子　加古川市　吐田公一

鍬を持つ手が軽い茄子の風　富田林市　和田維久子

流れ星ひとつきれいに死んでゆく　寝屋川市　高田博泉

さざ波をうねりに変えてゆく噂　岸和田市　田中文時

老いて尚人敬いて長寿なり　郡山市　坊農柳弘

妻という日本一の杖がある　倉吉市　奥谷弘朗

旅の母明るい電話かけてくる　竹原市　小島蘭幸

会議終え笑いと方言出る廊下　加賀市　細呂木魯木

山並がふる里に似た旅日記　米子市　木村富美子

ふところの深さを教え母は逝く　米子市　茂理高代

原爆ドーム鳩も鴉も肥えている　守口市　森川まさお

ピエロってはにかむ顔も持っている　大阪府　八十田洞庵

詰将棋つくり無限の海に会う　大阪市　川端一歩

人生へ欠点の皺溜めて老い　岡山県　岩道博友

終着へ器に合わす処方箋　和歌山市　山口三千子

わたくしもメダカも地球守る会　鳥取県　谷口次男

命ひとつ鬼も仏も住まわして　和歌山市　牛尾緑良

父の夢見事に破り息子の船出　高知県　小澤幸泉

またたいて星は地球の和を願う　大阪市　藤田頂留子

喜多さんは夏まけ弥次さん一人旅　吹田市　古川喜美子

ささやかな願いに飯が炊けてくる　西宮市　門谷たず子

岐れ道淋しい方を行く遍路　今治市　月原宵明

鏡拭く女の道のあとや先　岡山県　矢内寿恵子

生きる意味まだブランコが揺れている　西宮市　牧渕富喜子

水鳥に似た悠々でひとりいる　西宮市　山本義子

てるてる坊主明日地震の無いように　宝塚市　小倉藍

思い出が取り返したく海を視る　伊丹市　小熊江美

罹災再び割れない亡母の碧い壺　西宮市　亀岡哲子

公園に孤独を埋める椅子がある　西宮市　菊池トミエ

モナリザは下手な落語を聞いている　西宮市　西口いわゑ

冷静になれば何でもない話　和歌山市　玉置当代

まほろばのやまとにおわすほとけのめ　八尾市　片上英一

手水鉢吾唯足るを知る下品　弘前市　岡本花匠

喜びも悩みも種はおんなじ娘　神戸市　木村貴代子

一月十七日　晴　街がつぶれた　豊中市　小林一夫

一周忌まだまだ言うことありまっせ　豊中市　安藤寿美子

避難してもう三度目の爪を切る　西宮市　秋元てる

後や先漏れる充電だとしても　西宮市　林はつ絵

自販機がことり砂漠になる都会　宝塚市　上田佳秋

老人が恋をしたっていいじゃない　八尾市　高杉鬼遊

カーペットみたいな銀杏ふみしめる　堺市　河内天笑

麻生路郎の作品とその周辺

# 大空のこころ (60)

橘高薫風

謹みて　日の御子の御降誕を寿ぎ奉る（三句）

皇太子早くも春になし給い

御降誕朝からさけとなりにけり

日の御子に硯を洗い筆洗う

昭和九年新春特集号に久しぶりに見た路郎先生の作品は今上陛下誕生を寿ぐものである。表紙の絵は田村孝之介画伯で朝日と鶴と松、花札一月の現代風アレンジ。路郎先生は巻頭に「新春雑事」を書かれる。尊称・賀状・例証の項目あるも前者は長いので省略する。

**賀　状**

近ごろ、年賀状を年末に出したことがない。いつでも春になってからボツボツ出すことにしている。一時は年賀状に凝った時代もあったが、あれは若さがさせた業である。一種の遊びにすぎぬ。近ごろはスッキリした賀状に敬虔さを感ずるようになった。

政治家や実業家の代筆賀状位ありがたくないものはなかったが、これも止むを得ないものとして宥すようになった。それだけ人に対する熱を失って行くのかも知れぬ。世の中が判るということは灰色の悲劇に生きることだ。赤い悲劇、青い悲劇、そんな時代からだんだん遠ざかって行くことを思わされる。

**例　証**

壺そっくりに、円円と太った顔の持主である私のムスメが、どうしたら痩せられるかについて腐心している。勢い、それが火鉢を囲んでの話題の一つになる。

S氏が「肉を食べたら痩せられるよ」と言う。「でも、丸鉄のオッさん、あんなに太ってるわよ」とムスメがすぐに反証をあげた。なるほど丸鉄のおッさんのビール樽のような姿が私の眼に浮んだ。しかし、S氏もなかなかスッ込んではいない。「岸源のおッさんを見給え」とこれに応酬した。なるほど又も僕はうなずいた。そして岸源の大将の頬の痩せこけた顔が目に映った。

川柳家の議論を読んでいると、両方で都合のいい例証を挙げて力んでいること、ムスメの丸鉄説、S氏の岸源説に類する場合が多い。

人間の肺腑を貫く名句は時間を超越するところまで行くもので、古句が現代句より古いとは言えない。お話にならぬ拙い句を創っていながら、本格だの、自由律だのと力んでいるのを見ると、滑稽に類する。古いといえば拙劣で、新しいといえば優れていると思うのは謬説だ。殊に形式論に囚われて真の川柳の影すら踏んだことのない人々を気の毒に思う。

路郎先生の健康が順調に上向いて来たらしく、鋭い舌峰が甦りつつあるようだ。

他に「妻の顔」というエッセイあり、十四人が書いておられるが、次はその中の一篇。

植木鉢の花　　前田　五健

毎日見飽いてる顔だが、さてと聞かれると困る。エート鼻、眼、口、耳、揃っている。揃ってはいるが、その揃い方、つまり配置についてはどうも感心しない。鼻は無防禦的、眼は細過ぎてあるにはあるという程度。口は相当なもの。それを鼻は花なり、眼は芽なり、耳は実なり、歯は葉なりの草木にすると、あんまりいい花ではない。まあ植木鉢に似合のものであろう。然し初春の丸髷にでもなると、ソレ古川柳の「松の内我が女房に……」座五が気に食わぬので目下考え中。

新春のお笑草として愛妻の顔の批評をお願いしました。（編集局）とあるが、流石は野球拳の創始者、洒脱に流しておられる。

# 秀句鑑賞

同人吟新家完司
—12月号から

**足二本歩道橋の矛盾を昇る**

田中　薫

弱者を考慮せずに突っ走って来た車社会は至る所に矛盾を生んだ。歩道橋をのぼらねばならない足も哀しいが、歩道橋の何たるかさえ理解出来ず、轢き殺されている小動物たちの姿は哀れで痛ましい。

**介護する方もされたいほどの歳**

宮尾　みのり

ここにも弱者を後回しにして来た福祉後進国の姿がある。高齢者の介護は、個人で処理できるほど生易しいものではない。介護保険の設立も含めて、真剣に取り組まなければならない緊急、且つ重大な問題である。

**勇気出そうと朝の鏡に言うのだが**

西山　幸

傷つきやすいナイーヴな精神にとっては、何気ない日常の人間関係さえ、時として苦痛となり勇気を必要とする。自分を勇気づけられるのは自分だけであり、その勇気は思いやりのない言葉ひとつで消え失せるほど脆い。

**花束のようにひい孫渡される**

二宗吟平

姿が見える。元気で長生きした人にだけ手渡される「ひい孫」というご褒美は、花束のように晴れがましく両手に重い。「花束のように」が、姿と思いの両方を形容して美事。

**けんめいに歩く　歩くと何処へ行く**

堀江正朗

何処へ行く？　と普段は考えたりしない。移ろい行く季節の早さに驚かされて、ふと立ち止まった時、このいのち何をあくせくと思う。そして、誰からも何の答えも得られないまま、また歩き始める。たどり着く先は誰も知らないし、知ることも出来ない。

**お化粧が早く才女の資格あり**

仁部四郎

化粧の時間は、どこで妥協するかという、冷静な判断力と決断力にかかっている。判断力と決断力は才女の第一条件である。

いつまでも諦め切れず、鏡に文句を言っている姿は可愛いが、才女とは言い難い。

**結末が幸福な本ばかり読む**

新　正子

悩み多いこの世で、何故これ以上の悲劇を読まなくてはならないのか。せめて幸せな物語でも読んで、浮世のことを忘れよう。哀しみは自分のことだけで充分である。

**ジェスチャーで本当らしく思わせる**

久谷　まこと

声が小さくても訥弁であっても、真実の言葉は聞く者の心に素直に伝わる。心が伝わらないのは言葉が足りないのではなく、思いに真実味がないからであろう。ジェスチャーで真実味が増すのか、減るのか。

**小さいままきたないままにうまい店**

木村　貴代子

「きたないまま」が面白い。このような店の親父さんこそ、真の料理の哲人と言わねばならない。雑誌などに紹介されて、荒らされないことを切に祈る。

**床に臥す夫の悲しいほどの嵩**

丸山　よし津

家にいる男は嵩高いものである。まして、床に臥しておれば…。体調が悪いときぐらいは大事にしてほしいが、「悲しいほどの」とまで言われると、こちらまで切なくなる。やはり「亭主げんきで留守がいい」か。

**口あけて電車で眠る戦士たち**

川端一歩

会社でネジを巻かれ、得意先では叱られて家に帰れば、粗大ゴミだの濡れ落葉だのと邪魔にされ、雨が降っても休むわけにも行かず定年になればポイと捨てられる。この国の高度成長を支えて来た企業戦士たちに幸あれ。

**天高く閣僚の名も知らぬ秋**

田中文時

ようやく覚えかけたら非常識な失言で首が飛ぶ。閣僚の名前など知らなくても、何の差し支えもない清々しい秋である。

「大臣」とせず「閣僚」としたのが手柄で濁音の混じらぬ硬質の句に仕上がった。

**信心なら星に太陽お月さま**

渡部さと美

人知を越えた何物かがおわす気配は、なきにしもあらずだが、それは立派な社に棲んで高額のお布施を集めるような代物ではない。空を見ていると、人間のちっぽけさが解る。

**十二月の音はガラガラ抽斗器**

藤田頂留子

季節を感じさせる音が少なくなっているが商店街のジングルベルと抽斗器のガラガラはまた正月が来ることを知らせてくれる。どうせまた六等賞のティッシュペーパーだが。

**先着の百名様にひっかかる**

一瀬福一

商売人もあの手この手で生きのびなければならない。日本人を走らせるためには、競争本能を刺激するのがいちばんである。同じ作者の「大将とはまち一本つかまされ」も、大将とハマチの取り合わせが絶妙で面白い。

**年金になってもお金貯めている**

月原方郎

働き蜂は死ぬまで蜜を集め続ける。老後のためにとせっせと貯めていながら、その老後になってもまだ貯め続ける。年金は今まで働き続けて来た褒美のようなもの、誰に遠慮することもなくパッと使いたいが、貧しい国に住みついた習い性というものか。

**本棚の本の割には知恵がない**

椎江清芳

我が本棚を省みて苦笑を禁じ得ない。その中の一冊でもしっかりと頭に入っていれば、もう少しましな人間になっているのだが。

**入院して早々部屋の蚊にさされ**

吉田笑女

待ってましたとばかりにさされてしまったのである。入院という状況にありながら、この佳句を生む余裕に驚く。川柳の材料はどこにでもころがっているものだ。

**短編が二つ多忙な日が暮れる**

時広一路

人生は一編の小説に如かないが、一日はひとつの短編である。家の中に閉じ籠っていてはドラマは生まれない。用事がなければ用事を作ってでも外出しよう。

**今朝名士が逝って隣に子が生まれ**

矢野佳雲

「朝」が効いている。新しい朝である。輪廻転生、名士の生まれかわりとまでは言わないが、このようにして舞台は回って行く。新しい朝に生まれたいのちに幸多かれと祈る。

**救急車に道あけてやる霊柩車**

梅田宣司

いのちのドラマである。救急車が発する緊迫感はいのちの叫びであり、すべてのものに優先する。霊柩車の旅人も無事を祈っているだろう。渋滞の道でサイレンの音を聞くと胸が痛む。戦闘機より救急ヘリコプターを！

**祭り月なのに喪服を吊っている**

八木千代

人を送るのは何月であろうと辛いもので、最適の月というものはないが、祭り月は生者の活力がうとましく、よりいっそう辛いものがある。喪服などは黴が生えるぐらい、箪笥の奥で眠っていてもらいたいものである。

# 西田柳宏子選

## 五濁抄

富田林市　藤田泰子

寒の月　自分の影と戯れる
一人芝居のシナリオを書く軽いペン
嫁がせて胸のあたりの寒い風
ねじ巻けば未だ未だ動く古時計
行平で芋粥煮てる冬ごもり

尼崎市　長浜澄子

立冬や九谷の肌の恋しかり
女郎花ふっと乱れてみたくなる
煮こごりに亡母の叱言が聞けそうで
君子にはなおほど遠い爪の伸び
生きるってたらい回しに慣れてくる

寝屋川市　森茜

長生きをして貰いたくこきつかう
思いどおりにことが運んでいく疼き
竹格子にてっせんほどをわきまえる
ルワンダを語ると残さずに食べる
受話器から土の香りが噎せてくる

鳥取市　植田一京

秋日和　逢いたい人がひとりいる
悪女か菩薩か妻の正体わからない
血縁の絆は強しまた怖し
転んでも煽てられたら木に登る
もう一度念押す握手して別れ

今治市　中村好恵

二十四節季うすれ記念日ばかり増え
日本に住み横文字に悩まされ
子離れの儀式とおもう華燭の日
馬鹿バカと好きで貰っておきながら
協調か妥協か一歩ずつさがる

島根県　三代朝子

いい友でいたくて長所だけみつめ
忘れものしたのか秋の蝶が舞う
ひとつずつ趣味をふやして夢やまず
申訳なさそに野菊咲く小径
そばに居るだけで豊かな風もらう

今治市　渡辺南奉

元旦や恙ないのが物足りぬ
正論は金が要るから無視される
淋しくて花買って来た遠回り
ネズミ捕るたびに飼猫叱られる
無造作のとこまで夫婦似て困る

愛媛県　安野案山子

遣遂げた六十点を誉めてやる
長男の丼飯が頼もしい
夕焼けの色に染まった吊し柿
パソコンに使われているのを気付く
良いことがあったら直ぐに顔へ出る

豊中市　石川勝

小児科は子供ことばの聴診器
カンナ屑ころころ手抜きせぬ大工
かな釘で母が叱ってきたハガキ
ああそうか妻の誕生日はきのう
大小の小さい方を取るも齢

札幌市　三浦強一

その訳が先に行ってた左遷の地
大物になれると思う玉の汗
友情のパンチ後から効いてくる
矢印をどこまでも行く蟻の性
ジーパンのお点前若さはちきれる

大阪市　三浦千津子

定年後婦唱夫随の陽が昇る
嘘ひとつ言えず男の痩せた脛
爽やかな目覚め煩う事もなし
幸せを握ると明日が眠くなり
気配りの届いた愛に囲まれる

富田林市　山原昭水

耳元で仏と鬼が喧嘩する
そのうちにきっと判るよ父の拳
目がきれい嘘をつかない人だろう
妹が姉の恋愛指南する
とろろ汁食べたくなって里がえり

久留米市　鶴久百万両

大正ロマン語りつくすに刻がない
竹の花咲いたら朱鷺を飼ってやろ
釘曲るなにか言い分あるらしい
悪友のいる靖国へ会いにゆく
風の子と遊ぶ砂丘も冬に入る

八尾市　村上剛治

見た目にはとてもきれいな毒きのこ
見られてるような気がするすねの傷
汲みつくすことはできない母の愛
無理やりに笑わせようとする無芸
温かい心に心響き合う

秋田県　湊　修水

ボロ儲けしてる邪教が慌てだす
逆境の谷でやさしい風にあう
罹災して人の情けが身に染みる
木枯らしに冬オーバーがクシャミする
外は雪一番風呂の入り心地

綾部市　藤田芳郎

ハイハイハイと妻が胃の底突き上げる
敗れても勝っても生命削る音
トップの座狙うコップの中の乱
お賽銭投げて煩悩だと思う
身の丈に合った穴なら落ちてやる

青森県　西谷鐵郎

ひっそりと風のないのに散る枯葉
今生の名残りの色をななかまど
柿の木にのぼって遠い日に還る
山の湯に紅葉浮べて詩人なり
来し方を妻と語れる夜長かな

藤井寺市　高田美代子

片足で立って若さをたしかめる
煮ころがし姑が元気で有難し
なんとなく暖かそうなわたの花
不揃いの器で食べる妻の留守
困ったことで何を食べてもおいしくて

静岡市　佐藤次枝

老妻に定年ほしい台所
娘なら聞いて貰える愚痴を溜め
なめられてたまるか犬と根比べ
長生きを戸惑いながら母は生き
ボランティア仕終えて心地よい疲れ

島根県　菅田かつ子

おしゃれしたところで何処へ行こうかな
おくさまなんて呼ぶからつい買った
紅葉がすてきネお腹へってきた
夫を待つ寒い夜ですお月さま
おばあちゃん孫に言われていい気分

香川県　田中ふみ

口下手の言葉の裏に温味ある
子沢山やりくり上手亡母の知恵
生涯学習刺激の欲しい脳細胞
習わしをユニークに替えて過疎に住む
会いたいがペダル踏むには遠すぎる

八尾市　村上ミツ子

出る杭が打たれバランスとれている
気持だけ走り転んでばかりいる
とぶための風が来るのを待っている
鼻の利く人のうしろについて行く
来てほしくないが来ないと気にかかり

大阪府　澤田和重

本人がてれると美談なお光り
一呼吸おいた言葉が丸く出る
宝です僕のヘソの緒いれた箱
不器用な箸を煮豆が知っている

和歌山市　山根めぐみ

一歩引く心に見える風の彩
丸い心　血はさらさらと流れてる
気がつけば亡母の足跡ふんでいる
寒そうな生命ほろほろ木守柿

兵庫県　西井つや子

花活けて素直な心取り戻す
淋しさは松枯れ目立つ秋の山
欠伸かみながら法話を聞いている
古希の坂妙におしゃれがしたくなり

熊本県　大川幸子

家紋と一緒に祝う宮参り
アンケート立派な意見ばかり書き
飛ぶ噂　嘘かも本当かも知れぬ
今年こそ自分に負けぬよに生きる

河内長野市　大西文次

傷心の子供に温い母の膝
真直ぐに歩いて子蟹叱られる
席蹴って遠く避地に飛ばされる
野心もうとっくに捨てた無精髭

米子市　足立由美子

大物になってやるぞと蟻の夢
娘の恋にわたしもいつか弾み出す
価値観が合うと心底笑い合え
一応の夢は今年も持っている

西宮市　古谷ひろ子

お仏ぱん新米やなと亡母わらう
世渡りの下手な夫の櫓もにぎる
異国よりなぜか疲れる街トウキョウ
スペアが作れぬ鍵を持っている

宝塚市　永田暁風

この恋も記念切手も黄昏る
三輪車やがて単車を買えと言う
一盛りに盛られて秋が売られゆく
雲は流れる刻々思い変えながら

寝屋川市　宮崎菜月

形態安定シャツ就職戦争終るまで
生姜湯で夫婦和合のティータイム
平凡に果てる女の市場籠
追い肥を見事に打った鍬の後

泉佐野市　稲葉洋

また一月十七日がきた悪夢
日常の躾に母の愛が在る
モノクロで音一つなし雪の里
正座した反省しびれだけ残り

句読点　寒い話が書き溜る
円空のノミは芸術口にせず
寡婦ひとり落ち葉の私語を聞いている
取り巻きになるには骨が硬すぎる

大阪市　一本勇太

ずぼらして初日を拝む露天風呂
浦島の帰省　故郷は温かい
茶碗酒　昔むかしの武勇伝
遠い日の艪音がきしむ漁師鍋

摂津市　井上源一

無雑作に活けて何流かときかれ
投函の音にときめくものがある
衣きせた言葉の謎がまだとけず
ポケベルを持つから何か落ちつけぬ

今治市　塩路よしみ

座りダコここが一番好きな場所
六十でやっと煮〆が上手くなり
踏みしめてふんわり温い秋の山
時々はいじわるばあさん演ってみる

松江市　寺本明子

一年の計を立てたが寝正月
老兵は未だ消えぬまま喜寿の春
年始客に玩具のような犬が吠え
十人十色意見仲々まとまらず

富田林市　欄智久

納得の批判をされて腹を立て
掘り下げてゆくと波風立ってくる
ストレスのたまり具合と電話代
少し気にしてくれていた電話口

堺市　宮本かりん

熱意には勝てぬ若者信じきる
一粒も流さぬように米洗う
幸せの予約みんなのシャツたたむ
くつろいだ父のあくびに明日がある

鳥取市　山宮愛恵

助手席でおしゃべり好きが眠ってる
まつたけを焼く中流の証かも
寝ころべば屈託のない雲あそぶ
晩秋のコーヒー砂糖二つ入れ

島根県　福間博利

足向けて寝られぬ人が増えた幸
観察というよりじっと見てる画家
上昇の運　横波に気が付かず
胃に溜まる思いを聞いてくれる海

今治市　渡邊伊津志

理不尽を納得させた多数決
エプロンを畳んで主婦の日は暮れる
流行を気にせぬ父の作業服
無理すなと嫁が諌めるやせ我慢

寝屋川市　北岡波留吉

鳥取県　山本正光

干からびた脳に潤滑油をそそぐ
入院の小さな荷物重いこと
占いを七分信じてよいのかな
妻というつっかい棒は外されぬ

和歌山市　木村親蹐

ドービングしたのか妻の強いこと
極楽はよいがこの世はもっと良い
定年の先にとびたい夢がある
父さんは茶の間にいてもホームレス

唐津市　宗弘

つまずいた石は心に溜めてある
つまずいた畳の縁の高さ見る
信用の貸し借り里の小商い
山門の仁王の笑う日はあるか

高知県　細木子龍

帯だけはかなり派手目な悪女ぶり
指切りの本音は別においてある
孫叱る娘に妻の顔があり
孤に生きて三猿主義へ私語の膳

和歌山市　福重美子

こしひかり文字を信じるしかないの
鬼の角　歳には勝てず脆くなり
毎日が同じに見えて遅々変る
素人の手品のように子が生れ

鳥取市　杉本孝男

公職という保護色へあぐらかく
灯が消えた隣のけんか気にかかる
太陽が笑うと梨が甘くなる
溜息を吐くほど歳はとってない

今治市　村上久美子

亡母真似て地図には乗らぬ橋渡る
トビの子をタカにしようとした誤算
ニンゲンと言う害虫に地球病む
ライバルが居て八起き目の意地が湧き

田辺市　大峠可動

主の祈り妻の祈りに春の地図
大切な人だと思う千羽鶴
千切り絵のねずみが五匹多産系
風の馬鹿　弱者ばかりを追い回し

和歌山市　楠見章子

ど忘れを笑い袋に詰めてある
最後のボーナスみな銀行に持ってかれ
クラス会楽しく見栄を張り合おう
噂話メリハリつけて紗をかけて

成田市　斎藤房子

身の内の炎なだめて縄をなう
物わかりいい姑と自負の日々
想い出の糸にからまる未練ばな
矢が尽きた男に重い十字架よ

柿熟れて紅葉が映える青い空　熊本県　増田一乗

イスラエル暗雲呼ぶかラビンの死
稲刈りが済めば蘭草がもう植わり
金掛けた盆栽ならぶ文化の日　豊中市　藤原桂子

敷もみじ心遊ばすひとり旅
父母に甘え夫に甘え子に甘え
ボンジョルノ梅干ひとつ旅をゆく
たっぷりの時をもらって生きている　大阪市　中田あい子

やがていく亥の年あばれすぎました
木石のようなお方に愛の過去
過信した身体が秋に造反す
仕舞舞うあの娘　野球部マネージャー　松江市　佐野木みえ

盆栽展　枝を曲げられ痛々し
柿熟れて窓の景色も艶めいて
どくだみ茶飲んで今年も生き延びる
したたかな女の見せた片えくぼ　岡山市　中嶋千恵子

妥協からほぐれ始めた紅の糸
残照に炎える傷あと胸に抱き
読み書きの上手な母の泣きどころ
標的にされた案山子のひとり言　犬山市　早川盛夫

二ＤＫ妻の無言は恐ろしい
何事もなかったような朝の声
あの時の拳を今も握ってる
学校がとても困った綴り方　岡山県　大石あすなろ

うしろから進軍ラッパ老母が吹く
生涯現役きめて明日が動き出す
七坂を越えて夫婦の背が丸い
アルバムにピンボケの旅貼っておく　羽曳野市　山本たけし

一本をとられ狂うたリズム感
清貧の七十年に悔いはなし
ダイエット我慢出来ない秋の味
天高く大和路紅く山迫る　高槻市　江原秀夫

空気が流れるテレビが鳴っている
息巻いた意見いつしか宙に浮き
言うだけは言ったぼつぼつ手を握る
ときどきは悪妻になり妻元気　鳥取県　橋本多哥由

ライバルの重石にきっとなってやる
秋の夜にわたし信じる影法師
ひかえめの感謝心は美しい
正論を脊に地酒くみ交わす

今治市　野村清美

写し書きよりもコピーの手間いらず
芋の葉で露が真珠になったとさ
一度では済まぬ用事を溜め過ぎる
陽と雨の情けに育つこぼれ種

大阪市　尾崎黄紅

タクシーに乗って財布を確かめる
肉入りの肉が少々見当らぬ
伊勢の旅　小学校で行ったきり
枯草になるまで刈るを待ってやり

尼崎市　森安夢之助

いい汗だ勝負にまけて悔いがない
射程距離で遊ばせている自信
ポックリ寺　幸せそうな貌ばかり
飲む話なら聞えます僕の耳

神戸市　向井泰子

あったかい珈琲お話いたしましょ
母さんは騙されてます知ってます
さあおでん笑い袋もうす味に
象さんのうたが聞こえる遊園地

広島市　藤川幻詩

土の道探して犬の散歩させ
行きどまりかも知れぬ我が道を行く
外反母趾　気づかいながらブーツ履く
ふるさとの秋へあふれる地の恵み

岡山県　国米きくゑ

そっと肩触れ合っているだけでよい
妻の座も温もり遠慮ない欠伸
回り続けた夫婦茶碗の軽いひび
参考書　亡父の綴った農日誌

寝屋川市　瀧本八十八

天地人恩に包まれ日向ぼこ
人形の息吹きが酔わす文楽座
窓際で隣のビルの活気見る
沖縄が背負った痛み半世紀

鳥取県　原みさを

譲られた席の温みがこそばゆい
説法のネタが手垢でまっくろけ
溝埋める一升ビンを提げて行く
世紀末泳ぐバタ足くり返し

島根県　武島ちよえ

一俵の米を担いだ背がまるい
捨ててから昔の柄が流行りだし
エプロンにこぼれるほどの秋貰い
自慢にもならぬ診察券だけ溜り

尼崎市　向井末貞一

蛇口から母の叱咤がほとばしり
五十年戦友と語らう鎮魂碑
名月をひとり占めする露天風呂
威勢よく古里の川鮭のぼる

福岡市　井崎ミサ子

奥様と言われ思わず身構えた
しきたりを気にせぬ若さに目を見張り
反論もせずに笑って聞くゆとり

大阪市　川原章久

逃げられぬ顔に摑まる赤い羽根
熟れ栗が弾けて落ちる能勢の山
孫の寄る甘える膝は決めている

高槻市　小林一閑

ポリープ五つ無断駐車をしてました
我が家のベッドあれが寝やすい帰りたい
妻に言うただ有難う有難う

西宮市　刈田泰司

年輪の渦にいのちの音がする
雨後の虹　深呼吸などしませんか
大吟醸わかったような顔で飲み

堺市　吉本菁風

脇役でいたからずっと続けられ
和菓子屋があちこちにある城下町
絶対数奪い合ってる幼稚園

鳥取市　宮本一夫

朝市へ早起きをして犬と出る
うちの嫁あっさりしすぎ憎めない
消えた猫ひょっこり帰り大あくび

鳥取市　坂田和歌子

似たような薬のんでる五十代
仏さま貴方が植えた菊ですよ
松ボックリがコロコロ里へ転がった

寝屋川市　籠島恵子

雨音へ明日の予定を組みかえる
息子の嘘　大目にみてる小銭入れ
元旦の計が欲ばりすぎている

八尾市　鷲見章

幻か夢か真か亡母の声
目閉ずれば愛する女を目裏に
栗の実の落ちし音あり誰も居ず

新潟県　高野不二

町起し役場吏員が着る法被
付添いの眠れぬ夜と眠い夜
賞を見て名を見て花見る菊花展

羽曳野市　西村りつえ

落柿舎のひなびた柿は人を恋う
春からの写経十巻納め　冬
もう許そ顔だけでなく心から

寝屋川市　井上すみれ

地が裂けた長くて悲しい年は往く
父の齢　母の齢　越え初春の詩
新年の顔して今年も膳につく

寝屋川市　太田藍子

大阪の街が止まったAPEC
お参りもせずにスタンプラリー急く
新幹線しゃべり疲れた四人掛け

宝塚市　黒台伊佐武

鈴虫の音色に妻を忘れおり
流れ星　余生に想いめぐらせる
幕切れの形作りが難しい

和歌山県　中後清史

野良犬の知恵　誰にでも尻尾振る
重箱の隅をつついて疎まれる
二度とない今を精いっぱい生きる

島根県　森茂美

転んでも自分で起きる子の育ち
秋夜長　夫の傷にそっと触れ
透きとおる新米両の掌にこぼれ

大阪市　中井正秀

異議なしと遊ぶ話はすぐ決まる
医者知らず薬のように酒を呑む
子犬飼い隣近所に気兼ねする

吹田市　西岡豊

旅の宿　孫嬉しさに駆け回る
持ち唄を唄いはたした午前様
たこ梅でコンパニオンと月見酒

和泉市　横山捷也

名も知らぬ花を手にして老夫婦
ぐちまでが母に似て来た妻の歳
猫のひたいほどに老母が種子をまく

和歌山県　杉山精子

洗われて流されました青い過去
媚うらぬ素人の瞳だ信じよう
許し合う友と豊かになる時間

岸和田市　亀井皎月

初日の出　正月顔で拝んでる
悪筆も価値あり墨の年賀状
ご丁寧二枚も届く年賀状

河内長野市　印藤智子

からおけに備え腹筋強くする
嫁ぐ娘にもどってもいいよと軽く言う
うそでいい美人と言って欲しいなあ

鳥取県　橋谷静江

人柄が概ねわかる電話口
時々は息子の電話へ支えられ
残り火を一気に燃やす意地を出す

島根県　児玉幸子

野菊咲きみつばちの群飛び交うて
秋本番ハチキレそうに柿の色
床の間に赤い実生けて客を待つ

高知県　桑名孝雄

平和ボケするよな年を期待する
元日の料理　昨日と変らない
この孫と小皿たたいていつ飲める

和歌山県　中村君枝

ねぎらいの一つも欲しい足の裏
妻の留守メモが実権握ってる
休息を神にもらったバイク事故

大阪市　岡本久峰

生き給え父母同胞も待つものを
なけなしの薬も底をはたきぎり
噫無情　戦友シベリアへ置き去りに

貝塚市　池田寿美子

毛糸編む自問自答に夜は更ける
ためらいを捨てて好意にあまえよう
迷い煩い何か捜して生きて行く

鳴門市　八木芳水

考え直す心の奥のわだかまり
回り道　思い出袋詰ってる
おだやかな笑顔で胸に鬼を飼う

兵庫県　玉田三重

文明の利器につまずく石頭
朝霧に夢の続きを溶かし込む
相槌を打つたび罪の数ふえる

鳥取県　高尾京

十年を生きて告知に感謝する
枯れていた山椒が新芽を出しました
物忘れ度忘れ明日を案じつつ

旭川市　朝倉大柏

平坦に慣れて小石にまで転び
花道を過ぎると影もうすくなり
明日来る道に蕾を摘み残す

岡山県　土居ひでの

主義主張　羅漢の里にある案山子
力瘤入れると笑う昼の月
心乾いて自分捜しの旅に出る

兵庫県　北川とみ子

窓ぎわの椅子に吹矢がおいてある
順番に朝を出て行く同居の輪
諍いの後の笑顔にだまされる

日立市　加藤権悟

話題から消えた悲しい影法師
昭和史を綴るとペンは弾まない
ハーモニカ父少年の貌で吹く

和歌山県　藤井春子

サノサ節　宴に箸もかり出され
極楽へ続くだろうか長い道
長電話　母娘の絆温め合う

香川県　高橋たみ

やっぱり負けとうはない走りだす
半日も金魚と一緒のおばあさん
食べながらうどんの長さ計っている

大阪市　中橋恵美子

肺癌が恐いがたばこも止められん
敵味方　静かに眠る高野山
どちらまでちょっとそこまで擦れ違う

松江市　小西素子

幸せは五体満足今日を生き
いじめにも人の弱さを思い知る
愛一つ貰ってうれし萩の露

和歌山市　津村武春

みじめだな一人のうどんすする音
修羅の道生きる女の眉けわし
惚れ抜いておんな無心に眼鏡拭く

島根県　松本聖子

ふり向けばわが足跡の線乱れ
苛立ちを母の優しい手がおさえ
一日が早いとこぼす病みあがり

鳥取市　近藤秋星

秋風や女の老けるのは早く
ゴキブリの動きが鈍くなって秋
文化の日待ってたように菊が咲き

八尾市　神原まさと

風邪引くな医師簡単に言うけれど
亡母思うキャンプで焦げの握り飯
退職金ないのに家のビラばかり

静岡市　小木久子

花育て愛を注いで老いの日々
差し向いひどく疲れる相手です
レッテルを張られ自意識過剰気味

大阪市　池田一男

月天心　貧しい心の独り言
年変わる変わらぬものは私だけ
世捨て人のつもりが何故か気ぜわしい

尼崎市　軸丸勝巳

万歩計半ばで秋の日が落ちる
のど飴一つ話が弾むバスツアー
残留孤児どの顔も皆日本人

唐津市　福島紀一

鬼瓦角一本が欠けたまま
よく見える所に八百屋の松茸が
水墨展つぶやいているのは空白

河内長野市　橋本弘美

病気してきれいになったと言われても
三十九やっと貰い手ありました
腰痛の兆し木枯し第一号

鳥取市　徳田ひろ子

ふる里が心広げて待ってくれ
いばら道越えてフィニッシュ乱さない
コハクチョウ一足早い冬を舞う

尼崎市　尾宮弘治

秋晴れのベンチで老いの嫁自慢
エプロンに嫁の若さを包みこむ
五度十度同じこと言う母を看る

鳥取県　権代康女

クレヨンを持てば広がる子の世界
にがい水飲んで足場を固めてる
ナシ送り北海道のさけがつく

島根県　谷岡ふみ

あついお茶気づかいながら家族の和
指きりげんまん孫に約束させられる
晩酌は二本ときめて父元気

松江市　浦辺静江

貫禄が付いて笑顔を絶やさない
ワープロに退職の指鍛えられ
青空へ弾み出したは洗濯機

横浜市　後藤早智

故郷の夢で聴える森の風
秋風に誘われ町の赤トンボ
寺参り頼む時だけ手を合わせ

熊本県　高野宵草

感激にもろい涙をもてあます
絵の中の道は歩いてみたい場所
入院の窓から覗く自由主義

（前月分）西宮市　刈田泰司

留守番の犬の鎖が太過ぎる
休刊日　一日眼鏡持て余す
列島よ少し怠けてみませんか

高槻市　傍島克治

愛想よくすればお尻が長くなる
母さんはイエローカードを出し過ぎる
姑の来る日は猫も姿消す

和歌山市　木村初子

笑いじわいっぱいつけて春を待つ
底辺に築いた城が暖かい
大正の彩に染まった衣脱ぐ

福岡県　本田忠男

嫁の名を忘れるほどに年をとり
大所帯　無口な母が芯に居る
秋桜かたい話は後にする

岡山市　山磨行子

自然の愛いっぱいもらうこぼれ種
何もかも忘れ大山の秋に酔う
心まで燃えつきそうななかまど

十和田市　阿部喜久江

生真面目に過ぎる主人で物足りぬ
嫁さんの気配り嬉し古希の母
冗談の中に本音をちらつかせ

八尾市　大内朝子

オーイ雲　今年も夢は捨てへんで
淋しさへ笑い袋を買いましょう
恋の詩うたってひとり生きる策

米子市　小塩智加恵

大安を選んで新車車庫に着く
柿たわわ隣の枝にふれてみる
帰省子が肩書きついた名刺出す

河内長野市　木太久正一

列島は温い話に飢えている
葉書手に鼠の図案考える
相席の婦人と話はずんでる

兵庫県　大谷幸次郎

残照へまだ御破算を繰り返す
御破算でボタン一から掛け直す
出る杭になって打たれて慕われる

岡山県　福原辰江

二十一世紀　真っ赤に燃えるものがある
昔話いっぱい燃えている囲炉裏
森へ来てゆっくり仮面脱いでいる

鳥取市　山口しげる

終章へいく度石を積み替えし
彩壁画　石が古代を語り出す
芸術を計り売りする号価格

兵庫県　安達厚

他人には言えない喜びかみしめる
打たれても直球だけを投げて生き
ネクタイをしめると勤めの顔になり

高槻市　乙倉武史

人生は充電　蓑虫見習おう
口だけは達者で身体ついて来ぬ
百歳が天罰ですと笑わせる

鳥取県　山内芳江

公約を見事果したいい度胸
散り際が見事まだまだ惜しい花
老いてなお情け無用と意地を張る

岡山県　福原悦子

山頂に立てば孤独の風が吹く
建前の中で息吹いている本音
割り切って昨日の野次も糧にする

香川県　山崎はつ恵

場違いな席で喜劇を演じてる
平社員右へ習えで恙なし
夕陽との逢瀬で燃えるナナカマド

環境を守る後悔せぬように
約束を守って四季の花が咲く
豆を煮る秋の夜長を豆を煮る

兵庫県　円増純子

湯豆腐をやくみを替えて今日も出す
石を蹴りけじめをつける曲り角
定年後あいさつばかり隣組

八尾市　平川幸枝

一斉に雑草芽吹き庭きれい
お手伝い愚痴聞き流すことにして
逆らえば親の嘆きが胸を突く

熊本県　岩切康子

柿をむく母古里を語りつつ
真心が溝の深さを埋め始め
嫁が来ておせち料理が入れ替り

羽曳野市　安芸田泰子

最後まで甘えてくれぬ母でした
ままならぬ初体験の松葉杖
色づいた蜜柑健康取り戻す

大阪市　勢理客トミ子

横着が炬燵の中に盛ってある
塩いわしが　いっち旨いと思う幸
晩秋の雨は雪よりなお寒い

倉吉市　田中八太朗

腹八分判っているがものたらず
究極は己を信じ決める岐路
子育てを終えて馬車道振り返る

静岡市　大村正雄

松葉蟹　皿一枚を一人締め
落ち葉のよう踏みにじられるいじめっ子
戦傷の死に損ないで五十年

鳥取市　山本崇

妻にまだ女が残るいわし雲
迂闊だな自分の影に蹴つまずく
テレビからおんな忘れちゃいませんか

羽曳野市　芦田絢子

健康こそ宝と思う万歩計
大和川ここにもあった散歩道
朝霧で墨絵のような生駒山

松山市　丹下美津子

無器用に生きて背後にある誇り
難聴のゲストで会釈美しい
落ち目にも母は気丈のタクト振る

尼崎市　河津正治

シルバーの会員手帳と旅に出る
あたたかい十月蝶が二羽で翔ぶ
晒された白でないから好きやねん

兵庫県　倉垣恵美

東京都　瀬戸きん子

プランターの家庭菜園野分け吹く
柿もみじ実生ながらも背のびして
鳥が来て猫も児も来る小さい庭

今治市　越智青園

発信人なしの賀状がクイズめく
窓ガラス拭けば秋空高く澄み
最高の品を粗品という歳暮

横浜市　清水潮華

カキ鍋のカキはあらかた夫が食べ
ガソリンに北海道の芋おまけ
ご主人が入院　庭が荒れている

尼崎市　的場十四郎

喜びを酌ぎこぼしてる秋叙勲
犬の仔を貰い散歩の母達者
いざと言う切札だけは腹にもつ

静岡市　増田扶美

見て見ないふりする姑の思りやり
漁継ぐと言う子に父の酒が増え
挨拶もぐちとなってる日向ぼこ

米子市　木村春枝

孫八人嫁からくれた宝もの
一日を借りを重ねて夕暮れる
数々の苦労話も風化する

箕面市　木村天弘

秋田美人こけしの顔で会いに来る
美人とは言えぬ女将の店に列
美人にも勝る優しい人間味

米子市　猪森スミヱ

軒三寸借りて子育てするツバメ
借り一つ負って男の背が伸びぬ
故郷の風にとけ込む国訛り

沖縄県　杉谷一栄

願いごと考えながら初詣
久々に帰る家あり花の庭
重いネと抱かしてもろた初曽孫

尾張旭市　三浦きぬ

苛めたり苛められたり孫育ち
可能性念って抱けば孫温し
自慢話聞く身になって欲しいもの

宝塚市　飯西ミサヲ

実行もせんでまた買う健康誌
土の道歩きたいよと万歩計
ピカピカじゃないけど私一年生

熊本市　北川一進

福があるだろうと買った宝くじ
口上手また真ん中に押し出され
口開くまでは温和な人だった

俗世にまだ未練ある屠蘇の酔い
誘われて集うて仲間と言う絆
真実を語れば傷つく人が出来

羽曳野市　麻野幽玄

隅におく匂袋に亡母は居る
泣き虫に菊の強さが欲しくなる
ふらふらと衝動買いが似た母娘

藤井寺市　鴨谷瑠美子

目配せが口より先にダメと言う
隠してた地金顔出す倦怠期
束縛をすれば反抗顔を出す

香川県　辻上よしみ

呆け封じ頭なでなで文珠院
コーヒーもインスタントが肌に合う
大木がまだ旧家の威厳なびかせる

大阪市　鈴木トヨ子

夢一つあすは太陽からもらう
運のつき福の神さま行ったきり
人気絶頂ころばぬ杖が見当らぬ

倉吉市　山本玲子

柏手を余分に打った手が照れる
人の道を若い和尚に諭される
七転びしたので怖いものがない

鳥取市　岸本宏章

菊人形にどうも見られているらしい
噴水に小さき虹や秋の暮れ
一塊の土器　灼熱ののちの彩

米子市　林風子

落ち葉舞う残り少ないカレンダー
産湯から早や背伸びして欠伸して
勝って飲み負けても飲んで慰労会

兵庫県　高見末野

やりくりの中から義理を果し終え
口止めをされて精いっぱいの嘘
方言の情けも貰う朝の市

和歌山市　吉村さち子

無理しても歩を伸ばしたい青い空
一年の計　健康に絞り込み
オーイお茶　亭主威張ってみたいけど

和歌山県　吉田武治

あっぱっぱ這い這いの子に起こされる
酒の量つべこべと言うから荒れる
大見得の菊人形も脱水症

松江市　安食友子

健康児どろんこ靴が語りかけ
奥入瀬の色に染まりて旅をする
一瞬の変貌を見る冬の山

松江市　鵜飼陽子

鳥取市　津村静枝

休肝日ねむりに飽きた大欠伸
幽谷の飛沫を泳びて藍染まる（三滝谷にて）
美辞麗句うっかり酔うて掬われる

高知県　百田幸

居ては邪魔　居なくて不便妻の留守
何事も善意にとれば晴れてくる
言い足らぬ言葉忘れたことにする

愛媛県　中居善信

百舌の鳴く頃に古傷うずきだす
腹の立つこと多かりき冬の風
露ほどの邪心もないに疑われ

唐津市　山門幸夫

独立へ梯子を外す老父の愛
植え替えの叶わぬ鉢へ注ぐ愛
孤児帰る弟折紙折って見せ

大阪市　川久保睦子

鏡の前　女房本当に化け上手
祈る子の至誠で神も願い聞く
一生涯連れ添いますと誓たはず

唐津市　山口ふさ子

四季の花私の期待裏切らず
いい噂しているのかな痒い耳
喪が明けて妻の顔にも紅がさし

兵庫県　西山八重子

缶ビール飲んで独りの夜が更ける
貸し借りのない幸せに遠花火
気がつけば踊る阿呆と手を組んで

神戸市　船津とみ子

解体のデパート足場高くなる
晴天が眩しい駅前広場だな
家並に新旧があり冬に入る

尼崎市　中澤向西

責任感強くていつも暇がない
鈴なりの柿にふる里母一人
なにくそと思う無口を抱いている

唐津市　市丸晴子

日に三度きっちり食べる姑と居る
貝殻の歌が聞こえぬ冬の海
被災地の更地を覆うあわだち草

唐津市　松本圭

はじめからパンとごはんで空回り
スナックのママの小さなくせを知り
もの言わぬ妻といっしょに見るテレビ

徳島県　安宅美代子

幸せは妻と余生の茶がうまい
どうしても見たいテレビを子に取られ
狂わない時計を妻にもたされる

部屋におく月下美人と共に寝る　和歌山市　上岡正直

夫婦別姓あしたにも別れます　橿原市　西本保夫

聞き役に回ると気の合う未亡人

苦労した過去聞かされる好きになる　大阪市　今西静子

住みなれた団地にぬくい風がある

十二月　嫁の情けにいたわられ　和歌山市　古久保和子

鉢巻きを締めると老父の目が活きる

交差点落ち葉も迷いあるらしい　鳥取市　福永ひかり

札束を味方に老いが強くいる

庇うほど小さくなっていく自立　寝屋川市　坂上高栄

点数を稼ぐ相槌たんと打つ

手話一つおぼえ社会が広くなり　和歌山市　太田木管

閑古鳥ネオンの下で鳴いている

ベンツより単車が速い田舎道　弘前市　櫻庭順三

伸び悩みダウンの夢にうなされる

行き悩み山に開基の師を恨み　海南市　谷口義男

相槌を打つから味方と信じ込む

手抜きなどしない専業主婦の妻　千葉県　大川晩翠

オフレコの箍が緩むと外に洩れ

新聞の家族の安否隅の欄　出雲市　浜圭三

蟷螂が若い二人に身構える

自転車を降りて野菊を摘んでいる　出雲市　加藤スズコ

紅葉と間違う山の枯れた松

落ち葉ふみ歴史をたどる院の庄　寝屋川市　太田とし子

Uターンの太郎がひたすら打つ太鼓

ワープロに個性さぐってみたくなる　松江市　松本知恵子

秋夜なが亡父のおもしろ事典読む

蜂も来て庭の菊の香満ちてくる　八尾市　生嶋ますみ

何ひとつ飾らぬ母の働く手

老いてなお灯火ほどの愛を抱く　倉吉市　山中康子

善人が真っ赤になって悔しがり

時どきは痛い躾と突きはなす

雲上の日本庭園鳳凰山
橋の上ロケ人だかり和歌山城
交野市　山川日出子

旅をする噂次々付く尾鰭
人嫌い根は人恋しそった髭
東大阪市　松山隆

薬のむ窓のむこうを赤トンボ
秋の夜はふとらない本読んでます
鳥取市　藤ふうこ

つつかれてまた勇み足だと気付く
肩先が触れたら喧嘩する若さ
長岡京市　山田葉子

朝来れば通行人の役が待ち
佗しき日社交辞令に温まる
鳥取市　石上悦子

告げ口が一人歩きをしてこまる
半額のチラシ片手に買い歩く
鳥取県　藤山弘子

福を呼ぶ花を信じて水をやる
辛い日の昔は胸にたたんで置く
鳥取市　谷口百合子

不退転もう北風も動じない
真に受けた悔し涙を愛おしみ
砂川市　武田正美

福寿草　夫婦の絆ほころばす
亡母さんに今なら甘えられるのに
堺市　神原文

宝船瑞穂の国の床飾る
ら抜き言葉上手な孫を叱れない
高槻市　芦田静江

露草の紫淡の色に亡母想う
垣根越し隣の柿も赤く熟れ
出雲市　川島和歌子

あり余る金ふところに養老院
何となく亡き母思い雨が降る
和歌山市　和田美寿子

華やかな記者会見で離婚劇
ジェット機が電波を乱し去って行く
鹿児島県　大山舞烏影

良い距離を持とう姑へのはがき書く
お返事を下さい切手送ります
柏市　上鈴木春枝

同窓会男盛りの餓鬼大将
すべり止めつけて階段けつまずき
東大阪市　谷口義

さわやかな返事で今日も暮あがる
開け放す窓にさわやか老い二人
兵庫県　中野とよ子

池田市　藤井計光

ＡＰＥＣなにわの街を締めつける
嫋やかな孫の寝顔に添寝する

阪南市　正橋　正

器用さが邪魔してるとは気付かない
食堂にお袋の味見当らぬ

八尾市　與田　明

句作りは夢と笑いとボケ防止
石段を見上げ柏手ここで打ち

羽曳野市　徳山みつこ

垢ぬけはせぬが安心できる顔
半世紀の歩み刻んだ孤児の顔

豊中市　岸田知香子

二十年二人三脚店守る
吹きだまり落ち葉寄りそい秋佗し

和歌山県　久保ふみえ

気が付けばトンボを見ない秋の空
無人販売　良心的にお金入れ

米子市　服部朗子

体重が減って苦労をふりかえる
アートフラワー自分の彩の紅葉挿す

泉佐野市　大工静子

半身の不随　停年三ヶ月目
母の目はバス停の養護学生に

大阪市　平井露芳

老眼鏡　見えないゴミも見えて掃き
スーパーで出直す市場の店じまい

鳥取市　田中友子

週末は古里へ来て田を守る
力にはならぬ野次馬ばかりいる

鳥取市　岸本孝子

九年先生きると決めて柚子を植え
見栄を張り知った売り子の蟹を買う

米子市　永井三津子

泣き顔は誰にも見せぬ寡婦の意地
日暮れ道やはり我が家へ足が向く

枚方市　森本節子

やんわりとした物言いで急所つく
あつあつのおでん恋しく秋深み

池田市　木村一笛

さわやかな夜長に虫の狂想曲
足腰を庇いて妻と遍路道

米子市　池尾保子

避難場所へ取り残された昼の月
星の数ほど友の助けをいただいた

鳥取市　田賀八千代

酔いさめて昨日の鬼が頭下げ
燃え尽きたように枯葉が地で眠る

記念樹を植える小さな鉢を買う　松江市　松浦　登志子

彼からの電話とわかる身の軽さ　高槻市　執行　稲子

火加減は母究極の豆の味
力瘤　女だてらと言われても　相生市　中塚　礎石

冗談もすらすら言える退院日
迷わずにただ真直ぐの球を待つ　茨木市　久保田　恵美子

忍び寄る老いじんわりと膝にくる
歩き過ぎ夜通し膝が訴える　静岡市　三浦　つね

柿熟れて今年も来たよと百舌の声
俄雨一寸まぶしい人と居る　静岡市　松下　正枝

畑仕事　鍬をねぎらい納屋に入れ
幼児にまばたきもせず見つめられ　唐津市　山門　タミ

急な冷え　ずぼらな主婦を慌てさせ
線香の煙　菩薩と向い合う　富田林市　中井　アキ

知らん振りするのも夫婦九十九折
振り向けば水子供養の曼珠沙華　寝屋川市　後藤　黎之助

お隣のお墓に挨拶　老夫婦
度忘れはひどいが三度ちゃんとたべ　姫路市　服部　一典

お土産で買う方が安い柿ちぎり
ひとりできしっかり嫁は根をおろす　唐津市　岩崎　實

浮かれてる心の空の澄みわたる
わが庭の小さき秋のもみじ散る　尼崎市　吉永　伊三郎

牛鍋の湯気の向こうに誘われる
もてているつもり呆けてるひまがない　和歌山県　村中　悦男

爪そめた女の口はよく動く
試されていると知るからうそを言う　尼崎市　岩倉　キク子

神様の御返事はまだ願い事
あぶないが渡りに舟と乗ってみる　河内長野市　水谷　笙子

第九聴く今年も生きていた証
終点が嫌で一日環状線　羽曳野市　川田　晋

何となく不自由　妻が三日留守
晩酌を欠かさぬための万歩計

人が減りふる里の過疎母が居る　島根県　安部恵美子

紅葉の大山に来て冬に会う　尼崎市　田辺鹿太

反論のない妻だから恐ろしい

例えばの話が酒を長くする　岡山市　清水金太郎

人情が昔ながらの町に住む

退却を転進と言い生きのびた　東大阪市　今岡貞人

とりどりのプライド競う菊花展

ストレスを捨てるゴミの日見付からず　岡山県　富坂志重

曽孫の甘えにゆるむ深いしわ

同居してふと波が立つ湯呑の茶　倉吉市　山口ゆうた

試歩たのし野菊摘もうかつむまいか

葡萄狩り食べ放題と言われても　尼崎市　松下比ろ志

躍る字も堅い字もある古日記

ほどほどに重石のきいた母の声　島根県　岩田三和

木の実たわわ仙人ふとるもみじ山

こならの葉に卵を生んで秋おわる

やさしさと背中合せのお節介　富田林市　大橋鐘造

入り口で迷えば風が呼びに来る

神様は私を遊ばせてくれぬ　和歌山市　森口美羽

叩かれて叩かれ生きるコツを知り

病院の検査は何時も孤独なり　伊丹市　樫谷郁子

赤とんぼ一つが土手を秋にする

老妻もやはり女か長電話　尼崎市　立谷勇次郎

コマーシャル　トイレ行くには短すぎ

浮気虫　旅が私に誘いかけ　島根県　槻谷仲子

喋らない約束友から皆ばれる

正直に生きて情けの石を積む　岡山市　藤原一平

矢が尽きたとたんに的がよく見える

白樺の木肌やさしく俺を見る　鳥取市　冨山雄幸

星占い愛の裏切り教えられ

若い日の手紙の束が黄ばんでる　東京都　松本冬虻

入るには窮屈だナと墓洗う

—水煙抄

# 秀句鑑賞

—12月号から

亀岡哲子

**脇役でトライアングルだけ叩く**

三浦千津子

一番後ろの列の隅っこでずっと立ち続け、トライアングルを二、三回叩いただけで幕は下りました。でも心を込めて叩いた緊張感と美しい音色は、いつまでも心の中で響き続けることでしょう。

**記念樹はわたしの胸で育てゆく**

木村春枝

大切に育てているわたしだけの記念樹。花も咲かず、実も成らないかも知れない。けれど、生き生きと輝いて、優しく薫ることでしょう。

**百歳の伯母ジェット機に乗ってくる**

神原文

長寿日本万歳。お元気な百歳の人が増えました。ジェット機に乗って世界を飛び回れるよう、明るく元気な百歳を目指しましょう。

**わたし今　恋していますオーイ雲**

長浜澄子

素的な方に逢いました。胸が弾んでウキウキします。オーイ雲、私元気に生きてます。

**ロボットもいつか叙勲を望むかも**

奥谷彩子

ロボットだっていつまでも黙っているとは限りません。心得違いの恐ろしいロボットがはびこるかもわかりません。良いロボットを育てるためにも、そろそろ議会に提案しましょうか。

**いやなこと言うまい胸の絵がにごる**

安宅美代子

胸の絵がにごる。本当にそうですね。胸の絵はいつも美しい彩で画きたいものです。

**妻愛し我に優しき妻なれば**

鷲見章

古希を過ぎて、奥様に対してこんなに素直な句を作られる作者。そして奥様。お二人とも、きっととても優しい方なのでしょう。この句を目標に反省することしきりです。

**せめてなら一騒ぎする恋がいい**

鴨谷瑠美子

人生一度。せめてなら、せめてなら私もこんな恋がしてみたかった。引っ込み思案で憶病で、考え過ぎで、忍んで忍んで、ああ。

**遠い日の恋さりげなく賀状かく**

志田千代

そうなんですね。先方からも社用の葉書にひと言添えてあったりして…。

**背の高い父だが高所恐怖症**

田辺鹿太

本当は高い所が大好きな父。でも背負ったものが重すぎて、どうしても足がすくんでしまうのです。翔ぶことも出来ません。善良な背高ノッポのお父さんの姿が浮かびます。

**跳び足らぬ分　空想を追うおんな**

福原辰江

かと言って、おんなだってままならぬことばかり。空想の中では宇宙までも跳んで、いろいろな夢を見ているのです。

**正直に言えばけげんな顔をされ**

佐藤次枝

正直に言えと言うから言ったのに。私ほんとにほんとの事を言っているのです。

**よく冷えたトマトで足りる朝のうつ**

西山八重子

さあ、今日も元気で頑張って、ファイト！

**明日の絵もあさっての絵も虹色に**

芦田絢子

虹は未来からの掛橋です。ずっとずっと、虹色の絵を画き続けましょう。

# 渺湖抄

## 小出智子選

少し波立つダム湖の底は秋祭り　和歌山市　古久保和子
午前二時今は老いたる鬼の時間　宝塚市　永田　暁風
問いつめて夜の硝子を曇らせる　和歌山市　木本　朱夏
夢を食べている夢を追っている　米子市　林　荒介
お祈りをじっと聞いてる冬の蠅　旭川市　朝倉　大柏
バラ一輪ひとりの夕食を見てる　京都市　都倉　求芽
文化の日妻虫干しに余念なし　松原市　小池しげお
なあ杉よ雪に埋れてつめたかろ　岡山県　小林　妻子
まだ亡母のふところにいる三回忌　高槻市　守先　伸子
ポケットの中で誤解が太りだす　砂川市　大橋　政良
幸せの一つ手前にいる気楽　米子市　青戸　田鶴
いま俺が死んでも風は当らない　和歌山県　中後　清史
当てにするではないが娘がふたり　尼崎市　春城　年代
未決箱いっぱいにして余生とや　八尾市　宮崎シマ子
峠から案が行ったり来たりする　鳥取県　鈴木　公弘
断っておくが私も男です　海南市　三宅　保州
さて秋よ　まだ魂は渡せない　尼崎市　長浜　澄子
作り笑いで紆余曲折を切りぬける　羽曳野市　吉川　寿美
歩いても歩いても天国に着かぬ　寝屋川市　岸野あやめ
よい時候いまから心入れ替える　吹田市　栗谷　春子

バインダーノートにはさみ込む尻尾　大阪市　西出　楓楽
奪い取るからには皿も食う覚悟　和歌山市　榎原　公子
ひと駅を歩く話が尽きぬから　鳥取市　小谷美ッ千
シャガールの夢を飾って老いぬ父　寝屋川市　堀江　光子
黙禱で始まる老いのクラス会　札幌市　三浦　強一
階段の上は息子の城である　吹田市　山本希久子
ふくろうが啼くのは山が寂しいから　和歌山市　野々　圭子
秋深む佐久間良子が和服着る　青森市　工藤　甲吉
地下街の花屋で売っている芒　豊中市　田中　正坊
冬の道のら猫にさえ無視されて　鳥取県　新家　完司
袋帯かすかに亡母の香が残る　西宮市　奥田みつ子
あご紐を結び直した防災日　寝屋川市　坂上　高栄
金木犀にあすを重ねているいのち　貝塚市　池田寿美子
この色はなんの夢見る石蕗の花　尼崎市　田中　薫
ネクタイを外すと風が笑いだし　羽曳野市　酒井　一壺
ふたつ折りにされるとメモが秘密めき　堺　市　宮本かりん
倒した樹のそばから風がまきあがる　鳥取県　江原とみお
火も水もくぐって他人の輪の中に　八尾市　宮西　弥生
ときめいて話の裏を聞いている　鳥取県　高橋　夕花
鉛筆を削って秋の夜が長い　尼崎市　上田　俊路
下駄箱にたった一足男下駄　今治市　春城武庫坊
集まって淋しがりやのこけし棚　西宮市　野村　清美
ひっそりと出番を待っている小紋　米子市　西口いわる
摑もうとすると飛び立つ青い鳥　今治市　林　瑞枝
口紅を変える小さな妻の乱　加古川市　渡辺　南奉
馴染んでみれば播磨の風も性に合い　吐田　公一

躓いてから外堀のありがたさ　寝屋川市　籠島　恵子
ただ歩くだけでよかった好きなひと　大阪市　中村　淳子
満天の星の一つに遠い人　和歌山市　森口　美羽
イミテーションの指輪がきしみだしてきた　米子市　林　風子
梅干は紀州と病んでからの舌　横浜市　清水　潮華
力んでも国民年金だけの妻　寝屋川市　平松かすみ
尺八もお琴もないが庭の月　兵庫県　遠山　可住
ひる酒も飲めて幸せ中ぐらい　広島市　田村　新造
十二月赤信号が長すぎる　唐津市　久保　正剣
暇つぶしの紙ひこうきに乗ってくれ　堺　市　山本　半銭
合縁機縁僕には過ぎた妻がいる　奈良市　米田　恭昌
正直な鏡だわたくしに叛く　堺　市　神原　文
仔犬きてこころ寒さをいたわられ　鳥取県　西原　艶子
遊び疲れた帽子と共に子が帰る　米子市　政岡日枝子
試供品ぐらいで分からない効きめ　富田林市　片岡智恵子
忙しい友を案じている夜寒　寝屋川市　森　茜
男らしさ女らしさで結ぶ糸　唐津市　田口　虹汀
他意のない話で女しめくくる　倉敷市　小野　克枝
寝返りで打ち消している悔いの数　今治市　村上久美子
ようやくに腹が座った五十代　和歌山市　堀畑　靖子
打ち直し綿のぬくみは亡母だろう　堺　市　桜沢あか里
転んでも笑ってくれる人もない　藤井寺市　田中　透太
座を蹴った日からふり向かないねずみ　八尾市　高杉　千歩
遠慮なく世の中を斬るボールペン　和歌山市　池永　正雄
私にも意地がありますお月様　黒石市　相馬　一花
大の字に眠り嬰児王者なり　和歌山市　岩本美智子

自動車に占領されている日本　岡山県　池田　半仙
限界に気付いていないペンの胼胝　摂津市　井上　源一
本心を抱きしめたまま恋終る　和歌山市　杉山　精子
移りゆく自然人の心はなおのこと　鳥根県　松本　文子
無茶をしたわりに長生きして見せる　倉吉市　奥谷　弘朗
十日の菊　齢のせいにはしたくない　大阪市　本間満津子
宝探しばかりしている物忘れ　和歌山市　松崎　幸子
蝶になる苦しみだから耐えられる　和歌山市　青枝　鉄治
西に居るはずが東の日付印　鳥取市　武田　帆雀
食管法替わり新米名をもらい　唐津市　岩崎　實
銭はあるか米はあるかと娘を案じ　鳥取県　土橋はるお
饒舌の中に無口が膝を抱く　阪南市　深日白光子
缶ジュース配って御輿小休止　吹田市　西岡　豊
黒豆が煮える亡母の香りして　大阪市　津守　柳伸
故郷に涙の顔は見せられぬ　倉吉市　最上　和枝
歳時記の春へと力貯える　鳥取県　土橋　螢
紅い糸そっと結んできたないしょ　八尾市　大内　朝子
老母の眼を見れば迷信とは言えず　唐津市　宗　弘
水槽のメダカは列が作れない　今治市　渡邊伊津志
西高東低雪のドラマが長くなる　弘前市　相馬　銀波
じっとしていられぬ夫のオペを待つ　米子市　永井三津子
明日は誕生日らしい良い返事　出雲市　尼　れいじ
幸せの基準を変えて秋日和　東京都　山口　新子
就職は未定お嫁にでも行くか　枚方市　濱田　良知
もみじ風どんでん返しの日もあろう　米子市　白根　ふみ
明治の灯消える山茶花散るように　岡山県　矢内寿恵子

弁解をしないところが面白い　鳥取県　橋本多哥由
何もかも来世に任せて眠ります　京都市　松川　杜的
初詣　老いのときめきしかとあり　大阪府　籾山　隆
裏のない人で煙たい存在で　岸和田市　田中　文時
島へ行く指のダイヤが目立ち過ぎ　箕面市　椎江　清芳
姿見にVサインして家を出る　香川県　木村あきら
全員が賛成という味気なさ　犬山市　早川　盛夫
朝顔の種採り終えて秋深し　藤井寺市　高田美代子
長電話大事なことを言い忘れ　茨木市　堀　良江
三人の子が三様の彩で生き　今治市　中村　好恵
年下の訃報に冷える霜の朝　高槻市　江原　秀夫
赤信号渡る学校きょう休み　大阪市　渡部さと美
歳とらぬ子がいて弾むクラス会　和歌山市　福本　英子
母の声無明の森のおくでする　米子市　中井　ゆき
二十一世紀まで生きる権利が欲しくなる　米子市　小西　雄々
あの人に軽くハートを絞られる　鳥取県　土橋　睦子
早すぎる旅立ちへ散る草紅葉　堺　市　黒田　真砂
衣脱ぐもみじ重ね着するわたし　岡山市　川端　柳子
湯治場で背中流している他人　弘前市　中山　雅城
裏切りの肩にからまる蜘蛛の糸　尼崎市　田辺　鹿太
日に何度衣替えして妻が翔ぶ　和歌山市　田中　みね
鈴虫のように鳴きたい月の夜　富田林市　藤田　泰子
落城の秘話三日月が語り継ぐ　唐津市　市丸　晴子
一色が足らないままに夫婦絵図　和歌山市　山口三千子
中ぐらい私に合った欲でよし　大阪市　神夏磯典子
初恋の夢は美談のまま終る　鳥取市　植田　一京

玄関は知ってた鍵のしめ忘れ　大阪市　日阪　秋子
ご来光へ足を鍛えている時間　和歌山市　玉井　豊太
お隣は近くて遠い一戸建　阪南市　正橋　正
半世紀たっても拒否だ　カーキ色　鹿児島県　大山舞烏影
父さんの返事は背なに書いてある　倉敷市　田辺　灸六
肩書きは無くとも父という重み　岸和田市　三輪　通彦
はまり役まだ待っている四十代　鳥取市　石上　悦子
練習の時はすんなり出た答　香川県　川崎ひかり
生真面目な狸に逢えた過疎の里　八尾市　山下美津留
クラシック流してみんな忘れよう　大阪市　稲本　凡子
夢一つどんぐりだって抱いている　鳥取県　石谷美恵子
あの人の分まで長生きしなくては　岡山県　山本　玉恵
木霊する秋がだんだん遠くなる　河内長野市　植村　喜代
口紅が年より若くしてくれる　兵庫県　中野とよ子
一枚のはがきの中に夢がある　大阪市　北　勝美
生かされて此の世の花は裏切らず　岡山県　土居ひでの
画用紙に子供の夢が広がった　鳥取県　権代　康女

**和子**さんの句。ダム湖に佇んで、ありし日の村の人々の生活を思いめぐらし、湖の底は秋祭りではないかとの幻想がこの句を創らせた。「少し波立つ」は素晴らしい感性。**暁風**さんの句。老いというあまり聞きたくない言葉を遣われているのに、それが気にならず、却って物静かな鬼の存在を想像させる。氏の川柳に対する姿勢を垣間見た思いがする。**朱夏**さんの句。「夜の硝子を曇らせる」と凝縮された率直な思いが、読む者に伝わってくる。この句の場合、課題吟とは違う雑詠の個の思いを大切にしたい。**荒介**さんの句。夢だから食べ尽してしまうこともなく、夢だから掴めそうで掴めない。だから川柳を創り続けているのだと共鳴してしまう。

# きゃらぼく忘年句会に参加して

山本希久子

米子に近づくにつれて空は鈍色となり、大阪からきゃらぼく忘年句会へ向う薫風主幹はじめ私たちを乗せたバスは山陰路をひた走る。師走の三日朝、一行十四名は瑞枝さん、千代さんの笑顔に迎えられ、近代的な天満屋ホールへと案内される。締切り前の会場は熱気むんむん、ようやく席を確保する盛会ぶり、森中恵美子さん、柴田午朗さんと相席させていただく。

この句会へ出席することを楽しみに一年過ごすと言われる紫香さんほかの祝辞に始まって句会は進行、二百名近い出席者の中から厳しく選び抜かれた五十句が発表されると、会場からはなるほどという頷き、時には爆笑もあり、八題という兼題の多さにも拘らず、あっという間に時は過ぎ、天雀さんの閉会の言葉を聞く。

さてそれからがお楽しみのきゃらぼく会員の趣向をこらした芸の見せどころとなる。華やかな衣装で踊る女性陣に黒一点の荒介さんが混じり、横を見ながら少しずれて踊られるのもご愛嬌、次々とだしものは変り、最後は参加者の半数が舞台に上って大合唱となる。

翌朝は大型観光バスを満席にしての足立美術館、清水寺観光に行く。夜来の雨はバス走行中にピタリと止み、時折薄陽も射し、雨上りの美術館の庭は自然の山々を借景に人工庭園の美が調和して、紅くまた青く輝いていた。

武家屋敷前の一行

お世話になったきゃらぼくの方、ご一緒させていただいた皆様と二時ごろお別れした後は、この旅のもう一つの目的である故西尾栞名誉主幹のお気に入りであった海潮温泉へと足を伸ばす。海潮荘の玄関には予期せぬことに地元の堀江正朗さん、芳子さんがご不自由な身体をおしてお出迎え下さっていた。一行十四名がこちらへ回ることを昨日の句会に出席されていた明朗さんから聞かれたという。芳子さんは薫風主幹に抱きつかんばかりに、再会の喜びを表わしておられた。川柳の絆の強さ温かさをここでもひしひしと感じる。

自然の岩でできた露天風呂に浸っていると栞先生の温顔がその辺の岩の間からひょいとのぞいていらっしゃるような錯覚に捉われたのは私だけではなかったようである。

特選八句は次のとおり。

天地無用の男を借りることにする　森中恵美子
残月や今夜は瘤と語ろうか　西川けんじ
赦された数だけ人は朝を見る　堂本　明義
駅弁の蓋をしばらく読んでいる　森中恵美子
白い飯にいつも安心してしまう　長谷川博子
夕焼けを拭きながら書くありがとう　板井半升
ゴミの袋を男が提げる三島の忌　奥山　晴生
箸のある場所しっかりと見て座る　田村きみ子

女性コーナー

# 首香の世

## 八木千代選

**オフレコで落ちた首です　寒椿**　和歌山市　**榎原　公子**

**鏡の中に老女ぽつんとあからさま**　尼崎市　**春城　年代**

**とても真面目な顔で時間と逢っている**　米子市　**足立由美子**

**多分今日のわたしのままで老いてゆく**　青森県　**佐治千加子**

治めるもの治めてふぶくものがあり　和歌山市　田中　輝子

ふみしめた足から崩れ出す不安　米子市　青戸　田鶴

バスト揺らして笑う私のライバルだ　倉敷市　小野　克枝

数え唄　むかしは十で逃げられた　兵庫県　倉垣　恵美

洗面器わたしのほかはみな他人　羽曳野市　吉川　寿美

あのビルは企業戦士の墓標です　和歌山市　古久保和子

蒼い空ぬけて宇宙へ様子みに　米子市　鹿島　繭

牛蒡削ぐ亡母の生きざまにも似てる　西宮市　牧渕富喜子

真夜中の鏡の奥のカーニバル　和歌山市　木本　朱夏

実のならない山の淋しさ知っている　和歌山市　野々　圭子

無料というポスター軽く見てしまう　大阪市　日阪　秋子

白寿の老母を荷物と思う哀しい心　倉吉市　淡路ゆり子

繭ひとつ神話の里におちていた　米子市　寺沢みど里

私は私いつも鏡に言いきかす　西宮市　奥田みつ子

錆びた鋏で罪のひとつがまだ切れぬ　藤井寺市　高田美代子

星の道わたくしという小宇宙　米子市　政岡日枝子

槌音が聞こえる豆腐屋さんの家　神戸市　船津とみ子

辻褄の合う妙薬が効いてきた　米子市　林　瑞枝

割れば火を放つ小面抱いている　鳥取市　小谷美ッ千

いつだって心は自由　菊日和　和歌山市　堀畑　靖子

借景の中に置いてるわが姿　米子市　林　風子

不器用で骨を拾えぬ二人箸　和歌山市　福本　英子

ジョーカーが回ってきたか風邪のセキ　八尾市　高橋　夕花

流されるのが怖いので目をつむり　大阪市　本間満津子

遠くみる灯はみんな美しい　西宮市　西口いわゑ

先頭に疑う術もない羊　和歌山県　小倉　アサ

まっ白にならねば飢えていく童話　寝屋川市　森　茜

もう翔ばぬ人と指切りしてしまう　岡山県　山本　玉恵

童話の嘘　子らは納得してくれぬ　米子市　石垣　花子

ポケットの愛は出さずに見せるだけ　八尾市　村上ミツ子

残された短い時の無駄づかい　枚方市　森本　節子

旅立ちのマニュアル決めて走らねば　貝塚市　池田寿美子

本当はなぐって見たい拳引く　米子市　茂理　高代

百姓にもうかる方程式がない　鳥取県　さえきやえ

時間と距離遠いあなたへ変えていく　和歌山市　吉村さち子

幸福の木が迷わずに直立す　米子市　白根　ふみ

木枯し一番かもめと逢えるかも　和歌山市　福井　桂香

酔芙蓉　一日じっと見ておこう　米子市　金山　夕子

母の忌をたたみ私を取りもどす　鳥取県　土橋　睦子

軽すぎるふとんに冬が忍び寄る　富田林市　藤田　泰子

丸木橋　岸まだ先と信じたい　米子市　野坂　なみ
ちぎれ雲　昨日と違うこと想う　大阪市　鍛原　千里
歩んで来たきびしい坂はみな宝　米子市　木村　春枝
ひととおりあまえて次は泣きにゆく　吹田市　栗谷　春子
弓を背に一人芝居の幕あける　米子市　澤田　千春
空焼けて月下美人が狂いだし　堺　市　神原　文
橋に来て荷物を少しずつ捨てる　米子市　新　正子
包装紙　四角く折って折って思慕　東京都　山口　新子
留守電にジョギング中と入れておく　和歌山市　宮口　克子
たたかいを終えて少女の日にかえる　八尾市　宮西　弥生
逢いにゆく旅もあったな時刻表　米子市　中井　ゆき
鍼をさす骨のすき間をさぐられる　八尾市　高杉　千歩
地のひずみ心のひずみ恐ろしい　大阪市　藤田頂留子
乱世をせめてゆるめぬ躾糸　岡山県　矢内寿恵子
どう見ても芸術を生む指でない　鳥取県　石谷美恵子
いろんな目に出会うて縋る神仏　島根県　松本　文子
やじろべえいつまで意地を張るつもり　堺　市　桜沢あか里
雑魚群れて互いの命かばい合う　鳥取県　岩崎みさ江
流れ星　星の世界の異端者か　寝屋川市　坂上　高栄
カレンダー熱い記号のあるないしょ　八尾市　大内　朝子
しばらくは渦にゆだねることにする　茨木市　堀　良江
ああ言えばこう言う所詮貝になる　出雲市　園山多賀子
沈黙の石に怒りをぶっつける　大阪市　神夏磯典子
行間に火薬の匂してならぬ　今治市　野村　京子
きのうから下がらない熱　何の罰　鳥取市　石上　悦子

海藻で祈りにも似たマッサージ　堺　市　山本　半銭
飾るだけ飾って老いを助長する　唐津市　浜本　ちよ
胸底のネガを時々透かし見る　寝屋川市　太田とし子
他人叱る前にも自分叱らねば　岡山県　土居ひでの
なるほどと思う器に落ち着いた　倉吉市　野口　節子
バラが萎れて自信が揺らぐかすみ草　羽曳野市　芦田　絢子
花言葉さえしがらみに寒くなり　和泉市　中川　楓
泣きたくて被っています三度笠　鳥取県　田村きみ子
ナビゲーター妻で暴走したくなり　横浜市　清水　潮華
力水つけ合いながら凡夫婦　寝屋川市　平松かすみ
幸せのリズムを乱すすきま風　熊本市　永田　俊子
又もとのふたり明日の絵をさがす　和歌山市　山口三千子

**榎原公子**さんの句を読みますと先ほどのオフレコ失言を考えますが、私は純粋な椿の述懐と読みました。約束ごとを信じて何の言い訳もせず、その主張も抑えて、雪に落ちた花首の哀れをさらりとスナップ的に仕上げて佳品です。**春城年代**さんの鏡は真実そのものでしょう。歳月の速さ恐ろしさは、光を集めていた過去の輝きをすべて奪います。けれどその鏡があればこそ内からも磨けるものと思えるようになりました。「あからさま」「ぽつん」は凄い実写力です。**足立由美子**さんの時間はとても真摯な姿勢。貧富にも運不運にもかかわらず、天より賜わっている平等な時間の尊さに少しでも早く気付くことで人生の勝者になり得る資格を持てます。真面目に向かい合う顔には神もまた素顔をみせてくださいましょう。**佐治千加子**さんの多分は、みんなの願望でもあります。今日の私はあるべくしてここに在るのです。躓いたり回り道したのも、谷の深ささえエネルギーに変えて辿った道ですもの。多分は祈りの音色に響きます。

## 夢

### 平田実男選

雑魚なりに余生に夢のある日記　弘
夢がある今日も黙々球拾う　庸佑
虹も七彩 夢も七彩 娘の晴着　シマ子
どん底で夢はでっかい一行詩　京子
子に托し孫に托して夢を追い　勝巳
夢としてそっとおさめた淡い恋　愛論
新しい暦に夢をちりばめる　みつこ
初夢を十二ヵ月に見てしまい　しげお
夢追うていて窓際へ追いやられ　満秋
目の奥に見果てぬ夢を溜めている　(高)美代子
初夢の都合よいとこだけ信じ　(稲)洋
夢ばかり積んで傾く宝船　雄々
裏方のままで果てなき母の夢　玉恵
夢ばかり追って気付かぬ落し穴　よし津
夢一つ二人で追ってゆく絆　源一
酒うまし夢の話をつづけよう　蕗児
人生は夢物語かも知れぬ　白光子
手の届く位置に小さな夢を置く　旋風
夢少し枯らせて年の暮れがくる　ちかし
幸せが続くと恐い夢を見る　洋敏
あの日から地震の夢をよく見ます　ひで
再出発大きい夢を見ぬように　典子
若者に夢あり成田独り発つ　俊子
夢さめてからが男の正念場　南奉
夢を追う男後ろを振り向かず　武春
現実が夢に近づく逆指名　正雄
夢ばかり食べて大人になりきれぬ　寿恵子
老いの夢地獄極楽交互に見　やすお
アルバムに夢ある若い僕がいる　芳水
戦争に勝った夢からまだ覚めぬ　螢
初詣　一円玉のでかい夢　強一
別姓の夫婦で別な夢を追う　好恵
正月来るたび夢が小さくなる　大柏
この夢を話せば夢が歩き出す　正子
花追うて紅葉を追うて舞うて夢　哲子
夢売りが去り秋になる冬になる　希久子
悪夢から一年神戸もお正月　倫子
佳
晩節をきれいな夢に染めて織る　帆雀
夢多いわたし青春しています　よしみ
夢叶いやっと男の顔になる　喬水
覚めるなと願う癌から癒えた夢　風樹
夢ならば覚めよ地震で逝った友　年代
人
水平線でっかい夢が横たわる　清美
地
川渡り切ったか亡母は夢に出ず　たず子
天
国境の無い夢を見る世界地図　中後清史
軸
漫画家の夢を科学者なぞってる

## 日記

### 桑原道夫選

よかったことばかり書きたい旅日記　(海)洋
忘れたい事は書かない日記帳　さち子
心の丈つづる日記へ鍵をかけ　よしみ
書き終えた日記に安らぎ与えられ　忠雄
身に覚えないこともある古日記　保州
亡母の日記に甘えん坊の僕がいる　恭昌
あの人を殺して今日の日記閉ず　晴子
指切りの嘘が日記に書いてある　芳郎
新聞の特ダネ貼って日記帳　やすお
読まれても妻は日記でほめてある　旋風
絵日記開くと亡母の応援歌　ひでの
余白まで埋めた日記で若かった　芳水
公表をされても困らない日記　艶子
逆境の日記格言ばかりある　あずき
平凡だから長続きする日記　宵明
「バカヤロー」だけ書いてある日の日記　ただし
日記とは嘘を言わない約束だ　圭一郎
お隣と比べないでと子の日記　清芳
絵日記の真ん中にいるママと僕　和枝
育児日記ないが次男もよく育ち　みつこ
日曜はうつらうつらの日記帳　希久子
あやしげな日記だ銭の音がする　正子

レモンティー今日の日記のページ繰る　洛酔
絵日記に少しだけある恋ごころ　子龍
日記をつける　禁煙をした日から　度
自分だけいい子になっている日記　高夫
夫を看る間は書いていた日記　清美
うそ一つ混ぜて日記らしくなり　弘
何程のことない日記隠し置く　幸次郎
種蒔いて芽が出て花を待つ日記　照子
父の日記に子らが興味を持ち始め　白光子
日記には別れのシーンなど書かぬ　和歌子
わたくしの絵日記あそんでばかりです　朝子
手術の日快晴だった日記帳　一壺
いつかいつかと私について来た日記　可住
孫の絵日記わたしの顔に皺がある　典子
日記にはとてもすてきな人と書く　志重

佳

好きな色で塗りたい絵日記の最後　俊子
別れ話わたしの日記に似合わない　愛論
前後だけくわしく書いている日記　實
日記帳悪意ひとつが綴れない　忠男
長いけど私の日記まだ続く　紀一

人

絵日記に海も夕陽も盗まれる　和重
父の日記に私の恋が書いてある　シマ子

地

天

日記帳買う度はさむ一行詩　町田達子

軸

日記帳現よりうす汚れたり　典子

## 迎える

### 安藤寿美子選

いつまでも夫婦で初日迎えたい　圭一郎
新年を心白紙にして迎え　志重
新築に父母を迎える日を夢見　(編)洋
また一月十七日を迎え哭く　柳弘
迎え討つライバルに今日塩贈る　子龍
迎え火がただ一つだけ過疎に耐え　ひで
御来迎心無になるすがしさよ　しげお
大物を横一列に出迎える　よしみ
出迎える傘は一本あればよい　帆雀
天皇のお通り筋に花を植え　章久
出迎えの握手はしたが名を忘れ　勝美
朝迎え今日の命をたしかめる　伊津志
エプロンで手を拭きながら出迎える　洋敏
クーラーを入れて迎える新仏　寿恵子
わたくしを迎える仮設に菊活けて　正子
玄関へタマが迎えに来てくれる　富喜子
中国の孤児を迎えた赤とんぼ　とし子
出迎えの中には嫌な奴もいる　寿美
迎え撃つ敵へひそかにとぐ刃　蕗児
コスモスが迎えてくれた西ノ京　克治
負け犬の俺を黙って母迎え　年代
迎えの車が来たので紅を塗り足して　通彦
町中を挙げて迎える金メダル　宵草
迎え水とも知らないで飲んでいる　潮華
上京の母にハトバス予約する　雄々
人を愛して空の広さで迎えよう　次男
歓迎の握手の裏を見逃さぬ　保州
歓迎の看板名前まちがわれ　たもつ
傷心の子へ裏口いつも開けておく　可住
祭り笛迎えに行った肩車　あずま
一世の涙で陛下迎えられ　芳郎
迎え傘いつでも味方だと思う　宏章
分け隔てせぬから自動ドアが好き　清史
駅前がてんやわんやの優勝旗　杜的
一撞き十円お迎えの鐘をつく　日枝子
冬を迎えるまでに大根洗わねば　庸佑
強敵を迎える帯を締め直す

佳

出迎えの中に刺客が混じってる　武庫坊
ライバルを迎える切札持っている　俊子
ふる里の温い訛りに迎えられ　鉄治
お迎えに参上墓地をお買い下さい　重人
母一人迎えてくれた無人駅　高夫

人

出迎えの中に野良着の父がいる　清芳

地

母さんを迎えに駅へ姉弟　あやめ

天

迎え傘この子も腕をすり抜ける　渡辺南奉

軸

出迎えの準備に落し穴も掘る

# 初歩教室

題 ― 愛

吉岡美房

本欄の場合、毎回七十名から八十名の方の投句があり、これを限られた枠の中で全部取り上げようとすると添削だけに重点を置いたこのような形でまとめるのが精一杯です。どうか原句と添削句を比較して、どこを直そうとしているかを判断して頂けたら幸いです。

ただ、これで絶対の句ということはあり得ませんので、このような直し方もあるということと共に、もっといい直し方もあるというようなことも考えながら、勉強の参考にして頂きたいと思います。

**添削句**

言い出せば火の点く胸で向い合う　志重
（言い出せば火の点く愛が向い合う）

控え目に貴方の愛を待ってます　和歌子
（一筋にあなたの愛を信じ切る）

アクセント一言変り愛芽生え　よし子
（愛してる人の電話とわかる声）

愛芽生えプラトニックラブ片思い　隆
（愛情が恋に変って行くドラマ）

愛されて躓くなんて露しらず　美子
（躓いて愛の脆さを知らされる）

愛してるなどと軽がる言えないね　三九
（愛してるなどとゲームのような恋）

愛しさに憎たれ口が倍になり　夕ミ
（愛情が憎まれ口になる若さ）

恋しても愛を知らない子が多い　睦子
（恋だけで終って愛を見失う）

煮つめれば愛の科白がほしいとき　八重子
（あやふやな愛の科白を煮つめたい）

街の灯り私の愛まで消さないで　トヨ子
（街の灯よ私の愛を消さないで）

火をつけて消さずに遠くへ去った人　幸夫
（愛の灯を小さな胸に点けた人）

摘めば又想いがつのる愛なのか　ふゆ子
（愛摘まれいよいよつのるこの想い）

風一つ吹けば飛ぶよな愛もある　多哥由
（風吹けば散るよな愛にすがりつき）

愛実り挙式夢見る幼な妻　一夫
（しばらくは挙式延ばして愛実る）

浮気したふりして妻の愛さがす　蕉子
（浮気でもしたらと愛を量ってる）

喧嘩してじんわり愛が湧く夫婦　雄幸
（愛情の表現という痴話喧嘩）

命から二番の愛が倦怠期　碧
（命がけだった愛にも倦怠期）

哀楽を越えて不動の夫婦愛　(坂)静子
（添いとげて揺るがぬ愛を噛みしめる）

愛してるなどと今更口に出ぬ　義男
（愛してるなどとどっちも言えず老い）

老夫婦コトバにせずに分かる愛　正
（感謝する言葉に愛を込めて老い）

熱燗で迎えてくれる妻愛し　幸次郎
（熱燗も妻も愛している夕餉）

愛情の倖せを飲むテイタイム　美寿子
（老妻が愛を注ぎ足すティータイム）

愛よりも健康ほしいと老いて妻　捷也
（健康をいたわる愛の五十年）

老い二人空気のような夫婦愛　郁子
（愛情は空気のような老い二人）

紙一枚愛の絆がとけて行く　(中)弘子
（絆断つ紙一枚で消した愛）

掛布団肌で感じる母の愛　一典
（掛け布団母は黙って掛けてくれ）

深い愛子を突き放す烈しさも　アキ
（厳しさは子を突き放す深い愛）

風邪の孫今日は素直で愛をしく　幸枝
（わんぱくの孫が愛しい風邪で寝る）

弱かった僕が傘寿は亡父母の愛　辰男
（弱かった僕の傘寿は父母の愛）

自愛せよ母のことばが胸にしむ　忠男
（自愛せよ母の手紙を読みかえす）
頬つたう涙が語る深い愛　文子
（うれし泣き言葉にならぬ母の愛）
山の旅重ね流星は子の便り　俊一
（旅に居て思う子のこと夫のこと）
箱一杯愛を詰め込む里の秋　三重
（母の愛一杯詰めて届く秋）
背中から見守っている父の愛　勝巳
（僕の背をいつも見守る父の愛）
ひとりっ子父母の愛重たくて　ミツ子
（両親の愛が重たいひとりっ子）
丸い背の愛を感じる年になり　ふみえ
（愛情を丸い背中に受けとめる）
家という絆にしばり愛という　ふうこ
（家という絆に耐えた古い愛）
ビシビシと涙を呑んだ愛の鞭　ミツオ
（真心は涙こらえた愛の鞭）
愛の鞭打ち過ぎ教師棒に振り　露芳
（限界を知らぬいじめと愛の鞭）
保母さんは可愛いい園児数珠つなぎ㈹静子
（保母さんの愛に群がる児の笑顔）
自然の愛一杯もらうこぼれ種　行子
（こぼれ種自然の愛に身を委ね）
路地裏に愛注がれし菊華展　旭
（路地裏の愛に包まれ菊が咲く）
愛持ちて育てた窓辺の鉢の花　トキ
（愛込めて育てた花に救われる）
愛着より値で捨てられぬ古い服　玲子
（古い服値に愛着があり捨てず）
せりに出す仔牛の背中拭いている　ツネ
（せりに出す仔牛の背中拭きつづけ）
床の間の敬天愛人気付く秋　黎之助
（床の間に敬天愛人掛けて住む）
郷土愛村興しに知恵しぼり　一乗
（郷土愛知恵をしぼった村興し）
温い愛を待ってる飢餓の子ら　志華子
（飢餓の子に出す愛情の切れっ端）
愛のなき閣僚発言愚弄する　真二
（口先の愛で国民愚弄する）
愛なのか証待ってる青リンゴ　りつえ
（青リンゴ愛の証を待ちつづけ）

**表現・着想ともに立派な句**

受け止めてくれる傷心母の膝　芳水
反発の方が大きい愛の鞭　勝巳
愛称で呼び合う友も九十九髪　睦子
愛してるとは言わなんだプロポーズ　淳子
この世とは縺れ絡んだ愛と憎　日出子
愛してるなんて言えぬが貴方だけ　ますみ
痛みだけ残り届かぬ愛の鞭　碧
子に注ぐ愛に見返りなど要らぬ　宏章
仏飯を愛の証に高く盛る　ゆうた
愛情を二つに裂いた逃避行　鐘造
愛されています貴方のいる限り　君枝
地の愛に応えてどっと曼珠沙華　剛治
愛人と言えば美人と決めている　まさと
愛犬に喜怒哀楽を悟られる　君江
一泊の旅でこまごま書き残す　㈱幸子
純愛という字が死語になってきた　弘子
指切りの小指で愛が芽生えてた　彩子
古希過ぎてなお愛してる妻がいる　三郎
手をとって火の川渡る愛一途　さち子
味付けを薄くするのも愛だろう　孝子
好きだから愛の不安に怯えてる　美津子
老人ホーム愛の絆が途切れそう　武春
岸壁に凍りついてる母の愛　木管
青い実が落ちて厳しい愛がある　めぐみ
愛だとは気付かなかった通せんぼ　絢子
愛情の坩堝に溶けた秋の蟻　ふさえ
封を切る愛のこぼれぬように切る　タツエ
手料理に愛という名の調味料　高栄
愛一つ遙かな空へ抱きつづけ　キヨエ

**私の句**

太陽の大きな愛に生かされる

◇

題「**開く**」1月15日締切り（3月号発表）

**宛先**　〒583　藤井寺市道明寺2丁目11－4

吉岡美房

毎月25日締切・30句以内厳守　編集部

## 倉吉川柳会　谷口　次男報

謎解きの児の瞳ギラギラ燃えている　秋女
振り回すオウムの謎も底が見え　康子
地下足袋の跡からたぐる謎の糸　和枝
謎めいた言葉残して彼は去り　幸子
謎なぞが多くて市会また流る　独歩
事件には謎めく女のサングラス　智子
謎かけの巧い女の長い髪　節子
謎を解く鍵をサティアンから拾う　かつみ
夫婦でも妻に明かせぬ謎もある　秋草
なぞなぞでめしを食ってるお寺さん　石花菜
謎の失踪なのにうわさにのぼらない　菩句
肩組んで寮歌唄った仲間たち　秀峰
カルチャーの仲間に入り若返る　よしえ
おだてられ仲間に音痴披露する　美由紀
喧嘩した仲間が留守電入れている　美智子
よい仲間あって明日が笑えます　秋人
肩を組めば赤提灯へ行く仲間　雄々
アイドルの名はパッと咲きパッと散る　小生
国家とは無名の民が主役なり　次男

人柄がいいから中身には触れぬ　日枝子

## いずも川柳会　園山多賀子報

友情を越えてはならぬ夢たたむ　青湖
振り向けば友が情けの旗を振る　久代
友情が美味しくさせた秋の酒　文子
友情を越えてはならぬ喫水線　一葉
友として熱い拍手を贈る今日　芙佐子
友情が親より先に馳せつける　寿美
友情の絆は切れぬ裁ち鋏　智恵
空振りの友情潮が満ちてくる　茂美
友情は金で買えない義理がある　おしえ
音立てて友情崩れる日の怖さ　水煙
仲秋や飢えし心をときほぐす　篤子
冬の海飢えて大きな渦を巻く　房子
金貯めて心の飢えが身を責める　昭二
帯締めてひもじさ耐えた頃もある　きみえ
小さい善いつかは夢見る花の園　蘭水
嫁よりも姑が小さくなって住む　昌枝
母の背も小さくなって秋深し　治代
小心かもしれぬ蟹の横歩き　れいじ
小さいが満足している子の寝息　まこと
大盛りのキャベツ兎じゃあるまいに　多賀子
嘘言わぬ土に野菜の出来不出来　ゆき子
飽きもせず妻がレタスを食わせます　早苗
酒と女をずっと味方にした寿命　裕
金屏風背にした皺のある誇り　ちかし
喜寿の坂まだその上に拓く道　幸一
喜寿祝う余生へ夢を貯える　義良

喜寿の坂波長合わせた夫婦ゴマ　満江
喜寿の宴今日の佳き日の顔の艶　しま子
寿命を知って巨象は群れを離れ行く　信介
喜寿の駅降りて成果を振り返る　流石

## 堺川柳会（前月分）河内　月子報

手加減は加えたくないオウム教　二南
荒れた手に妻の美学があるらしい　美子
弾んだままで妻の手まりが帰らない　途子
うどん屋で軽いはなしをふたつみつ　月子
前例を破る勇気を出してみる　梓
座っても立っても忙し母の手よ　りつえ
横っ面張られた温いおやじの手　冬虹
世紀末すこしよろけて立っている　美代子
ていねいな手紙断りだとわかり　昭子
アメリカへノーといえない訳がある　みつこ
みなさんに支えてもらい立っている　泰子
長生きが出来そうきちんと薬のむ　扶美代
終日を紅葉の赤へ立ちつくす　喜代子
断絶の子から住所のあるハガキ　楓
前に出る勇気を川の流れから　かりん
お互いに勇気がなくてまだ夫婦　摩耶
そして秋長い手紙を書きました　星子
立ち上がる今日一日を生きるため　彰
長過ぎる生命線にふと不安　満州
軽々と聞いた噂が重くなり　文
うつ手まだあるとこりない金バッジ　頂留子
OKのしるしに軽く眼を閉じる　こころ
立ってみて寝てみて秋の月は良し　一二三

母ちゃんに断られたらあきらめる　天笑
断れぬ見合だったと妻も言う　健吾
フランスパンの長さに明日がある若さ　寿美

### 川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

何時までも尽きぬ女の小競り合い　ひかり
あの顔で手綱さばきのうまい女　かおり
一服のお茶に幸せかみしめる　放任
銀行は頼りにならぬ襲にする　あきら
営業マン足が数字を弾きだす　くに子
ひと月は長く一年すぐに来る　吟笑
三猿の訳を孫にも教えとく　マツエ
鳴る拍手競い合ってるゴール前　治延
棧橋に母の姿が点となる　マサエ
亡母の歳越えても在れば甘えたい　ふみ
荒れた手を見せて血圧測ってる　文仙
さりげなく言った言葉が気に掛かり　よしみ
この命尽きても時計右回り　はつ恵
クジ買って帰る車が大当り　正雪
ナースには何時も美人と言うてある　坊太郎
手と足をもがれて達磨横になる　いさむ
大勝負奥の手使い勝ちを取る　中2なみ子
土踏まずだいじな動脈守ってる　チカエ

### 川柳若葉の会　宮崎シマ子報

錦鯉買えず金魚で我慢する　清芳
老け役の先ず腰曲げる仕種から　喜美子
生き残るために信念曲げる日も　田実子
幸運よ指の先から曲り出す　欣史子
六十年自分の音と暮してる　千枝子
足音をたてて自分を確かめる　能子
お喋りの果てに明るくなった友　シマ子
平均寿命余った分を世に尽し　留吉
津軽三味雪が間にまに竜飛崎　弘直
病床へ周りが元気すぎる音　あずき

### 高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

細い紐たどって冬の森を出る　スミ子
紐一本男を縛るには弱い　よ志子
近道を言えばタクシー返事せず　ふみ
近すぎて見えないとこもある夫婦　英一
そろそろと生きよう喜寿がもう近い　正坊
図書館が近くで散歩にこと欠かぬ　茶の子
色よい返事近々するとそれっきり　波留吉
赤とんぼの速さで秋の彩になる　〆女
ご近所にうとい詩人の懐手　萬的
子の合図見落してから不眠症　マツエ
少年の自殺シグナル見落した　獏沓
目で合図するだけでよい君と僕　紫香
神の合図何度も見落し元気です　秀夫
合図してやろう働き過ぎるから　しげお
こつこつと足で見付けて来た決め手　庸佑
目を覚ます理性決め手の顔になる　静江
これと言う決め手はないがいい夫　(松)芳子
決め手欠く夫をいつか疎んじる　礫
ここ一番決め手が欲しい靴すべり　重人
最終の決め手は妻に任しとく　杜的
ライバルの死角に伏せてある決め手　諷云児
官官接待聞いて税金払えない　東雲
麻酔から醒めると温いナースの手　かおり
ささやかな城に火の粉が降りかかる　あきら
音たてる別れ音のない別れ　艶子
招待席無人のままで幕が開く　白渓子
無雑作に命を捨てる風野郎　恵美子
ルージュ濃くこころ模様をひた隠す　澄子
振り出しに戻ると情け目を覚ます　瀧小
曼珠沙華罪のかたちのまま枯れる　薫

### 溝口川柳会　小西雄々報

暮らしにも昔の知恵が生きている　久子
昔から正直に生き無位無冠　弘子
幸せを掬い昔の苦を思う　正光
薬草を昔の知恵で飲んでいる　康女

## 佳句地十選（12月号から）

土橋はるお

**ご先祖の顔がちらつく寺の寄附**　俊路
**夫婦別姓乳房が二つついている**　しげお
**独り棲む屋根から一人分の湯気**　日枝子
**街へ出てごらんコントが落ちている**　鹿太
**ポケットの拳に溜めているみれん**　隆
**新築の柱に染みている苦労**　公一
**墓洗い尽くせなかった詫びを言う**　楓楽
**脇役が光ると強い風あたり**　ひかり
**生涯を地味に歩いた日記帳**　一二三
**もっといい事がありそうだと歩く**　美代子

どじょう汁昔しのんで秋終る　信　敬
老いていま昔よかった愚痴をいう　鈴　枝
亥の子餅供えて感謝した昔　豊　枝
仏壇を拭いて昔を顧る　智恵子
パラダイスのような昔を忘られぬ　雄　々

**久世川柳クラブ　二宗　吟平報**

散策に誘われ籠りがちを行く　美恵子
新米の産地直送のチラシ来る　智恵子
寝返りを打たれてからの負けいくさ　秀　香
年金を頼りに生きて老いの日々　禅　心
野良着にて列に並んだ検診日　種　子
省エネを言えば古いと笑われる　善　代
老人も一寸着替えて紅をさし　のぶ子
帽子ぬぎバイバイ手を振り孫帰る　久　子
旗を振る応援団よありがとう　すみれ
宅急便娘手編の帽子添え　亜　矢
入学の記念角帽買っておく　旭　泉
帽子取れば今日から私も無位無官　知　世
知っている顔を帽子にごまかされ　つた子
保育園の帽子の列がこんにちは　千代女
旗色を見て決断をするつもり　志　重
如何あろうと生きて帰れた白旗です　楽　山
バーゲンの旗に胃袋みたされる　甫　正
軒並みに国旗掲げた町平和　光　水
句の友がまた一人減る秋の雨　伊久栄
突風で飛んだ帽子が逃げまわり　吟　平
健康法体験談に刺激うけ　ただし
風雪に耐えて今宵の綿帽子　富士野

**川柳東大阪　森下　愛論報**

不器用に生きた親父の黒田節　一　志
民謡の佐渡は墨絵のように浮き　愛　論
のど自慢民謡賞の村起こし　隆
民謡に歴史の波は洗われる　元　紀
母さんが一番強いので平和　度
あきまへん言いつつ強い底力　朝　子
肩書を解くと人間強くなる　真　柳
夫婦別姓ますます女強くする　太　一
社長にもノルマがあった決算書　勝　美
神経性胃炎がひどくなるノルマ　信　治
ノルマから外されている窓の席　晋　吾
雁が去る日からゆっくり冬になる　湖　風
倒壊のねぐらに鳥も仮住まい　章　久
虫のいのち鳥のいのちにふれる旅　雅　文
憎まれ口孫の成長かも知れぬ　柳宏子
憎まれ役になってかばってくれる母　頂留子
憎いけど捨てるに惜しい古写真　シマ子
人を愛し人を憎んで凡夫たり　恭　昌

**川柳塔みちのく　小寺　花峯報**

お囃子が遠のいてゆく秋がくる　しげる
雲切れて光があたる霊柩車　ツ　ネ
ぴかぴかの仏壇拝む親不孝　生恵子
企みを伏せた外野の笛太鼓　銀　波
囃子の輪鬼も仏も並んでる　順　三
優しさの恋匂わせた夏帽子　花　匠
納豆の粘りに負けた朝野球　雅　城
硫黄泉同じ匂の人種でき　柳　々
人間の隙間を埋める馬鹿囃子　北　歩
朝納豆　夜は納豆を鍋にする　一　火
磨かれた机に映る覇者の貌　黙　人
ねぶた囃子ひとりの余白埋め尽くす　千加子
にぎりずし最後に食べる納豆巻　隼　人
仁丹を噛むと疑い深くなる　一　花
中古車を磨き口笛吹いてみる　花　峯
端渓の中から匂う風の文字　五楽庵

**川柳ねやがわ　江口　度報**

知らん方がええことばっかり聞かされる　亜　成
信号まちのバスにもとどく祭笛　頂留子
店のことは妻にまかせている祭　恵　子
祭ごと八十路の意気をこえている　冬　葉
秋祭り神も氏子もふつか酔い　一　鬼
ふる里へ土の匂のする祭り　朝　子
極楽の予約番号なら貰う　洋
番号順待つ間もまめにコンパクト　吉之助
番号と番号対話してメディア　一　途
暗証番号のなかにあなたは入れてない　礫
ふところ鏡人の心もうつしたい　とし子
折り合いを自分につけている暮し　ルイ子
頂点に立つと自分を見失う　時　弘
驚いたことに自分にラブレター　波留吉
自分史の半分ほどに姑が居る　かすみ
自分にはないものを持つ子が楽し　紫　香
冬を待つ自分へ木犀が匂う　英壬子
雑音は入れ知恵らしい電話口　光　子

雑音の中で悪口聞き分ける　博泉
雑音がないと眠れぬ街に住み　三郎
雑音は聞かぬとシラク我を通す　勇太郎
せせらぎに雑音が皆とけている　文秋
ふるさとの松茸一目会いにゆく　たもつ
勇み足まだ諦めが付かぬ顔　庸佑
縁談の遠のきそうな資格取り　藍子
ほめ言葉探す珈琲いい香り　一風
満ち足りて幸せを噛む菊日和　静江
罹災地のシート青いまま秋に　シマ子
老妻のどこか抜けてるから可愛い　小路
やせましたねと念を押すからうそになる　度

## 尼崎小園川柳会　立谷勇次郎報

貯めてはる独居婆さん狙われる　十四郎
金貯めて新車買うと言う次男　向西
馬の脚嗤われながら貯めている　弘治
貯めたいが間尺に合わぬ低金利　尚利
口癖の鼻歌も出て葱きざむ　夢之助
追い風へ黄信号が点滅す　定人
山の宿二日遅れの新聞紙　紫香
新聞のインクに今日を励まされ　鹿太
朝刊の柳壇読んで茶をすする　勇次郎

## 川柳ささやま　酒井靖子報

窓開けて妥協した日のくもり空　恵美
窓際の悲哀いだいたままで冬　純子
ぐつぐつと豆の話であふれてる　とよ子
ふるさとの母のへそくり当てにする　とみ子
幸せをつづるペン先よく走る　つや子
子の辞書を借りて勉強する八十路　和子
ペン持てば握手をくれた人を恋う　ヒサ子
したたかに生きて勉強冥土まで　八重子
生き甲斐を悟って妻は変化する　市三
ふるさとへ入れば温い里の肌　素水
被災地の変化を悔いる旅の窓　美智子
父母逝きて古里の風冷えて来る　末野
錆ついた頭を磨く知恵袋　芳の
ふるさとの四季が恋しい秋桜　多美子
娘の家へ変化求めて逢いに行く　すず子
ペン先がちょっと照れてるラブレター　冨美
涙もう涸れて女の強いペン　可住
里の墓世間話をして帰る　靖子

## 川柳塔わかやま吟社　宮口克子報

素人の心ある手で看護され　英子
頂点に立って昔を洗われる　利治
千代紙の箱で無邪気に母遊ぶ　英子
豊年の匂　新米炊き上がる　賢二
肉付きの豊かを賞めて叱られる　愿
三下り半あんな豊かであったのに　淳太郎
豊かな日本軋み始めた屋台骨　正
豊かさの裏でストレスためている　紀久子
豊かさが気ままにできる途中下車　好笑
そして豊かに花のノックを待っている　栄美子
豊かさが心を脆くさせている　美羽
いじるだけいじって素人は壊す　金太
素人の書いたシナリオ山がない　武春
素人がさわると悲鳴上げる壺　輝子
読者欄　憚ることのない強み　千寿子
素人の筆が白紙にからかわれ　裕美
素人もあす咲く蕾信じてる　佐代子
宝ですボクのヘソの緒いれた箱　和重
箱ばかり立派で中身恥じている　年子
生きている生かされている顔洗う　三男
もつれ糸ほぐすきびしい掌を洗う　めぐみ
遍路笠やっと洗えた傷のあと　眞喜子
美しい言葉聞きたく耳洗う　さち子
髪洗う湯殿を月が覗いてる　文子
鬼になる心を洗い鬼になる　寿子
趣味の舞洗いつづける白い足袋　誠子
洗っては繰り返してる身の弱さ　冨美子
よい汗の悔いない今日の手を洗う　紀美女
心洗う聖なる山に抱かれて　稚代
青空で心を洗う深呼吸　克子

## 川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

グルメの会なのにドレスをほめあって　遊
食事会たまにはいいでしょ一人でござる　紫
大会を盛り上げる技舌三寸　布
逢うたびに少しずつ減るクラス会　すみゑ
切れ目ない円卓会議でえんえんと　時子
再会に名で掘り起こす半世紀　のり子
会終るまだ興奮はさめやらず　朗子
呑み会を重ねるたびに肚を割る　八重子
会長がまだ指揮棒を振りたがり　まゆ
またとない機会だうんと翔んでやろう　花子
　　玲子

クラス会チャンとオイとではずむ声　富美子
父母に会えるか森の奥深く　千春
会計を割り当てられている酒豪　正子
乾杯を待つ総会が荒れてきた　天雀
会心の作にいちゃもんつけられる　田鶴
お隣も家族会議をしたらしい　保子
料亭がないと出来ない政　寿々子
ごぶさたの勉強会に縮こまる　夕子
なにやかやあって都会を引き上げる　日枝子
クラス会一期一会の重さ知る　春枝
ひと日咲く花と会話がとぎれがち　ふみ
会果てて海の匂が沁みてくる　晶子
万灯会青い童話のなかに佇ち　瑞枝
梅壺と母の会話はとまらない　千代
会は厳か身内の者を引きつれて　亜弥
肋骨の奥で会話も湿りがち　荒介

## 三幸川柳教室　三宅　保州報

あの人も一人で海を見つめてる　親踏
万葉の彩溶け込んで石の貌　武春
かぐや姫の昇天もみた観月閣　美智子
古里を描くと群青色になる　保州
干潟に鳥万葉時より続いてる　あいや
望郷千里干潟で迷う潮まねき　めぐみ
父母の背に似てなつかしい不老橋　よし子
団結を三本の矢で教え込む　義男
本心は言えぬ痛みのある方に　満洲子
本物の味を売ってる路地の店　鉄治
一本の傘から芽ぐむ愛もある　さち子

アンテナで本音をさぐるかたつむり　初子
ジグソーパズルの中に隠してある本音　百合子
本性を包み込んでる蜃気楼　三千子
基本から積み直したい道しるべ　孝子
模索の旅終えて本領発揮する　みね
本流に逆らい太い杭になる　秀男
台本にない人生の綱渡り　町子
肩の荷を下ろし案山子も横たわる　当代
横綱が星を落とした嫁選び　嘉平
横向きに寝られて声もかけられず　和子
横合いの風が油断を突きにくる　公子
横道に逸れた話に味がある　章子
横車押して顔だけ売りたがる　正雄
横笛を吹くとふる里近くなる　美羽
スタートライン横には強いやつがくる　桂香
横笛の余韻ただよう古城跡　千秀
核実験世論へ首を横に振る　高夫
横槍をやんわりかわす片えくぼ　靖子
大物の横でゆっくり伸びをする　朱夏

## 佐川川柳会　赤川　菊野報

二つ三つ消えぬ女の悩み事　文子
あの時の小指の傷に悩まされ　憲一
人知れず悩んで泣いたのも昔　十面子
太るふとると悩んで妻はよく食べる　千鳥
いじめられ悩むな一人で苦しむな　恒子
悩み事膨らんでくる不眠症　健二
思春期の子供に悩む兎小屋　三郎
晩酌の肴に悩む好き嫌い　敏子

幸せに見せて悩みはのぞかせぬ　菊野

## 竹原川柳会　時広　一路報

美しい夕日二人で見ていたい　高1史子
ちょっとあこがれるドラマの主人公　中2千枝
滝の音誰も責めてはおりません　蘭幸
木枯しよいつか一人になる命　喜美子
大の字になって居直る外はなし　比呂子
あるもんだ座り込んでの長電話　千年枝
誰方かなハイハイハイと取る受話器　房子
電話料めっきり減って恋終る　静佳
来春は一年生と孫電話　勲
留守電へ淋しく入れるメッセージ　菁居
娘の電話父ちゃん居るかとは言わぬ　蝸牛
打ちあける恋へ電話がふるえてる　笹舟
可愛い娘と一緒にピアノ嫁ぐなり　清水
ねむれよねむれピアノの音が高すぎる　規代
指一本ドレミファソラシなら弾ける　節夫
秋深むとなりのピアノ聴いてます　夏喜
何事もなかったようにピアノ弾く　静風
会いたいな逢いたいなあとピアノ弾く　螢
滝しぶき浴びて喜ぶ苔のつや　正宏
滝壺の中でお祈りしています　喜久恵
太陽へまっすぐ落ちる滝もある　笑子
亡父母を偲ぶよすがよ滝の音　栄恵
青春を区切ろうひとり滝に佇つ　貞子
滝の音山の深さも知りました　一枝
滝つぼで水の力にふれる音　美佐雄
勇壮な滝が決断せよと言う　一路

## 川柳高知　川竹　松風報

刻印を打たれ産品生きてくる　有佳
銘のない昔むかしを秘めた壺　さち
代読の祝辞へ義理の拍手音　春枝
十人十色他人の噂は聞き流す　菊野
跡取りの嫁を叱って寝つかれず　佳風
心まで澄みきってくる青い月　幸
酒供養地酒利き酒するように　竹萌
酔うて来た月の出るのが遅いから　孝雄
遠い日のラバウルおもう蒼い月　子龍
名月へ言葉は要らぬ酒を注ぐ　圭風
今日だけは核も忘れて月見酒　朱坊
荒れてゆく地球へ月の憂い顔　功
月見宴浦戸一揆の城の下　一求
瓜畑月が夜警をしてくれる　快風
名月を一人占めする過疎の庭　かず子
休肝日明日にしようか酒供養　松風

## 城北川柳会　吐田　公一報

家風とは死語となれども娘に教え　千尋
高齢化と言われる中に我も居る　秀夫
新社員　社長と同じ高級車　あき子
朝の膳　今日も元気と手を合わす　義江
逆回しすると歴史のしみがでる　史風
生かされて今日も感謝の寺まいり　トヨ子
土地勘のない所での回り道　美代子
恐山　烏と対話の風車　政子
ダイエット石焼き芋に飛んで出る　静子
幸せは子等の笑顔と温い声　登美子
欲のない顔が並んだ日向ぼこ　高栄
振り向けば阿吽でわかる峠道　睦子
ゆるがぬ礎石　自分の城をもっている　満津子
回り道やっと芽の出た人生譜　一枝
国宝に見入る一途の目がきれい　達子
石仏に恋の煩悩捨てに行く　八重
高らかに万歳が出る御来迎　とし子
まだ欲があるからお迎えなど要らぬ　柳影
陽の高いうちに余白を埋めておく　ただし
高々と孫抱き上げて祖父の天　春蘭
コスモスが淡い憶いの色で咲く　倫子
欲ばった狸しっぽが見えてきた　典子
妥協した回転椅子がよく回り　純子
欲張った拳が抜けぬ壺の口　白峰
御仏も秋がお好きか彼岸花　久留美
母の背の丸さで気付く親不幸　昭子
冷淡な女の指で笑う宝石　扇帆
足音に虫の鳴きやむ秋の露地　あい子
明るさが少し戻った神戸っ子　公一

## 川柳塔まつえ吟社　恒松　叮紅報

転んだら本当の愛が見えだした　知恵子
転ぶ度雑学を拾っている　鶴丸
収穫のいもが転がる勝手口　房子
七転びしても未熟のままで老い　清子
芯のない男どっちへでも転ぶ　たつみ
食べすぎて転んでばかりいる私　久枝
まだ闇のうちは動かぬこととする　博子
沖縄の戦の闇がまだ残る　茂美
善人のふりをしている深い闇　螢
暗闇でつかんだ温み離さない　登志子
輪廻転生闇は一気に冬景色　雄々
闇の中亡父の匂のする帽子　畔
一発はおどし二発目足へ撃ち　草丘
一発に魂入れてある花火　一葉
一発は的を外して撃つゆとり　早苗
一発の勝負だ花の散らぬうち　文子
一言で相手を殺すのも言葉　寿美子
一発ですっきりとした猜疑心　友子
ユーモアが理解出来ないから困る　太泡
ユーモアの色づけうまい弁舌家　佳江
団欒にユーモアがあり灯が温い　多賀子
いずも弁ユーモアな人に話せない　静恵
ユーモアを交えて話す手話の人　みえ
白髪がユーモアに見る赤い服　静江
たっぷりと取ったつもりが仇になる　米子
たっぷりの笑顔花束抱いている　桂子
紐ときをたっぷりしてる秋の午後　日出子
たっぷりと聞かされていた自慢酒　義良
たっぷりと溜め込んでいる門構え　与根一
たっぷりと叱られている免許証　叮紅

## 川柳塔唐津支部　久保　正剣報

低金利年金の城崩れそう　紀一
趣味一つ増やして呆ける暇がない　治幸
三連休からつくんちに拍車かけ　ふさ子
老い日課保育園まで孫と喜々　ちよ

元旦の旗を靡かす東風　久仁於
孫が吹く笛が艶増す秋祭り　タミ
電車に頼って脳が硬くなる　高明
塗り絵には明るい色から使い出す　四郎
咳ころし負けてなるかとうがいする　實
そっくりだそんなはずない桝の席　幸夫
借金があるから仕事やめられぬ　圭
遍路道自分の足でつなぐ夢　晴子
つまずいた畳の縁の高さかな　弘
嘘だけは師厳道尊父の眉　虹汀
新米を食った雀の声を聞き　あき
ふるさとを問えば首振るホームレス　正剣

## 南大阪川柳会　金井　文秋報

難しい言葉で愛は語れない　楓楽
冬の来るのはゆっくりでよい母の膝　智子
うろうろと歩いて噂拾うてくる　秋子
カギッ子の不満ゲームに強くなり　重人
難しく考え過ぎて行き詰まる　庸佑
山程の不満を詰めた辞表です　良
同類をいっぱい乗せた終電車　直子
山海の珍味へうろうろ迷い箸　寿美
捨て石になっても不満抱いている　千里
類が友呼んで広がる旅仲間　柳伸
子の歩く道をゆっくり見ていよう　透太
人類の未来砂漠に陽が落ちる　度
寿命が延びた余生ゆっくりすきにする　凡子
ゆっくりと噛んで頭に叩きこむ　悟郎
ダンジリのまわりうろうろ男の子　萬的
不満たらたら福祉の世話になりながら　柳宏子
ゆっくりと疲れを癒す終い風呂　志華子
タレント知事不満に強い風当り　勝美
こうときめたらうろうろしない父　鎮彦
この間取り母と住むのは難しい　東雲
格下げをせんと無理です希望校　文秋
人類の気まま地球が痩せてくる　トミ子
難しい話を補聴器が嫌う　公一
水割りの底に不満を沈めよう　国公
難しくしたなと詫びる差し出口　頂留子
宮仕えの不満止り木聞き飽きる　三男
生活のネジゆっくりと日曜日　信博
難しい的ほど狙い甲斐がある　シメ子
ゆっくりと生きたい愛に囲まれて　久子
難しい条件を出す就職難　智久

## 川柳岩出　小倉　アサ報

物言わぬ男がいうと波が立つ　精子
汗積んだ暮らしが生きる太い指　和子
バトンタッチここらで決める長い道　春子
名ざし受け不用意のまま立つあせり　悦男
アンテナの長さ物言う未来地図　アサ
筋道が立って話が進みだす　愛子
束ね髪暮らし支える寡婦の意地　綾子
どん底を母と暮らした山がある　保子
十分な暮らしでないが満ちている　幸子
長い坂越えれば先が見えすぎて　良一
医者通い今年は足で暮れて行く　ふみえ
まあまあで暮らしのわかる不可思議さ　正直
逆らってここで沈黙席を立つ　哲雄
角立たぬように一言釘をさし　千鶴子
暮らしぶり便利になって尚せわし　英子
長髪を話きまって切る娘　重徳
汗積んで模様合わせてきた六十路　智恵子
影長くなって初めて秋を知る　正義
這えば立て無限につづく母の愛　忠雄
子には子の立場もあってたしなめる　与呂志

## 堺川柳会　河内　月子報

戻っては来るなと送る刑務官　彰
蟹工船遺し多喜二の暗い青春　文時
旧友に会って仕合せ観ゆらぐ　春蘭
APECに見せられません街の垢　萬的
一日の垢をぬるめの湯に流す　道胤
少しだけライトが届くフィナーレ　喜代子
人生のラストは神にゆだねてる　紀美女
夏の垢払って湯豆腐を作る　美子
泥臭い父の姿も見せておく　勇太
蟹食べる無口な息子なお無口　八千代
ラストシーン見てから終い風呂にする　二南
垢抜けてマダムに残る佐渡なまり　頂留子
鯨尺亡母の手垢のあたたかし　梓
垢すりの魔法の布が効いてこず　冬虹
戦争へねじ巻き戻すことはない　みつこ
ダサイ息子が垢抜けてきた恋らしい　りつえ
吾が影を覗けばうすく垢が浮き　美代子
見るたびに垢抜けてはるきんぎんさん　満州
出直しのきかぬラストを悔いている　文

あの頃にもう戻れない好きな柄　かりん
引出しの万年筆に恋の垢　泰子
楽だからやっぱり戻る籠の鳥　健吾
電話にも姿の浮かぶ京訛り　摩耶
あたたかな風が戻ってねむくなり　楓
姿ない貧乏神が居て困り　東雲
片意地なこころに垢がこびりつき　天笑

**川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報**

赤蜻蛉あの世の父母は達者かな　富恵
人寄せてお花畑のコンサート　幸江
曼珠沙華野ざらしタイヤの中に咲く　実満
雑草も花芽を抱いて冬支度　智恵子
タンポポに思うことあり野辺に咲く　明美
曼珠沙華天国までも続きそう　武子
草むらで野菊ひっそり人を恋う　弘子
いじけるな野に咲く花に笑われる　菊乃
花盛り色気たっぷりある薊　喜与志
それぞれに個性いかした花咲かす　久枝
野いばらが蝶々の恋路を塞ぐ　三千代
秋風の序曲が好きな萩すすき　かつ乃
コスモスの乱におんなの媚をみる　くに子
野に立っていつか詩人になっている　和子
ゆらゆらと秋を色どるコスモスよ　八重子
野仏の笑顔が好きな赤とんぼ　隆風
コスモスが訛りで話かけてくる　はるお
つらい日を越えた野菊が美しい　みさ江
蕎麦の花素朴な昔呼びもどす　信江
晩秋の野に新しい風が生れる　富久江
若者の蔭に影にと咲く野菊　汲香
私を無くして広い天を見る　茂
花びらの一枚ずつの夢語る　早苗
イベントにお出でよ町は花ざかり　節子
いのち尊し花は見事に咲いて散る　みさ子
さよならが嫌で向日葵首を振る　きみ子
縄を張る人と野原で口論する　盛桜
けもの乳呑む広野には花が咲く　諷人
吉祥天へ花開く　菊の色いろ　螢

**ほたる川柳同好会　井上　直次報**

混む中でゆっくり仮面つけ替える　福一
旨いなら混んでいようと並ぼうと　蛍柳
混む駅で孫とはぐれたおばあちゃん　博史
杖つけば混んだ電車にもう乗らぬ　吉太郎
手のこんだ贈収賄に知らんふり　純次
混雑を掻き分けて買い得した気　眞郎
混んでいる医者へいそいそ老母の行く　直次
混み具合　道は渋滞キロで言う　馬洗
人混みにまぎれて浸る孤独感　方郎
ラッシュアワー体でおぼえる処世術　善守
混み具合見て診察が早くなる　正安
人混みの中でつないだ手が若い　祥風
早朝の車内が混んで目が覚める　竹二
人混みのざわめき恋し病み上がり　つよし
にぎやかに一円玉で混んでいる　源一
人混みで見る人もなし手をつなぐ　英子
人混みもしばし忘れる宝物展　昭子
混んだ夏忘れたような砂の音　桂子
混んだ宿手抜きでサービス料は取り　久子
久びさのラッシュに若き日甦る　キヨ子
ふる里の秋がこぼれる宅配便　保子
配置替えだんだん窓に近くなる　恭子
大御所もジンクス破り落目なり　明光
ジンクスがあるから湧いてくる闘志　ただし
ジンクスをかついで監督縞パンツ　清史
お隣の主人に会うと雨が降る　喜美子
ジンクスが破れ男の孫が出来　敞子
ジンクスにさからい夜に爪を切る　幸子
ジンクスが何だと回る夫婦独楽　瀧小
四つ葉のある所知っている苦労人　郁子

**京都塔の会　松川　杜的報**

財界の黒幕の罠露見する　友熙
白髪の少女はしゃぐクラス会　栄
金髪も溶けこんでいる古寺の庭　達子
髪に手を当てて優しいことを言う　白渓子
またしても手持ち無沙汰で髪いじる　庸佑
ジーパンでショートカットでサングラス　ただし
逆縁の涙知ってる束ね髪　芳子
猫にまで楽しい時は声をかけ　昭子
楽しみは湯豆腐で飲む酒の味　圭坊
さびしさと隣り合わせの気楽さと　瀧小
楽しんでおこう人生先が見え　英一
楽しくてしばらく開けぬ色封筒　紫香
ローカル線楽しい人と隣り合う　求芽
別れまで少女楽しく手を振って　杜的
合格までの苦労を辞書は知っている　波留吉

古い辞書に亡父のコントがありそうだ　礫　百合子
辞書にない言葉で青年立ちばなし　〆　女
まだ夢は捨てず辞書繰る老いのペン　諷云児
雑兵の辞書に主役の文字がない　て　る
夏負けの夢に亡母のところてん　笑　女
寝足りないうでをチクリと注射針　美　穂
日当たり風向き鬼門設計図は小休止　武庫坊
闇の深さがわからぬままに生きている　年　代
その先が見えないままに秋になる　水　客
オットセイのひげが浮かんでおぞましい　福　子
大阪の商人辞書にないセリフ　正　坊
辞書にないカタカナ言葉振り回す

**ローズ川柳会　山崎　君子報**

秋の灯に実らぬ遠い恋供養　て　る
万歩計わたしに似たのか怠けもの　ミサヲ
恥多い顔を洗って今日終える　みつ子
名前ほど実らぬままに旅立ちぬ　藍
坂の道膝いたわりつつ万歩計　トミエ
カンバス一杯いつかは実る夢を描く　まさお
十戒は実らず悪は不滅らし　貴代子
実りある一日だった欠伸する　澄　子
実らなくてもいい神に手を合わす　いわゑ
大正生れの恋実らせた赤ポスト　武庫坊
万歩計命を刻む音がする　年　代
遅い子に合わせてくれる縄電車　はつ絵
台所仕事も万歩計友に　民　平
三日めに落してしまった万歩計　哲　子
宅急便秋のみのりに亡母のせて　君　子
自然林ドングリの実は夢をみる　義　子

**サークル樺樣　小林　一夫報**

まだ知らぬ国がいっぱいある地球　正　坊
飴を買うわたしの海を満たすため　楓　楽
ドラマみる夫婦は違う角度から　いわゑ
赤とんぼ神の描く絵は真似できぬ　あずき
満点でないとお互い知っている　みつ子
ぶっつかるほうへ互いに逃げている　希久子
市民菜園となりの芋とくらべっこ　智恵子
うそ八百埋めた畑をポチがほる　喜美子
お花畑にお子様ランチがずらり　薫
畑打つ鍬の先から冬の冷え　房　子
わたしの畑このペン皿もてのひらも　千　代
あねさん被りの亡母が何時でも居る畑　智　子

**川柳大阪　坊農　柳弘報**

案山子くん君はいつからそこにいる　中1　圭
自由化でどこへ行ったか案山子たち　酔　照
いたずらの自信過剰がずっこける　太　元
天高く尾根行く風に秋を見た　かよこ
追い風も逃げ道だけは残してる　良　花
寒風にウンと気張った奴凧　河南子
近眼で狸の光る目がほしい　多　香
仲人も嫁もいまだに狸です　叭　笑
シャクの種うわさ飛び交う風の音　柳　昌
狸より太っ腹だよ母さんは　美　花
徳利を持った豆狸に袖ひかれ　美　子
上役に似せた案山子に番させる　川　童
つむじ風お次は誰がはじかれる　青　道
減反で就職難の案山子増え　まつお
たまに見る案山子日本の景色だな　雅　巣
頑張った案山子ねぎらう秋祭　鉄　心
僕一人秋田小町のガードマン　比呂志
欲のない顔で案山子の二十四時　洛　酔
風向きはよまず私は歩くだけ　ダン吉
消えやらぬ未練残して尾灯去る　本蔭棒
風上にいると痛みが解らない　一　歩
賢くて狸親父の異名とる　希久志
うしろから風に押されて生きている　笑　風
ダイエット成らず狸のような腹　しげお
裏切りを風の便りに聞く落ち目　美津留
狸の目嘘をきっちりのぞいとり　与呂志
男とは所詮働く牛でよい　司
気のおけぬ狸とハシゴしています　重　人
高級な酒も所詮は同じ酔い　金　太
都合よく狸になれるお大臣　柳　弘

**翠　洋　会　米田　恭昌報**

プレゼント夜店のダイヤとは知らず　鬼　遊
離婚する冗談本気半々に　たま子
半分こしてもくらべる孫の菓子　絹　子
半々のこころを持っている蝶　英壬子
騙された振りでグラスの紅い酒　光　子
お金半分出してる欲で手が引けず　さと美
鍵っ子の部屋はおもちゃにけつまずく　凡　子
巡回を終えた夜明けの鍵の束　佳　秋
モットーは不言実行仕事好き　春　子

半分は貰う権利がある所帯　千歩
巧妙な化粧に男騙される　東雲
半分に折れるつもりの示談金　久峰
病名を隠し通して悔いはなし　綾子
うぬぼれが半分あって生きられる　みつ子
当ったら半分やると宝くじ　千梢
交際費半分削る子の学資　正雄
騙されたつもりあんたに賭けてみる　英一
ゴキブリを騙す団子を練り上げる　志華子
五分五分の立場で意見くい違い　真砂
仕事には厳しい父の赤いペン　正坊
ふたつに割ると大きい方をくれた兄　ひろ子
騙されてみたい女が一人いる　蛙
職捨てた日に悔いはなしいわし雲　希久子
年賀状半分書いてお茶にする　照子
半分は信じています神仏　みずき
お向いの犬が我が家の客を吠え　叡子
ほんものの絵か赤外線が鍵にぎる　宏子
均等法家事半分をまかされる　恭昌

## はびきの市民川柳会　榎本　吐来報

垢抜けた後ろ姿に匂う過去　りつえ
お疲れ様と用ずみ案山子に声をかけ　昇
破れ障子に秋の夜風も爽やかに　四三郎
片言の会話が弾むスペリ台　美喜
天は秋しばらくぶりの酒が友　与呂志
二度の職もう一踊りしてみよう　希代司
酒呑めばだんだん童顔現れる　敏
裸婦像の前でゆっくり足休め　志洋
すっきりとローンが済んで高鼾　敦子
母さんがすっきりさせた平手打ち　聡
泥みんな吐いて涼しい貌をする　美代子
久しぶり孫に仕立てるミシン踏む　シマ子
子に賭ける夢を育むミシン踏む　重人
はじらいの演技も板につく見合い　さとみ
娘の見合い親がそわそわ落ちつかず　えみ子
見合いの日もお茶を運んだ姉に惚れ　敏子
わたしには過ぎた妻です見合い婚　金太
いやいやの見合い相手と今日の幸　泰子
大方の予想外した知事の椅子　かつみ
買ってない時は当っている予想　利武
予想した通りになって怖くなり　一壺
予想せぬ人が賛成してくれる　みつこ
控え目に予想してみる傘の内　悟
ズバッと言えばスパッと返す友がいて　扶美代
ヤアと手を握った旧友の名が出ない　晋
お国入りすれば総理も俺お前　たけし
口喧嘩して帰った将棋今日も来る　洞庵
しんがりに歩幅合わせてくれる友　絢子
少しずつ敬語がとれて友になり　辰子
ウインクに相槌を打つ退社ベル　吐来

## 川柳クラブわたの花　片上　英一報

男はんの自慢話に出るあくび　シマ子
嫁ぐ日を待つ娘だんだん妻に似る　一風
出入口戻らぬ猫を待っている　幸枝
恋こがれ待つ身のつらさ身にしみて　じゅん子
焼いたごみ何度も覗く焼却炉　道子
いっそもう心まるごとくれますか　けいこ
こおろぎが秋の気配を覗かせる　英一
走り方あひるのあの子が人気者　宏
おひるねの孫ばあちゃんの膝枕　ミツ子
素っ気ない挨拶をする好きやから　春子
挨拶をしたが名前が出てこない　君江
挨拶をぬきで素顔のおつきあい　ますみ
玄関の菊ほめているご挨拶　トシエ
引っ越しの挨拶がわり花の種　明子
挨拶に来る花嫁はしおらしい　春江
嫁つれてお隣からのご挨拶　まさと
クラス会挨拶ぬきで語り合う　龍
書いたもの読んで大臣やめてゆき　泰成
挨拶をしているわたし無視をされ　幸子
今後共よろしくなどとフルムーン　朝子
挨拶がお上手坊や齢いくつ　友甫
立て板に水とはいかぬくやみごと　隆
挨拶は苦手で妻を楯にする　美津留
挨拶がよくできました孫を撫で　鬼遊

## とっとり川柳会　武田　帆雀報

ガンに勝ち拾った命捧げます　茂
三面を拾い読みして朝を出る　舎人
落ち込んだ私拾って朝が来る　悦子
拾った時計　型は古いがまだ動く　一夫
言葉尻拾い　じりじり責められる　幸枝
拾おうか蹴ろうか財布じっと見る　よしお
捨てに来て拾って帰る愚痴話　一枝
心中か森で拾ったくすり瓶　輪多朗

恋人と両手に小さい秋拾う　圭一郎
秋の海で箸置にする石拾う　完司
折にふれ隣にみやげ買って来る　多哥由
ひんぱんに宅急便の来る隣　明美
隣からめでたいお菓子お裾分け　行男
お隣の桜が狂い咲きをする　静生
クラシックは隣演歌はうちで鳴り　一瑶
人妻と隣の花は美しい　銀嶺
俺茶漬隣の犬は肉を食う　喬水
お隣の風呂場が見えてスミマセン　正和
大の字がフッと寂しい妻の隣　雄人
似顔絵がねじれ芸術的になり　粗粒
盛り付けの料理ピカソの絵になった　和歌子
名コック皿へ芸術盛り付ける　孝男
窯出しに芸術の目が光り出す　きみ子
芸術を語れば義歯が浮いて来る　公乃
どう見ても芸術を生む指でない　美恵子
芸術か猥か危ない絵を描いた　帆雀
一級の芸術品は私の子　大漁
保育器に芸術試作品がある　とみお

## わかあゆ川柳会　松本はるみ報

一軒家たどりついたら留守でした　聖子
みの虫の充電枝にぶらさがり　好栄
会いたくてしきりに噂しています　ちよえ
旅立ちも変らぬ音で落ちる栗　恵美子
失敗に失敗かさねて歳をとり　英子
こめかみの奥に噂を積みあげる　はるみ
栗の実のようにぽろりと征った夫　鈴江
花いちもんめあの友達者でいるのやら　民子
留守の間に茄子も胡瓜も太りすぎ　かつ子
まな板が乾いています妻の留守　博利
入院の噂は癌にしてしまい　清泉
他人ごとと思う噂でお茶をのみ　白汀

## 川柳塔おおとり　上田　俊路報

川柳会身を削るような題が出る　伝住
削り節かけた奴で先ず一杯　崇
一つずつ言葉削って老いてゆく　友子
修飾語削ればエゴが見えてくる　俊路
岩肌を削る仏が見えるまで　艶子
あくびして笑っておこり今日も生き　道子
やりとげて黄昏色のあくびする　登美
妻のあくびは嬉しいな悲しいな　千枝
くつろいだ父のあくびに明日がある　愛恵
自分史にあくびした日が書いてない　半疊
お開きの催促あくび一つする　孝子
ショーウインドー姿見にして街を行く　孝次郎
謙虚な姿豊かな知性溢れてる　黙光
母さんの和服姿に惚れ直す　余志身
裸木の姿は父の愛に似る　一穂
姿形所作も似て来て息を呑む　静枝
姿見に揺れる心をのぞかれる　由多香
亡母によく後ろ姿の似た羅漢　みさを
幾星霜越えて巨木は神になる　しげる
炎えている紅葉が胸に火をつける　ひかり
観光のお城で殿になってみる　宏章
紅葉もさまざま老いを考える　芳子

## 尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

エーペック何だか識らぬまぜご飯　ハツエ
よく匂う花は谷間で咲き誇り　末貞一
立話子供下から覗き込む　向西
物忘れ昨日はおろか今朝のこと　一閑
級友も戦友も逝き　僕一人　六浦
あどけない幸せがあるクレヨン画　澄子
罹災して親子の絆　身にしみる　修水
押し売りに意外と妻にある度胸　江美
体重計がちょっと痩せたと褒めてくれ　すみ
立話弾んで家を空けたまま　十四郎
ちょっとした姑の口添え母の味　弘治
スランプの深い谷間が抜けられぬ　勇次郎
古里の谷間が恋し　柿の種　夢之助
時雨して人の情けを知る旅路　鹿太
懸命に生きた背広の一人言　正治

## 西宮北口川柳会　亀岡　哲子報

五十年　守り続けた二人の灯　てる
灯火親し母の着物を縫い直す　ルイ子
晩学の灯はあかあかと部屋ふたつ　泰子
赤い灯がともると力湧いてくる　重人
胸の奥に今日も迫ってくる夕陽　香子
名ばかりの長老奥へまつりあげ　ひろ子
道具屋の奥に溜っている逸話　美智子
次の世もやはり女で渡りたい　よし津
小さい溝渡りそこねてから正気　みつ子
鬼の面つけて渡って来たおんな　透太

幸せへ向かう吊り橋なら渡る　文
十字架を背負って渡る交差点　源一
渡り船とのったつもりがだまされる　佐江子
逝く母のかすかな声がずっとある　はつ絵
重ね着のすきまに溜るかすかな冬　富喜子
魔がさしてかすかな反旗振ってみる　義子
野望未だかすかに残る火打石　佳秋
むなしさの中でかすかな灯を探す　房子
亡母の声かすかに聞いた遍路道　正坊
祈るたびかすかに神の声を聞く　諷云児
風が脅かす　かすかな残り火を　キク子
コスモスのかすかに揺れて日が沈む　涼子
うれしい言葉かすかに頬のゆるむ父　鹿太
コスモスと背くらべをする般若寺　トミエ
蟹の子にまっすぐ歩けと躾ない　絹子
新米と小茄子の歯切れ老いの幸　春蘭
好きだとは言えず恥じらう紅の色　澄子
罹災それぞれ初めて集う母の忌に　まさお
結び目に花一輪を添えておく　哲子
決心がついておいしい朝の飯　たず子

## 岬川柳会　八十田洞庵報

書を習う友がゆったり差をつける　晶子
適当な不自由もあってこの浮き世　とみ
自由化も玉虫色の衣着せ　勇
妻と娘の自由の女神居る我が家　悦子
自由主義喜んだ人先に逝き　いと
年老いて自由に歩く散歩道　末吉
自由にも要らぬ気遣い戦中派　良平
不自由を自由に変える子の笑顔　庄六
洒落一つ言わず座職の手光る　洞庵
本心をちくりちくりと探る友　みつ子
木枯らしが吹き本心を裏返す　幸
あのケンカ本心出して友となる
リーダーになれば自由を奪われる　よし子
十数え相手の本心掴みとる　太茂津
靴下の伝線気付き乗り遅れ　忠男
新兵が靴下とられ罰をうけ　孝子
全身で自由奔放描く夢　龍弘
盆栽の自由に伸びてみたい枝　みやこ
ばあさんが今も靴下継ぎを当て　年子
母ちゃんと別れりゃ自由になるけれど　正美
お手頃な値段になると物がない　ヤエ
　　淑子

## 打吹川柳会　奥谷弘朗報

名目は薄謝にしとく袖の下　博丈
名目は研修会の名を借りる　隆風
荒稼ぎしてうそぶいている余生　柳風
米櫃が静かな余生とお付き合い　よしえ
親心知らぬヤングが空をとぶ　野草
名目は管理人だけ別荘地　早苗
火の中に飛び込む度胸ありますか　和枝
名目の会議に歌も三味も出る　善政
度胸すえほんとの話言いました　寿満湖
名目は秘書に任せて金使う　獏沓
試食会という名目で輪をひろげ　雄々
花瓶に一本余生が香っている　喜与志
手綱などいらぬ余生だ野を駆ける　季芳
余生とはこんなもんかな孫と寝る　螢
舌下錠持って余生とお付き合い　よしえ
女房を敵に回した糞度胸　幸子
まことしやかな名目つけて逢いに行く　節子
厨房を嫁に譲ってああ余生　玲子
ケセラセラどうせヤングのやることだ　とみお
名目をつけて反旗を振る議員　弘朗

## 尼崎いくしま川柳会　春城年代報

百薬の長で律義なお付き合い　正治
おとなしい息子がいちばんお酒好き　ハツエ
地酒あり故里遠くほろ苦し　義芳
ポマードをこきおろしてるコップ酒　正坊
耳のほてりが哀しい夜更けのワイン　芳子
眠くなる本を積んでる秋夜長　伊三郎
買うときは読む気だったが積んだまま　比ろ志
引越しへがらくたも積む老母がいる　すみ
城築く先人の知恵石を積む　正子
悪人を日々積み重ね掌を合わす　まさお
石畳踏んで伝説感じられ　一笛
渡り上手四角い石を丸くする　夢之助
石投げ入れて計る人間の深さ　キク子
笑い疲れおんなの耳は石になる　薫
飛び石が少し濡れてて秋匂う　紫香
つぶやきを残して湖に沈む石　鹿太
夢と住む世界　女が猫を抱く　歌子
木枯らしに散りそう老女うずくまる　年代
一枝を折らせてしまう赤い花　千恵
晩祷の指の先から冷えがくる　光穂

職辞めたときから替わる予定表　白渓子
あるがまま生きて楽しさ倍になる　瀧小澄子
例えばの話が妙に芯を突く　武庫坊正一
百歳になってほんとの古希だろう　嘉矩
園児のバスが五分遅れている焦り
万年筆が引きずり出した遠い過去

**川柳藤井寺　高田美代子報**

今朝聞いた言葉の是非を考える　恒雄
我が道を行くフランスの核実験　史郎
二人居て思い異なる虫の声　春蘭
昨日の傷に今日の私はまだ勝てぬ　修六
娘より母がそわそわする見合い　志洋
きらわれたさなぎがやっと蝶になり　愛子
やりくりでやっとその場を切り抜ける　智久
恋みのりやっと誓いの天満宮　昭水
雑踏を抜けて孤独へやっと着く　和樹
秋夜長やっと二人になれました　悦子
英会話身振りも入れてOKさ　三郎
会話たのしく婆さん達の町角は　宗一
電話口　母さんのお辞儀見えますか　みよ子
盗みたいものがいっぱいある会話　キミ子
通じ合う会話が欲しい風の中　トミ子
会話途切れてだんだん海が荒れてくる　透太
会話フト途切れて秋の深さ知る　扶美代
すかたんな会話は明日のわたしかも　一屯
陽が暮れてサタンと会話したくなる　六点
好き嫌い十人十色あきらめる　二南
十人並は美女にしておく水死体　正一
十月の風に心を塗り替える　花梢
さわやかな出合い十月の花を買う　吸江
十字きる胸の原罪消すように　絹子
十指みな器用に使い手話なごむ　初枝
十全と書いた小石に蹴躓づく　鐘造
十代の未練まぶしい日もありぬ　和子
あと十年はずんでいたい胸の毬　政代
十本の負けず嫌いの指がある　しげお
十代で地獄見て来た反戦歌　美房

**豊中もくせい川柳会　田中正坊報**

正論へ異議を唱えるへそ曲り　計光
国歌斉唱うたわない人歌う人　正坊
秋夜長斜め読みする文庫本　きく子
親心読めず子どもは親離れ　一笛
肚の内読まれ私の負けですわ　英子
雪月花残る命をしみじみと　慶子
しみじみと写経の筆をとる絆　明光
大役に二十四時間短過ぎ　悟郎
大役を引き受け男泣き笑い　〆女
主婦という大役ライト当らない　楓楽
力強くジンクス破りに挑戦す　吉太郎
マラソンの汗に順番つけられぬ　路児
表札も息子に替えて七回忌　登代子
本当の声で笑える小さい家　瀧小
新米の華やぎ亡母よ召し給え　薫
ときめいて今日覆く靴が決らない　紫香
人間の嘘にあきれて陽が沈む　勝
主の祈り唱えて核のボタン押す　寿美子

## 大阪文化祭川柳大会受賞句

平成七年十一月十八日

遊ばれているなおんなに火の匂い　玉利三重子
麻生菩薩はふくよか秋を満たされる　墨作二郎
ブランコの上で花園越えていく　吉田美沙子
阿呆になって流れの向きをそっと読む　うつみ仙吉
死亡欄辺りの坂の凄い夕焼け　河瀬芳子
合格をした番号の傷だらけ　土田欣之
乱を制する鬼一匹を彫りあげる　河瀬芳子
平成七年語り伝えること多き　瀬川幸子

昨春、同居の義母が他界致しましたので
年賀の儀は、失礼させて頂きます。

新家完司

# 本社 十二月句会

十二月七日(木)午後五時半
メンズファッションセンター

師走に入り急に冷え込みの厳しくなった七日夕、本年締めくくりの句会は、八十一名の参加により開催された。

お話は野村太茂津氏、戦後五十年に当たるこの一年を振り返る。一月の天災にはじまり三月の地下鉄サリン事件など前代未聞の事件が相次いだ。教育界ではいじめにより小さな命を自ら断つ出来事を悲しみ、沖縄の少女暴行事件に憤り、金融界、政界の不祥事を嘆く。

自身は一月の震災直後、片方の腎臓を摘出、尿管の腫瘍を切る大手術に耐え、戦争で拾った命をもう一度拾い生き延びている幸せをかみしめているという。人は年齢相応に衰えてゆくが、逆らわず自然体で受け容れ、名利を求めず、他人の長所を認め、和を大切に生きることをモットーにしていると締めくくる。

月間賞は高田美代子さん(藤井寺市)に輝く。

(司会—岳人)　(記名—月子・弥生)
(受付—しげお・たず子・房子)

## 席題「おでん」　板野美子選

芽の出ない靴でおでん屋むいている　一風
わたくしを酒呑みにしたおでんだね　天笑
今日の不満おでんの辛子効いてくる　典子
おでん屋へ来るカップルは深い仲　シマ子
おでんやののれんハタハタ師走です　弘直
おでん囲むと亡父が正面いるみたい　一歩
もう三日おでんが続くひとり者　昭子
仏さま今日はおでんを煮きました　鬼遊
夫婦別姓あなたの味にするおでん　重人
オリオン座きれい明日はおでんにしょ　度
熟睡をさせたおでんの旨いこと　満州
感情のしこりぐつぐつおでん鍋　諷云児
おでん屋の匂いが僕をさし招く　鹿太
おでん屋の湯気が景気を予測する　武庫坊
おでんできゅっと冬の情けを飲んでいる　洋
見知らぬ町で一人おでんを食べている　正坊
おでん屋の手柄話は焦げくさい　憲太郎
おでんこんにゃく哀しいことはポケットに　薫
おでん鍋湯気に本音が消えてゆく　正雄
断酒しておでんの風にある試練　恭昌
おでんの匂　いつか身内にたぎるもの　みつ子
支度してきたおでんぬくめているだろか　茜
人待ち顔で煮えるわたくしのおでん　森子
おでん屋でゆっくり酔うてから帰る　月子
おでんふうふう美人とマンガ読んでいる　源一
ころが好き今のおでんにころがない　昭子
ころ消えて居酒屋に吹くすきま風　金太
今日は特別おでんにころがまぎれこむ　美代子
張り込みの横でおでんの煮える音　章久
おんなの駅においしいおでん鍋が待つ　希久子
おでんぐつぐつ木枯しと帰る　茜

佳

素敵なおじさまとおでん屋へ寄り帰ります　礫
それからの話が弾むおでん鍋　美代子
冗談とおでん肴にうまい酒　天笑
おでんぐつぐつ恐れるものは何もなし　いわゑ
流れ流れて今日もおでん屋の隅にいる　弥生

人

おでん煮つまり答まだ出ない　寿美子

地

おでんでも炊いとこ誰か来る予感　月子

天

ぐつぐつとおでんの煮えるころ契る　森子

軸

零から生まれ零で死のうよがんもどき　美子

## 兼題「破る」　池森子選

兄弟喧嘩　襖破っておさまった　東雲
ビリビリと空気破って歳の暮れ　美代子
記録とは汗と涙で破るもの　露児
規則規則少し破って生きてます　洋
門限を破り娘も食べ頃に　度
マジシャンはお札破って見せてから　かすみ
凡人の掟を破るのはピエロ　射月芳
団体で掟を破るすごい音　東雲
突破口　森が泉をくれました　典子

新しい風が破ってくれたウツ　天笑
花時計とうに約束破ってる　三男
君となら掟破って風に乗る　勇太
約束を破った糸がもつれ出す　重人
嘘一つ見破るほどの月明り　勇太
サヨナラのつもり約束すっぽかす　美代子
破ってつないで黄昏れてゆく夫婦の絵　希久子
読んだらすぐ破って捨てて下さいね　礫
退屈な男を破り恋をする　美子
約束を破ってひとり飲むワイン　金太
白いばらおきて破ってみたくなる　いわゑ
美しく花絵破って訣れよう　太茂津
友情に甘えて破る借用書　愛論
灰皿を落し緊張感がとれ　天笑
愚かさに気付き昨日の殻破る　みつ子
泣く場所が欲しくて真夜中を破る　美子
殻破った子亀の目には海無限　洋
友情を破る綺麗な横顔だ　たず子
忘れたい記憶を破り捨てる海　笛生
破局への予感ペンダントが切れる　諷云児
破るため書く返信のない手紙　茜
ゲンマンを忘れていたぞ途中下車　重人
佳
幸せを破る女文字の手紙　みつ子
鶴千羽祈りは雲を突き破る　一風
約束を破った母を待っている　寿美子
約束を破ると枯れる花時計　たず子
破るのが恐くて逃げている掟　茜
人

この殻を破れば春の絵が描ける　鹿太
地
女文字縦に破ってからひとり　しげお
天
反古にした約束寒い長い冬　正雄
軸
しっかりと破って真ん中を歩く　森子

## 兼題「汚い」　板尾岳人選

自分からバッジはずした汚い手　蕗児
汚いことは言いっこなしよ十二月　美代子
にっちもさっちも行かない時の汚い手　寿美子
便所掃除好んでしてる訳でなし　笛生
核の海わたしも汚染されそうだ　金太
どろんこの子が一人も居ないA団地　英子
提灯の汚れた店の美味いカツ　〆女
裏街の汚い飲み屋大好きだ　紫香
不思議にも汚いラーメン屋が流行り　月子
洗剤のあぶくを泳ぐモラリスト　薫
汚い軍手父の仕事が干してある　一風
少しずつ汚れ大人になっていく　昭子
冴えた月汚い地球笑うてる　洞庵
贈られし言葉の裏側の汚れ　森子
河を汚してのひら汚し老いたロバ　薫
うっかりと子ヤギに見せた汚い手　かすみ
汚い手で得た幸せは逃げていく　一風
分身のように汚れた辞書を持つ　いわゑ
汚れても手を洗わない訳がある　みつ子
ゴキブリに住み良いうちの台所　希久子

手を汚さないから言える綺麗ごと　洋
ほっといて汚い口は生まれつき　諷云児
よごれ役好きでやってるわけでない　憲太郎
口汚いが心やさしい河内弁　洋
手の切れる万円札にもある汚れ　勝美
汚さに母性本能くすぐられ　典子
サリンではないが空気が汚れてる　鬼遊
吊り革に汚れた首を覗かれる　美津留
どうしよう汚い靴が写ってる　かすみ
匿名で中傷をする投書欄　たず子
仕事着の汚れを父は自慢する　たもつ
佳
フランスパン買わぬと決めた核汚染　正雄
汚い金はほうびの美学抱いている　隆
お便所の掃除が好きなお母さん　月子
私生活とてもきれいな汚れ役　三男
泥んこの無邪気へ一緒に跳ねてやり　千歩
人
大根の汚れに母の手が温い　狸村
地
玄関に一番汚い父の靴　武庫坊
天
汚い手使って兄ちゃんを負かし　ダン吉
軸
どぶ川に牛若丸が落ちました　岳人

## 兼題「客」　高杉鬼遊選

ままごとのお客になって花の下　みつ子
来客へ茶柱が立つ菊日和　英子

珍客へ一番風呂が沸いている　しげお
常連が隅へ隅へと追いやられ　悟郎
人力のお客になって嵐山　一歩
スーパー開店客の流れが変わる駅　正雄
神様の客は気まぐれ足まかせ　章久
来ぬ客の足音を待つスープ皿　諷云児
コンビニへ不意のお客に走らされ　頂留子
姑という客が来る肩の凝り　吐来
客帰り白菜漬けで呑み直す　典子
珍客が夫婦喧嘩を忘れさせ　洋
先客がありお土産を出しそびれ　〆女
珍客が茶碗運んでくれている　天笑
オキナワに招かぬ客が腰据える　正坊
腰深く折り自販機の客となる　希久子
観光客として通る原発の岬　薫
常連を客と思っていない猫　保州
観客にあぐらかいてたタイガース　三男
開店の粗品に用のあるお客　度
愚痴ばかり並べて帰る妻の客　鹿太
陣太鼓鳴らしてやってきた刺客　正坊
開店記念キミもアナタもみなサクラ　一二三
招かざる客かも知れぬドアチェーン　みつ子
コンビニに客足とられ冬に入る　憲太郎
父ちゃんが料理している客らしい　月子
爪先に時雨の泥を通夜の客　薫
真っ先に招待されぬ客が来る　美代子
ときどきは客から土産貰う店　紫香
その他大勢のんびり客の中にいる　たもつ
かあさんがやさしくなっているお客　冬葉

佳

来客か部屋は綺麗になっている　東雲
常連でみんなマダムに惚れて来る　笛生
客も親爺も一癖がある骨董屋　武庫坊
割烹着持参の客はくにの母　鹿太
客扱いにされて実家で昼寝する　白渓子

人

お正月　小さな客がどっと来る　美代子

地

雪の夜の客は無口のまま帰る　美子

天

セアカゴケグモが町までやってきた　天笑

軸

葬儀屋の電話おおきにとは言わず　鬼遊

## 兼題「ごめん」　西田　柳宏子　選

ごめんとは言わず弁解ばかりする　房子
だんじりに天下ごめんの顔がある　狸村
ごめんとは言わぬがみやげ提げている　千歩
今日もまたごめんごめんと夫婦箸　一風
残業はごめん過労死嫌だから　諷云児
核はごめん地球は青いままがいい　ダン吉
ごめんなさいの言えない代議士いて困る　たもつ
大臣の失言ごめんではすまぬ　保州
足踏んでごめんと言えば済んだこと　笛生
ひと言のごめん聞かせて欲しかった　〆女
紅殻格子京ははんなりごめんやす　たず子
横向いてごめんごめんと逆らわず　太茂津
ごめんなさい咄嗟に言えるお人柄　英壬子
男にはごめんと言えぬ意地がある　武庫坊
ごめんとは言わぬ夫が頼もしい　典子
ごめんなさい言えない舌がもどかしい　諷云児
ごめんねで済む喧嘩ならしてもいい　寿美子
爪噛んでゴメンと言えず隅にいる　愛論
抵抗も無く嫁さんにすぐごめん　一二三
ごめんごめん夫がカブト脱ぎました　正坊
ごめんねととても妻には言いそびれ　笛生
ごめんの一言わだかまりが消えた　金太
近頃のパパはごめんとだらしない　隆
妻の足踏んでごめんと言うとこう　東雲
花束にごめんと書いて夫から　月子
意地張ってごめんが言えず長い冬　たず子
菓子箱にごめんを詰めた仲直り　正雄
ごめんねと男あっさりまるめられ　萬的
ごめんまだ言えず蒲団は別々に　月子
一言のごめんが言えぬ反抗期　恭昌
ごめんねと心の奥の水子塚　正雄

佳

膝の子にごめんなさいをまず教え　たもつ
ごめんなさいと何時も言ってる花鋏　度
ごめんねのひと言空気軽くなり　昭子
ごめんねと日記の中でだけ言える　森子
ごめんなさい言えずひとりで拗ねている　みつ子

人

ごめんねと背ないっぱいに書いてある　義子

地

ゴメンネが妻の前ではすぐ出ない　金太

天

ごめんなさい口癖　母の市場かご　茜

軸

ご免ごめん妻に謝る日が増える　柳宏子

**兼題「万歳」　橘高薫風選**

平成七年を万歳でしめくくる　月子
二十一世紀万歳をして迎えたし　典子
御来迎思わず万歳したくなる　萬的
高い所に立つと万歳したくなる　たもつ
百点の子に万歳をしてあげる　一風
雑草の花にバンザイしてあげる　蕗児
万歳と送る新婚　いとおかし　哲夫
お子さまランチの旗で万歳して食べる　森子
定年万歳妻の手綱が緩くなる　諷云児
万歳は憶えていない二日酔い　保州
人様のために万歳しています　房子
不景気が続き万歳してみせる　射月芳
ハガキ一枚万歳叫びたい中味　太茂津
頼りない味方万歳をしてくれる　一風
万歳の裏に気付いた帰り道　勇太
幹事さんバンザイの機を見逃がさず　蕗児
万歳をするみんな私の指である　美子
万歳をしながらうしろ向いてる子　紫香
万歳をするといまだに疼く傷　諷云児
やけくそでバンザイ三唱して別れ　寿美子
日本人何でも万歳して別れ　〃女
万歳が済んで仲間とコーヒー飲む　白渓子
万歳はする気がしない紙コップ　美代子
あたり前のように万歳させられる　茜

こころのなかで万歳をするそれでよい　礫
万歳は兵につくときただ一度　洞庵
万歳の形でホールドアップする　希久子
戦争と平和　万歳にも歴史　洋
道のりは遙か万歳一瞬ぞ　隆
万歳に送られ海ゆかばで帰り　恭昌
いつの日に万歳出来る沖縄よ　美津留
幾萬の天皇陛下万歳よ　保州

佳

万歳三唱心ひとつになっていく　いわゑ
万歳を確かに聞いた夢の中　千歩
万歳はわたしの悲鳴かも知れぬ　金太
蓐麻疹ひろがる万歳の背中　薫
婦人会も万歳三唱して終る　シマ子

人

とどめさすまで万歳してならぬ　悟郎

地

頑なに万歳はせぬ元兵士　恭昌

天

**万歳を自分に言った兵の墓**　美代子

軸

ややあって何が万歳やと思う　薫風

（清記―希久子）

## 川柳塔社常任理事会（12月1日）

▽定本西尾栞句集刊行について　戦前・戦後『川柳塔』以後の三部構成とし、1200～1500句を収録する。川柳塔社発行でA5判・約350ページ・1000部・頒価3000円とし、3月中に完成する。高杉鬼遊をチーフとして集句し、橘高薫風・西田柳宏子・小出智子が選句にあたる。

▽相馬銀波（弘前市）高田美代子（藤井寺市）中塚礎石（相生市）刈田泰司（西宮市）の4氏を同人として承認。

▽川上三太郎句碑建立基金に川柳塔社として拠金する。

▽事務局の納糸葉さんの病気辞任に伴い、現在勤務中の鍛原千里さんを後任として委嘱する。

▽平成2年に内定した役員に関する了解事項にその後、申し合わせた事項を追加し、成文化して1月常任理事会で審議する。

**平成七年本社句会全出席者**　黒川紫香

阿萬萬的・金井文秋・笠原吸江・吉岡美房・榎本吐来・堀端三男・福本英子・河内天笑・坊農柳弘・桝本蕗児・松原寿子・河井庸佑・田辺鹿太・芳地狸村・川原章久・一本勇太・板尾岳人・宮崎弘直・吉村一風・池森子・籾山隆・北勝美・前たもつ・江口度・西田柳宏子・小池しげお・宮崎シマ子・藤田頂留子・平松かすみ・柴田英壬子・高須賀金太・岩佐ダン吉・冨山ルイ子・山下美津留　（36名）

■各地句会だより

# 川柳塔おっぱこ吟社

木村　あきら

当吟社は前会長の故松村迷観子氏に誘われて、昭和六十年五月十一日、白鳥公民館で十数名のメンバーにより発足いたしました。

その後、紆余曲折を経て現在に至っていますが、発足当初から例会を毎月二回（第一・第三日曜日）午後一時半から、約二時間の日程で進行して来ましたが、約半数の方々は仕事があり、婦人方は洗濯やら家事に手間を取られ、句会の出席率が五〇パーセント前後で、若干盛り上がりに欠ける嫌いがあります。

欠席者にもできるだけ投句はされるよう申し入れ、何とか今日までまいりましたが、都合がつけば年一回ぐらい、吟行をしてはどうかと腹案を持っております。

句会には、兼題一題と自由吟一題、各三句を出句し、兼題を前会長当時は迷観子選とし、自由吟は出席者の共選として参りました。平成六年二月、前会長の死去により、その後は三人合議制となっております。

会長・木村あきら、副会長・成重放任、会計・川崎ひかりで運用。兼題の選者は、川柳塔社同人の中から六名が、二か月交代で当たっております。

当吟社事業としては、百号記念合同句集の発刊と、木村あきら（明人）句集『あしあと』発刊、工藤吟笑句集『虎丸』発刊。迷観子句碑建立。平成五年八月に、故西尾栞名誉主幹、橘高薫風主幹（当時理事長）の句碑建立。同

六年十一月、木村あきら句碑、工藤吟笑句碑を建立しました。

昨年十月十五日、句報二百五十号記念川柳合同句会開催。平成四年九月、第一回川柳大会開催（参加百三十五名）。同五年八月、西尾、橘高両先生句碑建立記念川柳大会開催（参加百四十八名）。同六年十一月、木村あきら、工藤吟笑句碑建立記念合同句会を開催しました。

その他、全日本川柳愛媛大会に六名参加。ほか県内川柳大会に参加数度。研修としては岡山県弓削川柳公園の句碑探訪（五名）。岡山由加山句碑探訪（四名）。川柳塔八百号記念川柳大会へは木村あきらが参加しました。

昨年十月一日の川柳塔まつり、前夜祭とも欠席したのが悔やまれてなりません。いずれ時機を見て本社との交流を計りたいと思っています。

今後の課題としましては、京阪神その他の友好吟社へ積極的に参加し、他流試合?を通じて技を磨くことを会員に周知したいと考えていますが、なかなか一朝一夕にはまいりません。

柳歴の浅い我々のため、各方面の多大のご支援を切望するところでございます。何とぞよろしくご指導をお願いいたします。

# 柳界展望

★出雲総合芸術文化祭・川柳大会は**11月5日**、出雲市民会館で開かれた。各題天位句は次のとおり。

みかんむく手からしずかに冬が来る　岸　桂子

清らかな情けは無口から溢れ　園山かおる

明日出す切り札も一度確かめる　伊藤　寿美

嬉しくて蝶々結びしてあげる　佐々木鳳笙

魚臭の町で魚を干さぬ日が続く　政岡日枝子

モナリザの視線わたしを外さない　福間　佳江

夢を追う男に酒が味方する　竹治ちかし

また、入選句数順位により出雲市長賞ほかが授与された。①竹治ちかし②赤松牛歩③勝部操子

★第42回八尾市文化祭は**11月12日**、115名が参加して八尾文化会館で開かれ、同人の江口度氏が秀句賞を獲得した。

拝観料を払う牡丹を見るために

★川柳塔鹿野みか月記念川柳大会は**11月12日**、鹿野町営国民宿舎・山紫苑で163名が参加して開かれた。当日の各題天位入賞者は次のとおり。

名案が浮かび大きな海に出る　田中　友子

弓を握って本能寺本能寺　鈴木　公弘

昨日から峠に座り込んでいる　鈴木　公弘

喝采のあと突きあたる固い壁　河原　千寿

永らえてからの命の置きどころ　矢内寿恵子

制服をたたむと唯の女の子　舟木与根一

哀しみの卵割れないようにする　松本　文子

お化けが二人しこしこ冬の用意する　政岡日枝子

また、同大会では総合8位まで鹿野町長賞その他を贈り、政岡日枝子さんに山陰合同銀行鹿野支店長賞、森山盛桜氏に知事訪問記念杯が授与された。

①中原諷人②山本玉恵③森中恵美子④八木千代⑤武田帆雀⑥江原とみお⑦松本文子⑧小島蘭幸

★『川柳万画』刊行記念句会は**11月19日**、90名が参加して伊丹市立生涯学習センターで開かれ、次の各氏が各賞を獲得した。

〈玉露賞〉

切っ先を社会に向けて描くマンガ　奥田みつ子

〈読売新聞社賞〉

羊水の中で掴んでいる未来　田中　輝子

〈伊丹市教育長賞〉

菊薫る笑い戻って来た街に　福本　英子

〈伊丹市会議長賞〉

伎芸天女に足をとられて動けない　西口いわを

〈伊丹市長賞〉

途中下車清い空気が欲しくなる　阪本　国公

〈阪神県民局長賞〉

木枯らしの情け大根旨くなる　奥田みつ子

★三幸川柳教室は新主幹に桜井千秀氏を選任した。

## 新同人紹介

**中塚　礎石**
—紫香・萬的推薦

**高田　美代子**
—薫風・吸江・美房推薦

**相馬　銀波**
—甲吉・五楽庵推薦

**刈田　泰司**
—薫風・みのる推薦

# 川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町4535－5

小　島　蘭　幸　方

あけましておめでとうございます

本年は創立40周年記念川柳大会を９月８日に
開催致します
ご支援よろしくお願い致します

**会監会**

**計査長**

山内　森井　石原　藤解　古田　古田　岩本　岡本　古谷　三宅　岩本　時広　小島

ほか一同　房子　菁居　淑子　静風　比呂子　太虚　文晴　清水　節夫　不朽　笑子　一路　蘭幸

# 献　寿　平成八年

あけましておめでとうございます

# 川柳塔鹿野みか月

第16回(満15周年)記念大会のご支援ありがとうございました。お陰様で盛会になりました。会員一同こころより御礼申し上げます。ことし11月10日(日)第17回大会もご支援くださいますよう伏して偏に、よろしくお願い申し上げます。

会長　土橋　螢
副会長　森山　盛桜
事務局長　中原　諷人
石尾　かつ乃
乾　喜与志
乾　隆風
岩崎　みさ江
大角　正道
大角　幸代

太田　幸枝
黒田　くに子
田村　きみ子
津村　八重子
土橋　睦子
土橋　はるお
中原　汲香
中原　みさ子
西川　和子
西浦　小鹿

加藤　公子
国森　武子
竹森　富久江
田中　きみゑ
徳田　圭子
安井　博子
山岡　久枝
吉田　孔美子
谷口　百合子
中澤　正恵
森　明美
山根　茂

ほか会員一同

☆事務局　〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279　中原諷人方
電話（0857）84－2100

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

**米子　川柳塔きゃらぼく**

石垣花子　木村春枝　野坂なみ
青戸田鶴　小村てい子　服部朗子
足立由美子　雑賀美世　林荒介
新　正子　さえきやえ　林瑞枝
池尾保子　坂口一江　原田紫布
石中時子　澤田千春　広江富枝
猪森すみえ　塩谷八重子　福代天雀
大塚恵子　白根ふみ　堀江美月
鹿島蘭　菅井知子　政岡日枝子
門脇晶子　田中亜弥　光井玲子
金山夕子　寺沢みど里　三好寿々子
川上より子　富永のり子　茂理高代
神崎あいこ　中井ゆき　矢野満子
木村冨美子　中野弘子　八木千代

# いずも川柳会

先輩各位のご支援を受けて、創立70周年の記念句会を開く運びとなりました。

5月19日、新緑の出雲路への吟行を心からお待ちいたします。

会長　久家代仕男

会員一同

---

## 大阪市交通局互助組合文化部川柳部

あけましておめでとうございます

1996年元旦

川柳部長
田宮義司

大交会友好対策部長
坂本利夫

浅田河南子
安孫子我勝
石橋美子
井上やすお
岩井本蔭棒
大野勝治
岡本天平
小野原隆一
河嶋かずお
川田和子
川内叭笑
川端一歩
小坂雅計
児島与呂志

佐藤須賀夫
塩満　敏
四宮酔照
渋谷　弘
高木信酔
高須賀金太
高村親章
武田青道
田代亜希子
多田多香
田中笑風
玉置重人
田村良花
椿　敦彦
手崎川童
中原比呂志
中村喜楽
鍋島一介
西尾たつお

西岡洛酔
狭間希久志
橋本雅巣
長谷川　司
福崎しげお
藤田　雅
坊農柳弘
松本哲夫
森岡美代子
森田太元
森松まつお
森村美花
門野隆司
山口末坊
山下美津留
山田かよこ
山田清子
山本柳昌
芳　鉄心

新年おめでとうございます

# 三幸川柳教室

会員一同

明けましておめでとうございます

# 八尾市民川柳会

一同

# もくせい川柳会

橘高薫風
黒川紫香
安藤寿美子
一瀬福一
江口明光
岡本吉太郎
木村一笛
岸田知香子
北山悟郎
栗原富子
田中薫
田中正坊
滝北博史
玉置英子
辻川慶子
春城武庫坊
星野登代子
桝本路児
松本ただし
満仲きく子
三宅つえ子

定例句会　毎月第３月曜日　豊中市立中央公民館

あけまして
おめでとうございます

# 城北川柳会

連絡先
〒675-01 加古川市平岡町新在家二〇〇六―八
吐田公一
電話（〇七九四）二二―三六八一

---

謹んで新年の
お慶びを申しあげます

**とっとりせんりゅう会**

池本山人
岩田輪多朗
岩原喬水
石上悦子
坂田和歌子
武田帆雀
武田粗粒
谷口侑里
春木圭一郎
橋本多歌由
前田一枝
宮木一夫

---

## 謹賀新年

正本水客
黒川紫香
阿萬萬的
辻白渓子
松川杜的
川島諷云児
藤村〆女
竹内花代子
松川芳子
奥山美智子
笠嶋恵美子
冨山ルイ子

あけましておめでとうございます
本年もよろしくお願い申し上げます

# 川柳若葉の会

橘高薫風
指宿千枝子
大福留吉
黒田能子
椎江清芳
中島田実子
古川喜美子
宮本欣史子
宮崎弘直
宮崎シマ子
山内香住
吉田あずき

新年おめでとうございます

笠原吸江
吉岡美房
中島志洋
福元みのる
川端六点
高津三郎
赤木和子
高田美代子
楠昭子
武部敦子
福田悦子
高田治子
児島与呂志
他一同

# 川柳藤井寺

あけまして
おめでとうございます

# はびきの市民川柳会

安芸田泰子
芦田絢子
内田さとみ
川田晋
酒井一壺
徳山みつこ
西村りつえ
福田悦子
山本たけし
吉原辰子
榎本吐来
塩満敏
清水利武

あけましておめでとうございます

## わかあゆ川柳会

島根県大原郡木次町四六一

小砂白汀　細木歳栄
石田清泉　福間博利
谷岡芳枝　松本聖子
松本はるみ　菅田かつ子
藤原鈴江　渡部好栄
北川民子　武島ちよえ
森山英子　渡部ふじ子
小田川智重子　渡部菜々
河原恵美子　石田一宇
庄司利治　松浦洞然

賀　春

## 川柳塔まつえ吟社

同人一同

〒690 松江市雑賀町1686　恒松町紅方

電話　0852－24－5450

おめでとうございます

## 熊本川柳会

有働芳仙
鶴田謹爾
高野宵草
北川一進
永田俊子
宇野照代
大川幸子
岩切康子

謹んで新春のお慶びを申し上げます

平成8年 元旦

# 川柳ささやま一同

代表 遠山可住

# 南大阪川柳会

会員一同

あけまして おめでとうございます

吉井 山川 森山 椋田 前田 松本 藤原 古川 中山 中田 富永 玉置 滝北 田中 酒井 嵯峨根 近藤 黒崎 日下 北村 木村 岡田 奥村 岡本 江口 上田 井上 池田 行田 一瀬 稲葉 月原 湯浅 井上 橘高

他一同 竹二 郁子 紫水 祥司 昭子 ただし 桂子 喜美子 キヨ子 純次 敞子 英子 博史 螢柳 瀧小 保子 洋子 恭子 万之助 正安 一笛 幸子 しずえ 吉太郎 明光 佳秋 つよし 善守 清史 福一 眞郎 方郎 馬洗 直次 薫風

# ほたる川柳同好会

毎月第2火曜日午後1時から豊中市螢池公民館にて毎回薫風先生の御指導を受けております。　申込み・お問合せは 06－841－5265 井上まで

明けましておめでとうございます

# 川柳塔わかやま吟社

300号記念川柳大会へのご支援ありがとうございました。本年もよろしくお願い申し上げます。

**顧問**

桑原道夫　中島正博
坂口公子　中根勇太
坂部紀久子　西口忠雄

**主幹**

牛尾緑良　塩谷佐代子　福田和子
伊賀政一　杉山精子　福本英子
岩倉天彦　田中輝子　細川稚代
岩崎瑞穂　谷口信子　堀端三男
上杉信秋　玉井豊太　松原寿子
内芝登志代　垂井千寿子　宮口克子
大野武太　千原淳太郎　森三枝子
小倉アサ　寺田裕美　横垣忠翁
尾田綾子　天満三千代　若宮武雄
柿花紀美女　冨上光代
北山好笑　中井栄美子
黒瀬登紀夫　中後清史

ほか会員一同

**事務局および投句先**

〒641 和歌山市紀三井寺111－2　牛尾緑良
TEL 0734－46－2855

あけましておめでとうございます

# 西宮北口川柳会

例会　毎月第２月曜日午後１時　西宮市立中央公民館

（阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西５分）

**事務局および投句先**

〒663 西宮市段上町6－6－2－202　奥田みつ子

黒川紫香
秋元てる
上田佳秋
奥田みつ子
奥山美智子
小熊江美
小倉藍
門谷たず子
亀岡哲子
菊池トミエ
木村貴代子
久保まさお

黒田能子
西口いわゑ
林はつ絵
春城年代
春城武庫坊
藤村〆女
牧渕富喜子
丸山よし津
山崎君子
山本義子
吉田笑女

あけましておめでとうございます

# 川柳塔社

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主幹 | 橘高薫風 | | |
| 理事長 | 西田柳宏子 | | |
| 副主幹 | 小出智子 | 高杉鬼遊 | |
| 副理事長 | 板尾岳人 | 宮口笛生 | |
| 常任理事 | 河内天笑 | | |
| | 岩佐ダン吉 | 西口いわゑ | |
| | 榎本吐来 | 西出楓楽 | |
| | 奥田みつ子 | 春城武庫坊 | |
| | 川島諷云児 | 宮崎シマ子 | |
| | 河内月子 | 宮園射月芳 | |
| | 小池しげお | 山下美津留 | |
| | 田中正坊 | 吉岡美房 | |
| | 高須賀金太 | | |

**川柳塔社常任理事会**

# 1 月 各 地 句 会 案 内

| 句会名 | 日時と題 | 会場と投句先 |
|---|---|---|
| 尼崎<br>いくしま | 5日(金)午後1時から<br>頭・目立つ・雑詠(A・B) | サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩5分<br>〒661 尼崎市武庫之荘5－15－17　春城年代 |
| 西宮北口<br>川柳会 | 8日(月)**午後0時半から**<br>望み・甦る・頻り・自由吟 | 西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分<br>〒663 西宮市段上町6－6－2－202　奥田みつ子 |
| ほたる<br>川柳<br>同好会 | 9日(火)午後1時から<br>スタート・開く・摑む | 豊中市立蛍池公民館 阪急宝塚線蛍池駅西へ150米<br>〒560 豊中市蛍池中町3－10－28　井上直次 |
| 八尾市民<br>川柳会 | 10日(水)午後6時から<br>宝・写す・トップ・人気 | 八尾市文化会館4F　近鉄八尾駅すぐ<br>〒581 八尾市上之島北1－15　宮崎シマ子 |
| 堺川柳会 | 11日(木)午後1時から<br>包む・広い・大根・出る | 堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入る<br>〒593 堺市堀上緑町2－16－3　河内天笑 |
| 川柳塔<br>まつえ | 13日(土)午後1時から<br>宝・飾る・筆 | 松江市雑賀町　雑賀公民館<br>〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅 |
| 富柳会 | **14日(日)　正午から**<br>始め・上・自由吟 | **〝おのや〟** 近鉄富田林西口下車すぐ<br>出席の方は3日前までに池森子にお電話下さい |
| 川柳塔<br>わかやま | 14日(日)午後1時から<br>寿・願い・白 | 近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前<br>〒641 和歌山市紀三井寺111－2　牛尾緑良 |
| もくせい<br>川柳会 | 15日(月・祝)午後1時から<br>原因・立つ・賢い・自由吟 | 豊中市立中央公民館　阪急曽根駅東南歩5分<br>〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊 |
| 高槻川柳<br>サークル<br>卯の花 | 18日(木)　正午から<br>抱く・運・チャンス・自由吟 | 高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分<br>〒569-11 高槻市宮田町3－8－8　川島諷云児 |
| 南大阪<br>川柳会 | 19日(金)午後6時から<br>美味しい・工作・相当・土性骨 | 玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分<br>〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋 |
| 岸和田<br>川柳会 | 20日(土)午後1時半から<br>土産・無用・目もと・詣でる | 市立福祉総合センター2F　南海線岸和田駅東歩3分<br>〒596 岸和田市上松町610－85　芳地狸村 |
| 川柳<br>ねやがわ | 21日(日)**午前11時から**<br>誕生・リッチ・頭・相撲吟 | **寝屋川市民会館** 京阪寝屋川市駅東口からバス市民会館前下車<br>〒572 寝屋川市春日町9－9　高田博泉 |
| 京都<br>塔の会 | 25日(木)午後1時から<br>凧・明ける・小銭 | 京都府南労働センツルメント　近鉄東寺駅西徒歩3分<br>〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町　都倉求芽 |
| 東大阪市<br>川柳<br>同好会 | 27日(土)午後6時から<br>希望・まだ・回る・化粧 | 東大阪市立社会教育センター　近鉄布施駅北長堂小学校隣<br>〒578 東大阪市稲葉3丁目3－21　片岡湖風 |
| はびきの<br>市民<br>川柳会 | 28日(日)午後1時から<br>仕事・もめる・ホステス・議員 | 羽曳野市立陵南の森公民館　近鉄高鷲駅北東歩10分<br>〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏 |

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

# 編集後記

★おめでとうございます。今年も一年間、つたない文章にお付合いいただくことになる。『10年日記』をつけはじめたのは一九九一年（平成三年）、はたして何年間つづけられるだろうかと思ったが、はや半ばを越し、今年で六年目となる。これを全ページ埋めるとジャスト二〇〇〇年、つまり二十一世紀である。

★もしこれが完結できれば私の晩年のささやかな金字塔となるわけだが、欲の深い私はもう一つピラミッドを築きたいと考えている。もう数え年というのははやらないが、一九二二年生れの私は明けて数えの七十五歳となる。ということは、後二年で七十七歳、世間で言う「喜寿」にあたる。これが古いとあれば、ラッキーナンバーのダブル7（セブン）としてもよい。

★そこでこれを記念して、一冊の本を刊行したいと思っている。その年で私が川柳をはじめて十五年にもなるので、その間の作品と、『川柳塔』などに書きちらしたエッセーをまとめた句文集とし、新年から準備にかかりたい。実はこれまで〝百句集〟を三冊出しており、こういうことはあらかじめ公けにすべきではないが、怠け癖のある私自身をしばるために、あえて活字にした次第である。

★この「編集後記」はここ数年来、編集部の奥田みつ子さん、西出楓楽さんと田中正坊の三人が担当してきたが、今年から高須賀金太さんにも執筆いただくことにした。ご期待とご叱正をお願いしたい。（正）

☆あけましておめでとうございます。暗いニュースの多かった昨年とは違って、今年は明るい年になるように心から祈るのみである。

「希望が人間をつくる。大いなる希望を持て」とは十九世紀のイギリスの詩人テニソンの言葉である。

☆今年は子の年、十二年前の子年の年賀状に「何を追い何に追われるこまねずみ（高杉鬼遊）」とあった。こまねずみとは二十日鼠の一種で小型で白く、籠の中で一生懸命、車を回している可愛い姿はお馴染みである。

☆二十日鼠は英語でマウス、欧米の家ねずみはマウスであるが、日本の家ねずみは少し大きく、英語ではラットにあたる。マウスはミッキーマウスなどと漫画でも親しまれ、いたずらはするが、弱々しい印象である。

☆一方、ラットは英語の諺にも「沈む船からネズミは逃げる」とあるように、落ち目になった党派や友人を見捨てるずるい人間、卑劣な者という俗語に使われる。世の中、住みにくくなって利に聡い人間が多くなっている。永田町界隈だけではないようだ。子年でもラットは増やしたくないもの。

☆鬼遊氏の句にならって私も一句―「今年また何を追うのかねずみの絵」（み）

## ひとこと

**ご投稿をお願いします**

この「ひとこと」欄は、平成五年一月号から設けてちょうど三年になります。前年の十二月号に予告したように、同人・誌友のみなさんが自由に意見を発表する場として設けたもので、その趣旨にそった投稿がかなり寄せられ、半ばその目的が達せられつつありますが、まだまだその数が少なく、特定の人にかたよっているのが現状です。

昨年十月に開かれた同人総会では、多くの方からさまざまな意見がのべられ、柳社としての今後の運営に大いに参考となりましたが今後はこの欄にも、編集部ないしは川柳塔社への批判・注文などをどしどしお寄せください。氏名は明記していただきますが、紙上匿名は結構です。秘密は厳守いたします。（編集部）

# 川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（3月号）　地名　　雅号

ワープロを前に腕組　呼がすぎ
甲くれてす

悪筆が目の目をみたと手紙　ケイフ

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

**同人**　・　**誌友**　マルで囲んでください。

# 「川柳塔」への投句について

①川柳塔蘭への投句は同人、水煙抄欄への投句は誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限ります。

②両欄とも、この投句用紙を使って8句をお書きください。

③渺湖抄欄・茴香の花欄および課題吟（一路集）への投句は、同人または誌友に限ります。ただし、茴香の花欄は女性だけです。

④各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

## 本社1月句会

とき　1月8日（月）午後5時半
ところ　メンズファッションセンター3F
中央区内本町1－1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点南西角
おはなし　板尾岳人
兼題　「駅」　河内天笑選
「風邪」　宮口笛生選
「芯」　小出智子選
「同じ」　高杉鬼遊選
「可能」　西田柳宏子選
「コーナー」　橘高薫風選
◎今月にかぎり席題はありません。
会費　500円

### 本社2月句会　7日（水）予定

兼題　「サイン」「点」「片隅」
「余り」「うなずく」

## 作品募集

3月号発表（1月15日締切）

川柳塔（8句）　橘高薫風選
水煙抄（8句）　西田柳宏子選
渺湖抄（3句）　小出智子選
茴香の花（3句）　八木千代選
「艶」　園山多賀子選
課題吟（3句）
「乗る」　亀岡哲子選
「ワープロ」　政岡日枝子選
初歩教室「開く」（3句）　吉岡美房担当

4月号
課題吟　「合格」「話す」「電話」
初歩教室「酒」

## 夜市川柳募集

第8回「筋」　河島いち子選
ハガキに3句　1月末締切
投句先　〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

## NHK川柳作品募集

課題「鬼」　河内天笑選
ハガキに3句　1月10日締切
投句先
〒540-01　NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表　1月27日（土）午前11時5分からラジオ第1放送（予定）

## 西日本文字放送作品募集

課題「鍋」　橘高薫風選
ハガキに3句　1月15日締切
投句先
〒540　大阪市中央区谷町2丁目2—20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料84円）
半年分　四千円（送料共）
一年分　七千九百円（同）
平成八年一月一日発行
編集兼発行人　橘高薫
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二—一〇—一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六九一—六九一四番
振替　〇〇九八〇—五—三三三六八番

●川柳・俳句・短歌集
●画集・写真集・絵本
●社史・小説・エッセー
●故人を偲ぶ追悼誌
●創業・喜寿を祝う記念誌
●郷土史

各種 本(製作専門)

■少部数の本も
取り扱っています。
■ご相談ください。

ミヤケ プランニング
MIYAKE
planning
〒557 大阪市西成区千本南1-12-8
電話 06-659-5514(代)
FAX 06-652-2928
ジェイ出版
電話 06-658-8741(代)

## 第1回 オール川柳賞募集！

## オール川柳新人賞／オール川柳作家賞

**選考委員**

大野 風柳・田口 麦彦・森中惠美子／橘高 薫風・斎藤 大雄・渡邊 蓮夫

締　切　平成8年2月末日（当日消印有効）
発　表　『月刊オール川柳』平成8年8月号誌上
賞　新人賞／作家賞：各部門とも正賞と副賞30万円。
※応募資格や要項の詳細は『月刊オール川柳』に掲載。

オール川柳は書店でお求め下さるか、直接定期購読もできます。

〒556大阪市浪速区恵美須西2－9－15㈱斉藤編集事務所内
月刊オール川柳社
TEL 06-634-5548 FAX 06-636-3832　郵便振替 00980-2-22728

雑誌 05703－1